第二期
上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画
調査報告書

We make enjoyable our lives with zero waste

2022年　3月策定

Zero Waste
Kamikatsu

目次

序章：本調査報告書の位置づけ 3
1　第二期ゼロ・ウェイストタウン計画　調査報告書の位置づけ 4
2　推進員会における協議 4
3　上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画の枠組み 7
1 章：仕組みづくり 10
1　ゼロ・ウェイストな暮らしを定着させる仕組み 11
2　経済が循環する仕組み 26
3　上勝マインドの継承者を育成する仕組み 36
2 章：コミュニケーション戦略 63
1　住民とゼロ・ウェイストの関係を良好にするコミュニケーション 64
2　世界からの参画を促進するコミュニケーション 88

序章：本調査報告書の位置づけ

１　第二期ゼロ・ウェイストタウン計画　調査報告書の位置づけ

本調査報告書は、別紙の計画書における計画を設定するために実施した協議、インタビュー調査、ワークショップ、プロトタイピングなどの調査結果を記述したものである。計画書と同様に調査報告書は、1 章で仕組みづくりに関する計画を策定する上で実施された調査、2 章ではコミュニケーション戦略を立案する上で実施された調査について記述する。

本章では、第二期ゼロ・ウェイストタウン計画を策定する前提となった上勝町ゼロ・ウェイスト推進員会における協議の内容について記述する。

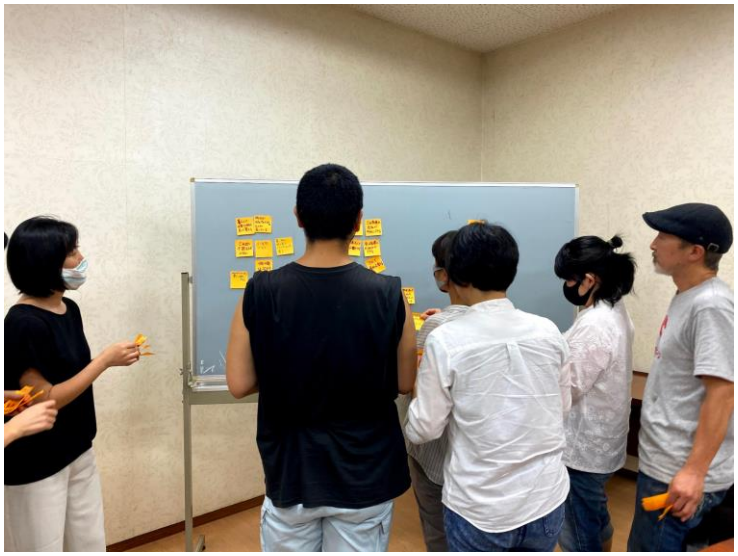
２　推進員会における協議

2020 年 5 月に上勝町ゼロ・ウェイスト推進員会にてゼロ・ウェイスト宣言に関する協議が始まった。ゼロ・ウェイスト推進員とは、上勝町から委嘱を受けて活動する廃棄物減量等推進員（廃棄物処理法第５条の８）のことである。現在 7 名（2022 年 3 月）のメンバーで構成されており、町内事業所の代表や一般廃棄物運搬支援員、ゴミステーション管理補助員、元 NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー事務局長、子育て支援団体代表などが務めている。主な活動内容としては、町民の環境行政に対する意見・要望等の町役場への連絡のほか、事業所に対するごみ減量や資源化促進に関する指導・助言、ゼロ・ウェイスト推進に係る町の施策作製に協力するとともに、実際に施策を実行する主体としても機能する。その他、上勝町内でのゼロ・ウェイストの普及啓発も活動内容に含まれている。この推進員会にて、新しい宣言を発表するか否かについて町役場と共に協議し、2030 年を目標とする新たな宣言を定め、発表することを決めた。

第一回ゼロ・ウェイスト宣言検討会議の様子

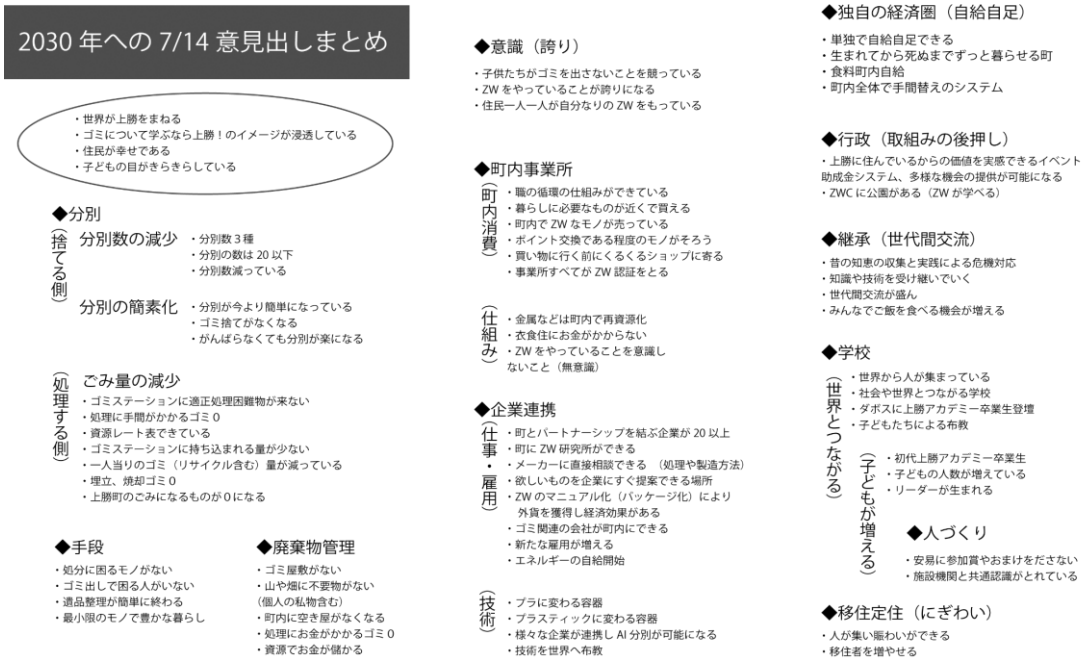
宣言の内容については、2020 年 7 月から週に一度企画環境課と推進員で会議を実施して格子造りを行い、その内容を基に副町長や町長に方向性について適宜意見を仰ぎながら作り上げていった。

格子造りを行う過程で、最初に取り組んだのは宣言から 17 年間が経過し、様々な取り組みの中で見えてきた課題の洗い出しであった。その上で、次の目標年に向けた注力分野を明確にする流れで進められた。



推進員会にて課題の洗い出しの様子

下図は課題について洗い出した内容を示す。各員がそれぞれの立場から感じているゼロ・ウェイストの現状への課題感をブレインストーミングにより出し合い、それをカテゴリーごとにまとめたものとなっている。



2030 年への 7/14 意見出しまとめ

・世界が上勝をまねる
・ゴミについて学ぶなら上勝！のイメージが浸透している
・住民が幸せである
・子どもの目がきらきらしている

◆分別

（捨てる側）

分別数の減少
・分別数 3 種
・分別の数は 20 以下
・分別数減っている

分別の簡素化
・分別が今より簡単になっている
・ゴミ捨てがなくなる
・がんばらなくても分別が楽になる

（処理する側）

ごみ量の減少
・ゴミステーションに適正処理困難物が来ない
・処理に手間がかかるゴミ 0
・資源レート表できている
・ゴミステーションに持ち込まれる量が少ない
・一人当りのゴミ（リサイクル含む）量が減っている
・埋立、焼却ゴミ 0
・上勝町のごみになるものが 0 になる

◆手段
・処分に困るモノがない
・ゴミ出しで困る人がいない
・遺品整理が簡単に終わる
・最小限のモノで豊かな暮らし

◆廃棄物管理
・ゴミ屋敷がない
・山や畑に不要物がない
（個人の私物含む）
・町内に空き屋がなくなる
・処理にお金がかかるゴミ 0
・資源でお金が儲かる

◆意識（誇り）
・子供たちがゴミを出さないことを競っている
・ZW をやっていることが誇りになる
・住民一人一人が自分なりの ZW をもっている

◆町内事業所

（町内消費）
・職の循環の仕組みができている
・暮らしに必要なものが近くで買える
・町内で ZW なモノが売っている
・ポイント交換である程度のモノがそろう
・買い物に行く前にくるくるショップに寄る
・事業所すべてが ZW 認証をとる

（仕組み）
・金属などは町内で再資源化
・衣食住にお金がかからない
・ZW をやっていることを意識しないこと（無意識）

◆企業連携

（仕事・雇用）
・町とパートナーシップを結ぶ企業が 20 以上
・町に ZW 研究所ができる
・メーカーに直接相談できる （処理や製造方法）
・欲しいものを企業にすぐ提案できる場所
・ZW のマニュアル化（パッケージ化）により外貨を獲得し経済効果がある
・ゴミ関連の会社が町内にできる
・新たな雇用が増える
・エネルギーの自給開始

（技術）
・プラに変わる容器
・プラスティックに変わる容器
・様々な企業が連携し AI 分別が可能になる
・技術を世界へ布教

◆独自の経済圏（自給自足）
・単独で自給自足できる
・生まれてから死ぬまでずっと暮らせる町
・食料町内自給
・町内全体で手間替えのシステム

◆行政（取組みの後押し）
・上勝に住んでいるからの価値を実感できるイベント助成金システム、多様な機会の提供が可能になる
・ZWC に公園がある（ZW が学べる）

◆継承（世代間交流）
・昔の知恵の収集と実践による危機対応
・知識や技術を受け継いでいく
・世代間交流が盛ん
・みんなでご飯を食べる機会が増える

◆学校

（世界とつながる）
・世界から人が集まっている
・社会や世界とつながる学校
・ダボスに上勝アカデミー卒業生登壇
・子どもたちによる布教

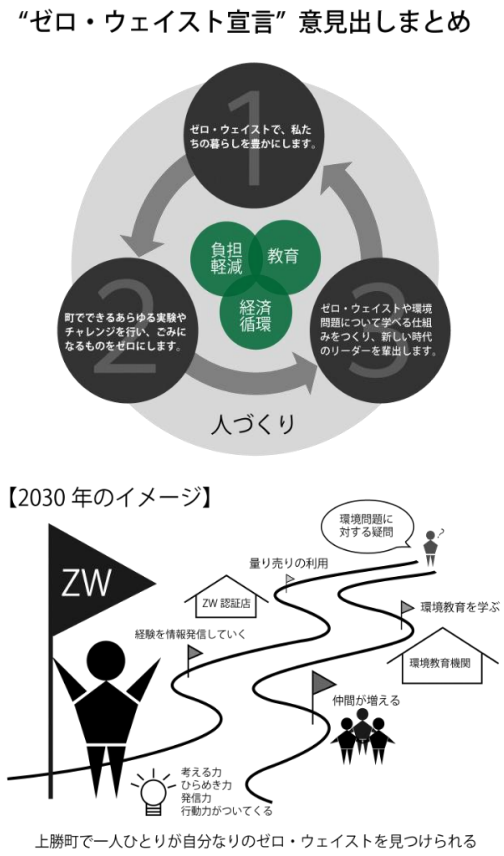
（子どもが増える）
・初代上勝アカデミー卒業生
・子どもの人数が増えている
・リーダーが生まれる

◆人づくり
・安易に参加賞やおまけをださない
・施設機関と共通認識がとれている

◆移住定住（にぎわい）
・人が集い賑わいができる
・移住者を増やせる

課題の洗い出し

ここで抽出された課題を整理した結果、3 つの柱（負荷軽減、経済循環、教育）が設定され、2030 年を目標年とする新しいゼロ・ウェイスト宣言が作成、承認された。下図は、宣言の内容と推進員会での議論がどのように紐づいているかを表している。



1. ゼロ・ウェイストで、私たちの暮らしを豊かにします。

- 誰一人取り残さない（SDGs）
- わくわくする町、夢を語り実現できる町
- 町民への成果報告（広報やポータルサイトで処理量や処理金額、還元金額、利用者数などを公開する）
- 町民還元（ちりつもポイントの拡充：地域通貨のようにできるだけポイント＝現金にする、受診するとポイントがたまる）
- 自分にとっての“ゼロ・ウェイストとは何か”をもっている
- 情報発信、情報共有（町内または世界に向けてウェブマガジン、広報折り込み、学校配布、ラジオ局など）
- ゼロ・ウェイストのシリコンバレー化（カネ、ヒト、コネ、情報などすべてが上勝に集まる）
- 上勝町活性化進行計画
  循環型社会をリードする町（環境保存）
  地域経済の活性化が図られる町（経済・雇用）
  若者が住みたくなるような魅力ある町（人口定住）
- 自給ができている
- 注目され続ける、上勝独自の世界観が生まれる、上勝＝ゼロ・ウェイストのイメージの定着
- 上勝＝ZW にギャップを感じさせない（町内全体、町民全員が負担なくある一定の ZW 基準を守っている）
- 上勝町の自然は守られ、きれいな空気や水を未来の子どもたちにも受け継ぐ
- ごみが出ない暮らし
- 無意識に ZW な暮らしをしている
- 分別数よりごみの量が少ない

2. 町でできるあらゆる実験やチャレンジを行い、ごみになるものをゼロにします。

- ゼロ・ウェイストチャレンジ補助金
- 企業誘致（リサイクル率残り約 20%へのアプローチなど）
- 暮らしのなかのゼロ・ウェイストチャレンジ大賞（子どもの夏休み宿題部門、暮らし方部門、ゼロ・ウェイストを助けるモノ・コト部門など→大賞受賞者はやりたいことができる券、情報発信や商品化など）
- ゼロ・ウェイスト認証事業所を選定する（基準：裏紙の利用量、廃棄物量、再生エネルギー量など）
- プラスティックの代用品を開発（町内産の杉などを利用）
- 分別数を減らす
- 町内生産かつ町内消費できるものは資源で包装する
- 町外客にはデポジット制度を設け、町内で推進するリサイクル商品を使用し返却してもらう
- マイボトル制度（店舗と協力しマイボトルがある人には晩茶の吸水が無料でできる）
- 最小限の負担で最大限の環境配慮ができる仕組みづくり
- 資源レート表（ゴミステーションに電光掲示板で最新のレート表を表示、アプリなどで決済可能、ポイント残高の確認可、特区活用）
- “環境”とビジネスや経済循環を両立する仕組み
- 分別しなくても捨てられる仕組み（実質分別数０＝環境負荷０）
- ゼロ・ウェイスト宣言が（町民の）負担にならない
- 他の自治体との協力体制をつくり情報発信する
- 住民ツアー（処理業者を訪問し自分の出しゴミがどこでどのように処理され、何に生まれ変わっているのか）
- 一人あたりの廃棄物量の減少（家にもため込んでいない）
- 観光への発展

3. ゼロ・ウェイストや環境問題について学べる仕組みをつくり、新しい時代のリーダーを輩出します。

- 環境教育を軸とした高等教育機関を設立する（設立や運営は最大限無駄を省く）
- 準備委員会設立（予算、人員）
- 他地域に派遣できるスペシャリストの育成
- ZW 関連のイベントやキャンペーンを主催者として実施する
- 企業連携でゼロ・ウェイストの仕組みづくりや商品開発を行う
- 人の輪を世界に広げる役割を担う人材を育成
- サステナブルを土台とした学習プログラム（ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｺﾐｭﾆﾃｰｼｮﾝ、先人の知恵の継承、現場での実習、芸術、プロジェクトチーム結成など
- 講師の選定（子どもの主体性を伸ばす、専門知識はオンラインで補填）
- 学生側から町内店舗や事業所への提案や連携の声があがる
- 自分の事として考え行動できる人づくり
- ビジネスと結びついた学習
- 人間力の育成
- 世界から人が集まる学校
- 上勝マインドを継承
- 全寮制で生活のなかで自然とゼロ・ウェイストが身につく
- 教育への投資として企業などから投資をうける（奨学金制度などが利用できる）

宣言の各項目と新たなチャレンジや課題がどのように結びついているかを整理

2020 年 12 月の時点で、以下の図に示されたようなタイムラインが組まれた。宣言項目それぞれをどのようなスケジュールで実施・検討していくのかについて、大枠での方向性を示したものとなっている。

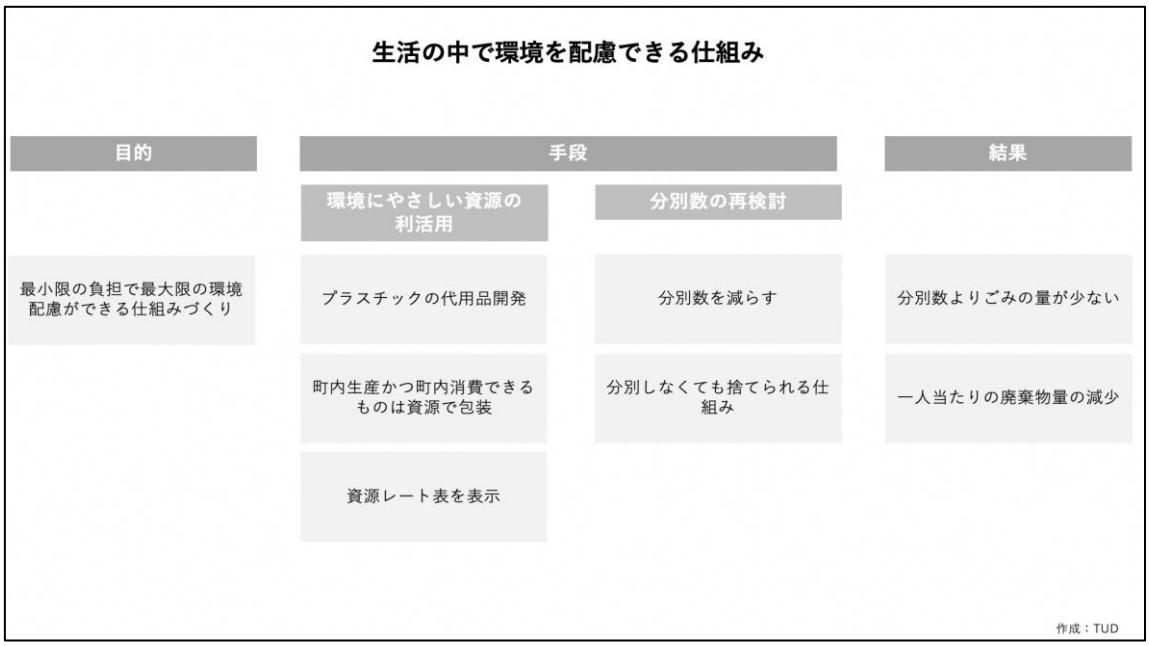
大枠でのタイムライン

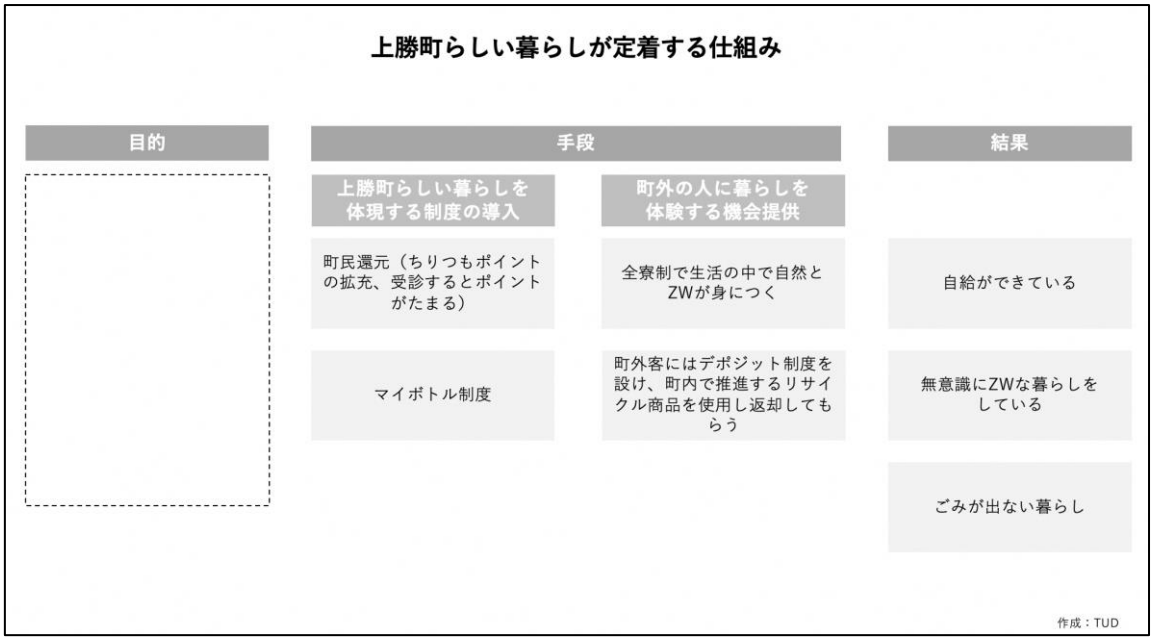
以上のような議論を経て、上勝町の新しいゼロ・ウェイスト宣言は作られた。課題解決と宣言の内容の具体的な実施に向けた行動計画を策定するために、第二期ゼロ・ウェイストタウン計画を策定することとなった。

3　上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画の枠組み

推進員会で議論された内容を計画書に落とし込むために 5 つのプロジェクトを組成した（計画書参照）。これまでの推進員会で議論された内容をプロジェクトに分けるために、議論された内容を種類別に「目的」「手段」「結果」の枠組みで整理し、現時点までに議論されている内容を推進員会で確認した。

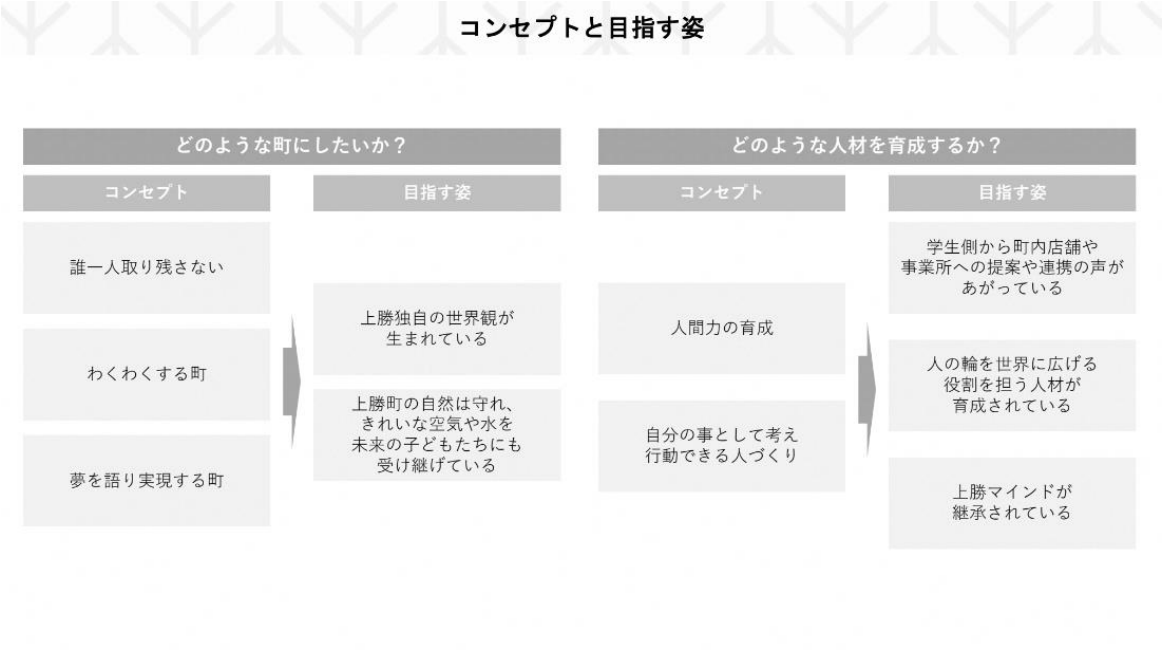
【例：ゼロ・ウェイストな暮らしを定着させる仕組み】





また、下図に整理されているとおり「誰一人取り残さない」「わくわくする町」「夢を語り実現する町」が作りたい町の姿として挙がった。そのために目指す形として、「上勝独自の世界観が生まれている」ことや「上勝町の自然が守られ、きれいな空気や水を未来の子供たちにも受け継がれている」状態が言及されていた。人材育成については「人間力の育成」「自分の事として考え行動できる人づくり」をコンセプトに「上勝マインドが継承されている」等が挙げられた。SDGs のコンセプトとの整合性をとりつつ、上勝町で暮らす中で人々が生き生きと暮らせる町を作るために、ゼロ・ウェイストという手段を使っ

て、この町の自然環境を守りつつ、ここで培われてきた知識や技術を継承するために人材育成に注力すべきだといった内容が話し合われた。これを基にして、町民の現状の調査の設計、課題の抽出、今後取り組む分野について具体的に計画を策定することとなった。



推進員会で議論された目指す姿について

1 章：仕組みづくり

1　ゼロ・ウェイストな暮らしを定着させる仕組み

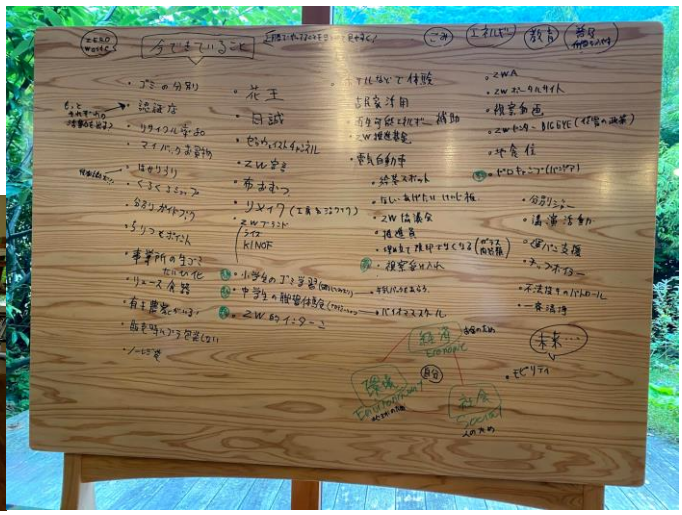
1-1.　ゼロ・ウェイストな暮らしの定義

ゼロ・ウェイストの暮らしについて、上勝町で現在実施されていることの集約と今後実施していきたいことへのアイデアの発散の 2 つの方向から定義することを試みた。

上勝町で現在実施されていることの集約はゼロ・ウェイスト推進員を中心として話し合ったことをピクトグラムとして可視化した。アイデアの発散は、町内外のゼロ・ウェイストな暮らしに関心がある協力者を得て、ゼロ・ウェイストな暮らしに繋がる取り組みを分類し、さらに発散させる取り組みを実施した。発散して出されたゼロ・ウェイストな暮らしの取り組みを今後、上勝町の暮らしに適合する形で展開していくことが考えられる。

1-2.　上勝町で現在実施されていることの集約

上勝町におけるゼロ・ウェイストとは一体何を示すのか。これを明確にさせるために、ゼロ・ウェイスト推進員と町役場、その他希望者を集めた会議を開催し、アイデア出しを行った。その結果、ゼロ・ウェイストとはリサイクル率 80%やごみの 45 分別だけを表すものではなく、上勝町での人の営みや秋祭りなどに代表される文化、伝統を根底とし、それらを継続させるための手段であることが見えてきた。

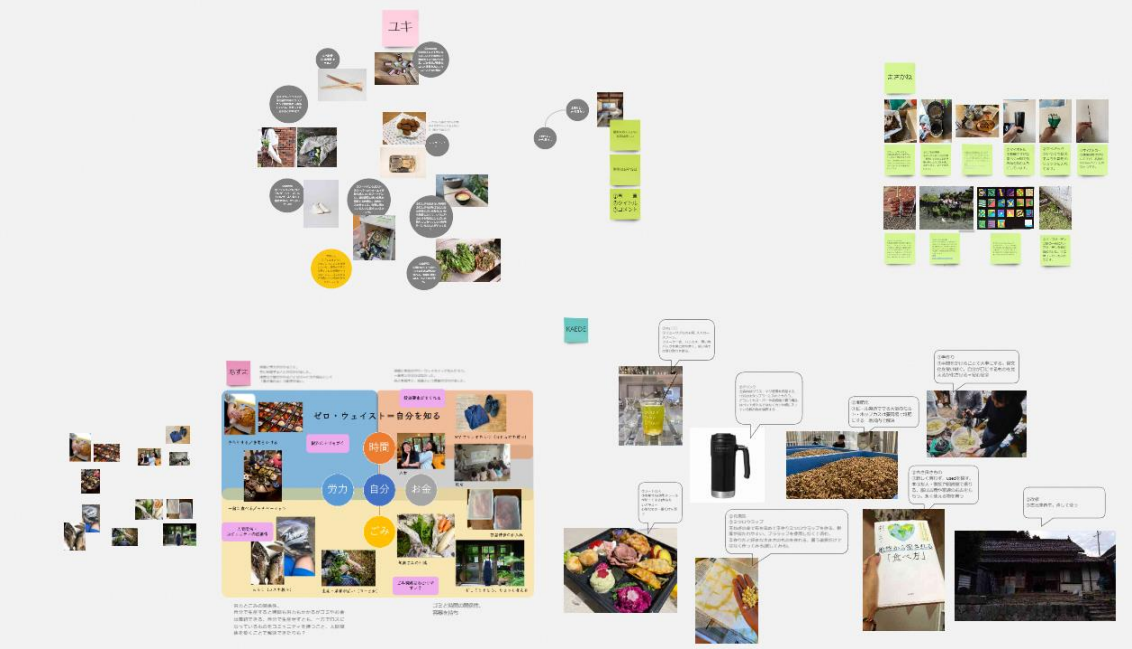


これを元に、より町民及び町外の人たちと「上勝町におけるゼロ・ウェイスト観」を共有できるものにするために、出てきたアイデア約 60 個を全て町内のデザイナーに依頼してイラスト化してもらった（計画書参照）。今後は、町内でゼロ・ウェイストについて考える WS を開催したり、子どもへの教育の場面、視察者にわかりやすく説明するためのツールとして活用していく。そのために 2022 年度においては、このアイデアをゾーニングしたり、カードにするなど「ゼロ・ウェイストマップ」の作成を含むツール化を進めていく。

1-3.　ゼロ・ウェイストな暮らしのアイデアの発散（ワークショップ）

上勝町内外においてゼロ・ウェイストな暮らしに関心がある協力者を得て、複数回ディスカッションの場を設けた。具体的には、暮らしの中で取り入れられるゼロ・ウェイストな取り組みの事例を出し合い、分類を作成した。

以下の図はオンラインホワイトボード miro を使用し、4 名がゼロ・ウェイストな暮らしの取り組みとして挙げたものを示す。



これらの取り組みの共通点や相違点についてディスカッションを行い、6 つの分類を作成した（計画書参照）。ゼロ・ウェイストな暮らしの取り組みとして最もイメージがされるマイバッグ、マイボトル、マイストロー、マイ箸などの「MY〇〇」は都度購入し消費するのではなく、自分の持ち物として大切に使うことで「消費しない」取り組みと分類した。自分の持ち物を使用するだけでなく、他人が大切に所有していた本などの古き良きものを受け継ぎ、共有する取り組みである。

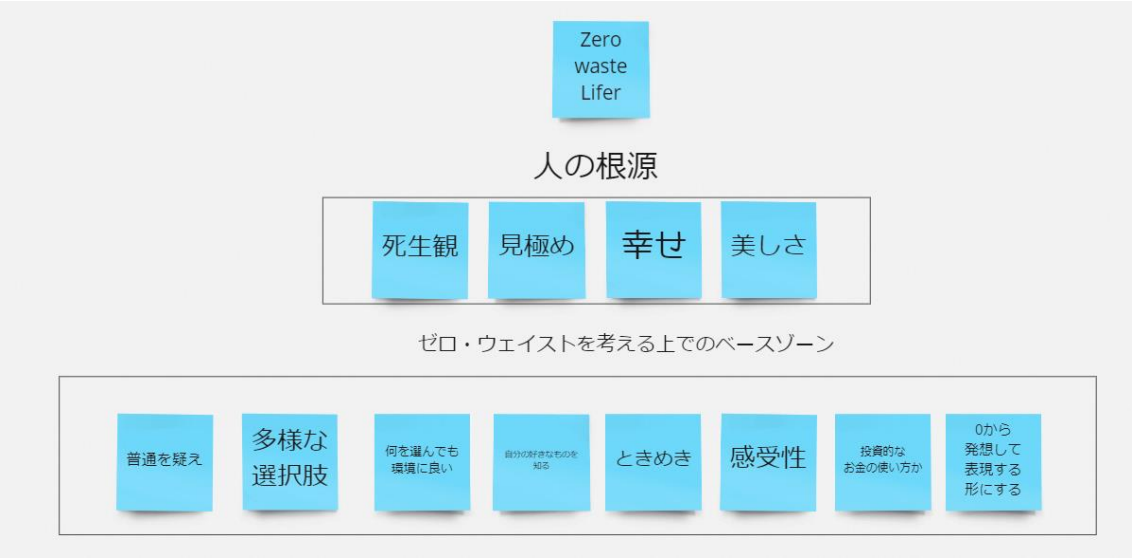
蜜蠟ラップの作成や味噌づくりなどの取り組みは手間をかけて、ものの「本質理解→創る」取り組みとして分類した。商品として流通しているものを原材料から揃えて再現する取り組みである。再現するのではなく、現存しないものを新たにつくる取り組みも存在する。たとえば、お花用のエコバッグ、使いやすいエプロンなど、使いにくいものを購入し消費するのではなく、より長く使いたいと思えるものを 0 からクリエイトする取り組みである。

次に、ごみになってしまう前にものをレスキューし、欲しい人に利用してもらうことで利活用する取り組みも出された。たとえば、賞味期限が切れそうな食品のシェアや購入の促進など、ごみではないものを利活用する取り組みである。一方で、通常ならごみになってしま

う出汁をとった後に残った煮干し、規格外の野菜や果物などを有効活用する取り組みも存在する。

これらの取り組みの主体者も個人だけでなく、企業や自治体など集団が主体になる場合も存在する。たとえば、株式会社アシックスではサステナブルな素材を活用したスニーカーを開発、販売している事例が挙げられた。

また、ディスカッションをする中で、ゼロ・ウェイストな暮らしを行う意義についても議論が及んだ。ごみを減らすなどの暮らしの中での取り組みにとどまらず、下図のように「死生観」「見極め」「幸せ」「美しさ」など人生の価値観に紐づくものであることを話し合った。



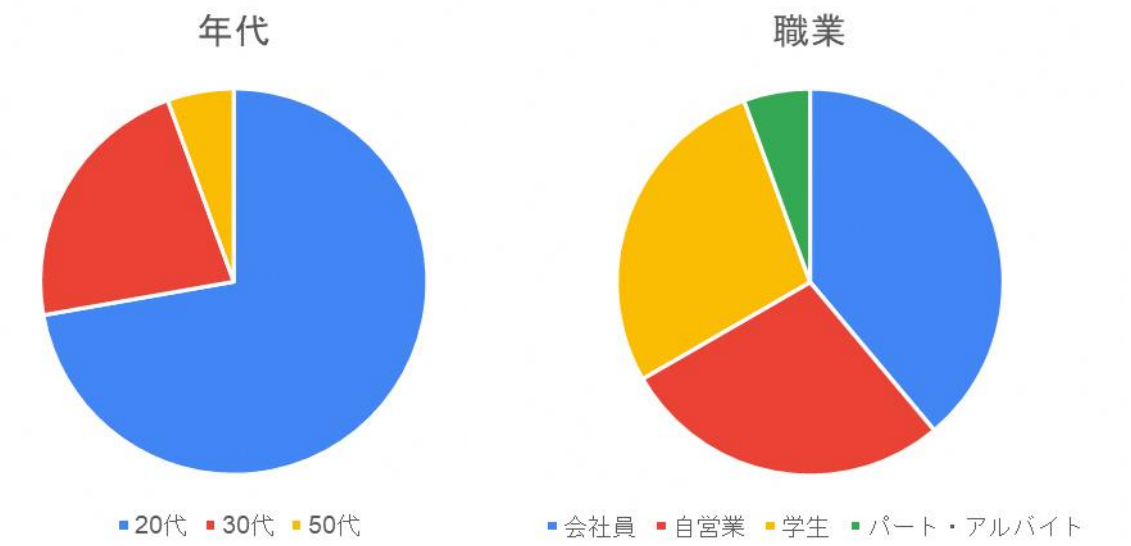
ディスカッションの中で作成した分類に関連する事例をさらに収集するため、加えてこの分類以外にあてはまる事例が存在するかを確認するために上勝町内外の 18 名の参加者を集め、2021 年 8 月 6 日にワークショップを開催した。ワークショップは 120 分間、下図のタイムスケジュールに沿って実施した。2 と 8 では「公開アンケート」を実施し、その場で質問に答えてもらいながら、参加者の考えを全体で共有し、共感し合いながら進めた。

	開始時間	19時00分				
	終了時間	21時00分				
予定		120分				
開始時刻	終了時刻	予定分数	タイトル			内容
19:00	19:10	10分	1	今日の流れと目的の説明＋担当者自己紹介		
19:10	19:25	15分	2	公開アンケート（Googleフォーム） 1. プロフィール（年代、職業＆仕事内容、上勝町を知っていたか） 2. ゼロウェイストな暮らしはできていると思いますか？（5段階） 3. ゼロウェイストな暮らしで思い浮かぶことは？		
19:25	19:40	15分	3	上勝町とゼロウェイスト（東さん）		
19:40	19:50	10分	4	私たちが考えた分類の紹介（アシックス増田さんに少し振る）		
19:50	20:05	15分	5	個人ワーク：分類にあてはまる事例集め（自他の事例）		miroボードに貼りつけ
20:05	20:25	20分	6	集めてきた事例についてチーム内で共有（新たな分類はできそう？）	ブレイクアウト	4名×5グループ
20:25	20:35	10分	7	各チームから共有（2分×5グループ）		
20:35	20:40	5分	8	公開アンケート（Googleフォーム） 何のためにZWな暮らしをするのか、何から実践したいか＆その理由		
20:40	20:55	15分	9	グループ内で感想の共有	ブレイクアウト	4名×5グループ
20:55	21:00	5分	10	東さんから一言		
	計	120分				

公開アンケートの結果を以下に記述する。

- アンケート①の結果

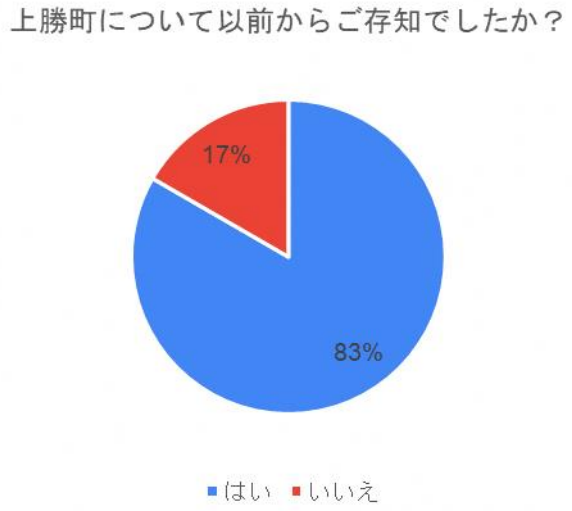
【参加者のプロフィール】



【職業詳細（一部抜粋）】

学生（北欧教育や IB 教育を中心とした国際教育）、ランドスケープデザイナー、小売業での販売・マネジメント、アパレルの PR、上勝町インターン、ホテルの業務(清掃やセットアップ)、サステナビリィ部で気候変動やサーキュラーエコノミーに関する業務など、ライター、フリーランスのリサーチャー、web メディアのデザイナー、食に関する仕事、地図づくり・まちづくり、合同会社すぎとやま　KINOF 企画、立命館アジア太平洋大学学生

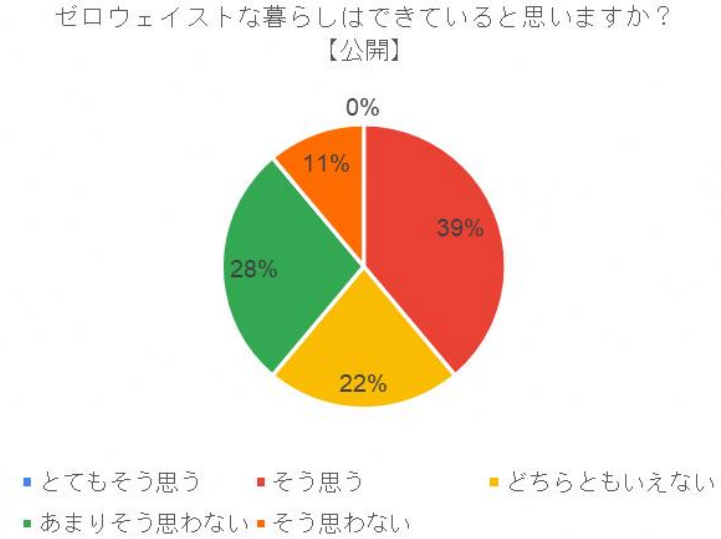
【上勝町について】



（「はい」と答えた方に伺います。上勝町のイメージ、知っていることなどを簡単に記述してください。）

- ✓ ごみの分別が細かい
- ✓ ごみの分別がすごい！
- ✓ 棚田が美しい
- ✓ ゼロ・ウェイストセンター、リサイクル率 80%以上
- ✓ 葉っぱのイメージ、高齢者が多い、田舎、自然豊か
- ✓ 分別が非常に細分化されている
- ✓ ゼロ・ウェイストタウン、サステナビリティに関心ある人はだいたいみんな知っているイメージ。
- ✓ 葉っぱビジネス
- ✓ ゼロ・ウェイスト
- ✓ 葉っぱビジネス
- ✓ みんなのふるさと。みんな良い人。
- ✓ 街全体でのゼロ・ウェイストへの取り組みを行なっている

【ゼロ・ウェイストな暮らしについて（ワークショップの場で公開)】



(「ゼロ・ウェイストな暮らし」と聞いて思い浮かぶことは何ですか？)

- ✓ 温故知新
- ✓ プラスチックパックを使わない
- ✓ マイバック、マイ水筒、リサイクル
- ✓ ごみという概念を無くす　みたいな…？
- ✓ 「もったいない」をいかに無くすか
- ✓ プラスチックごみの削減、フードロス問題
- ✓ ごみを出来るだけ出さないように心がける
- ✓ 地球も人も生き物も心地よい暮らし、使い捨てごみがでない、豊かな生活
- ✓ 使わないものは買わない。買ったものは大切に、長く使う。
- ✓ 暮らしの中で、自分がものをごみ箱に入れる瞬間に、どれだけそのモノの価値について考えているか、ということを最近よく考えています。。
- ✓ 簡素で無駄がないライフスタイル
- ✓ プラスチックをあまり使わない
- ✓ ちょっと手間をかける暮らし
- ✓ ちょっと大変そう
- ✓ 当たり前を見直してみること。
- ✓ できるところ、自分の得意な部分から暮らしに取り入れる。頑張りすぎない。
- ✓ "Youtube でよく見かけるような、量り売りのお店で持参した瓶や袋を使って買い物して、1 年間で排出したゴミを瓶に集めるようなイメージがあります
- ✓ ゼロ・ウェイストな暮らしは日本ではなかなか難しそうです
- ✓ 京都にオープンした totoya が思い浮かびました"
- ✓ ミニマリズム

● アンケート②の結果

【事例を見聞きして、何のためにゼロ・ウェイストな暮らしをすると思いましたか？（ワークショップの場で公開）

- ✓ 自分の生活を豊かにするためと気づけた
- ✓ 未来のため、心地よさの追求
- ✓ 自分のため、未来の地球のため
- ✓ その人なりの豊かな暮らしにつながるため
- ✓ 将来にわたって持続可能な環境をつくるため
- ✓ 生物多様性
- ✓ 意識・自覚するため
- ✓ 自分が心地よいかもと思うこと
- ✓ 自分と他者の時間を豊かにするためにゼロ・ウェイストな暮らしをすると思いました。
- ✓ 豊かに暮らすため
- ✓ 地球の資源を限りあるものだと認識して、たとえ少し労力をかけてでも、地球環境への負担を減らすため
- ✓ 環境負荷を下げる。自然の一部として循環の中で生きる。
- ✓ 地球環境と自分のため
- ✓ 幸せに生きるため
- ✓ 未来のため、心地よさの追求

【今後の生活の中で、何を実践してみたいと思いましたか？その理由も記述してください。（ワークショップの場で公開）】

- ✓ ごみ以外のゼロ・ウェイストの考え方
- ✓ 仕事柄食べ物に関心が行きがちだが、アパレルや他の分野でもゼロ・ウェイストを実践してみたい
- ✓ マイボトル
- ✓ "みつろうラップ：ラップを使う機会がすごく多いので、ぜひ手作りしたいです！
- ✓ マイボトル：浄水できるっていうのがすごいなあと！
- ✓ 自分にとってのゼロ・ウェイストを考えてみる
- ✓ 手づくりで〇〇はやってみたい。手間をかけてお気に入りの何かをつくりたい
- ✓ 手作り
- ✓ 企業や社会の取り組みにもっと目を向けたい。消費者が支持することも大事だと思ったから。
- ✓ 自分で一から作ってみること
- ✓ 消耗品の容器を見直して、なるべく継続して使えるものに置き換える。

- ✓ できる限り市販ではなく手作りにシフトしていきたいです(ヨーグルト.ミツロウラップなど)
- ✓ 家庭菜園をしてみたいです。理由は、スーパーで買うものだと包装されてしまっているからです。
- ✓ 現在のライフワーク（量り売りの推進、規格外農産物を使用した加工食品開発、手作り〇〇の開発）を一所懸命に進めていきたいと思いました。
- ✓ ・コンポスト→燃えるごみが激減して、幸福度が激増した。・野菜づくり→失われたつながりを取り戻す。
- ✓ Dafi ボトル
- ✓ マイボトル

また、5 グループに分かれて共有された事例を以下図にてグループごとに示す。

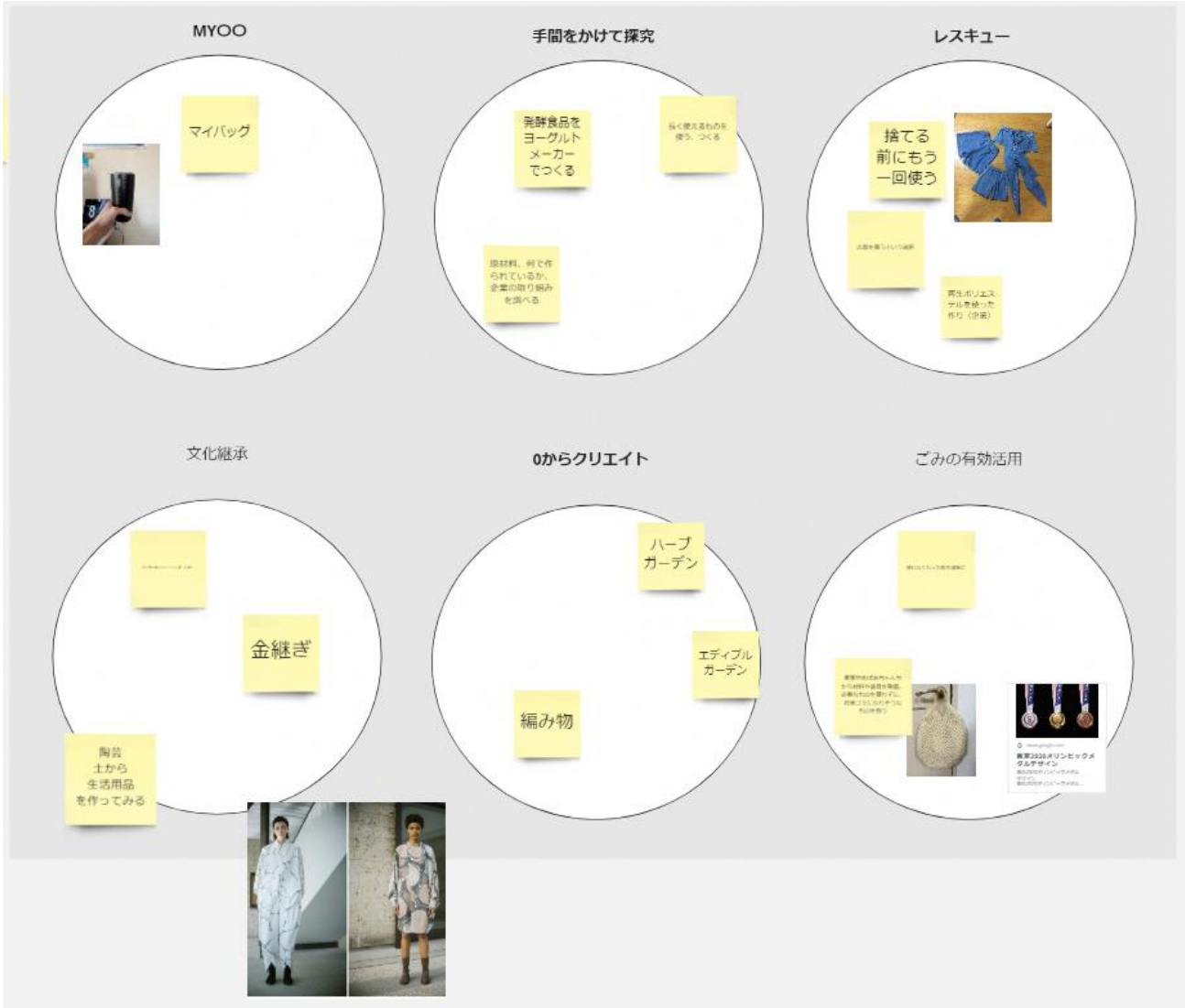
- A チーム：約 30 事例。

（考察）
A チームでは分類ごとに関連する具体的な商品・サービスが写真を用いて共有されていた。「MY〇〇」、「手間をかけて探求」、「レスキュー」については多くのアイデアが出されており、特定の商品名がいくつか出ていることから、参加者らが既に自ら実践している、もしくはこういったキーワードについて普段から関心が高いことがうかがえる。

● B チーム：約 32 事例

（考察）
このチームは「ごみの有効活用」について事例が多く挙げられており、自治体の取り組みや上勝町の洗剤パウチをリサイクルして作られたブロック、化粧品などが共有されていた。分類に分けられない「肉や魚を食べない」という視点もゼロ・ウェイストな暮らしから連想されるものとして挙げられており、食や自然環境のサステナビリティとゼロ・ウェイストな暮らしの関係性について考えるものとなった。

● Cチーム：約17事例

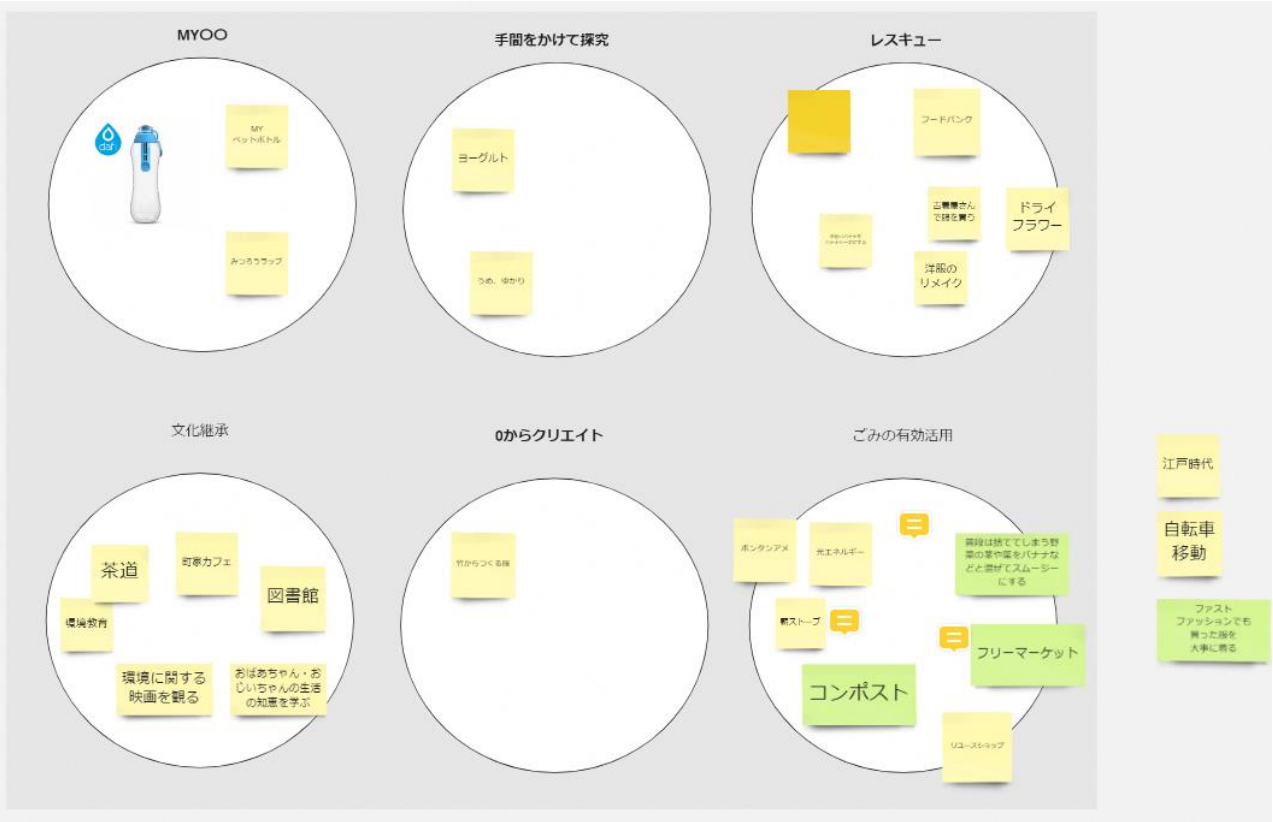


（考察）
「原材料、何で作られているか企業の取り組みを調べる」「再生ポリエステルを使った作り（企業）」「オリンピックメダルの素材について」などこのチームでは、他のチームでは出ていない、素材や作り方などについ触れられている。また、ハーブガーデンや編み物など、より現実的で暮らしの中でできることが主体となっていた。全体的にアイデアの数は他のチームに比べて少ないものの、より身近な物や食について関心が高いチームだったと推察される。

● Dチーム：約25事例

（考察）
「ごみの有効活用」で出されたアイデアの「コーヒー粕などで染色」や「B品の販売」などが、「文化継承」の中の「草木染」という手法だったり、「レスキュー」の中で出ている、積極的に訳ありの農産物を扱うインターネットサイト部分と関連してくる点が興味深かったチーム。それぞれのアイデアは別々に出てきているものの、目的（例：ごみの有効活用のため）と手法（例：B品を扱うサイトの紹介）として繋がりをもってみることもでき、この分類分けをワークショップとして実施することで、ソリューションを導き出せる可能性を感じる。

● Eチーム：約30事例



（考察）
このチームでは「文化継承」や「ごみの有効活用」についてのアイデアが多く、また分類以外に「江戸時代」や「自転車移動」「ファストファッションでも買った服を大事に着る」など分類には分けづらいが、ゼロ・ウェイストな暮らしだと思う独自のアイデアも積極的に出ていた。
「文化継承」については「おばあちゃん・おじいちゃんの生活の知恵を学ぶ」等は他のチームでも出ていたアイデアであったが、「茶道」や「環境教育」といったより「学ぶ手法」が出されていたことも特異点として挙げられる。「0からクリエイト」については他のチームと比べてアイデアが少なく、この分類については他の分類よりも難しいテーマだったようで、具体的な事例をより多く紹介すれば考え始めるきっかけになるかもしれない。

ワークショップを経て、参加者のゼロ・ウェイストの認識がごみを減らすことから暮らしへと広がったことを確認できた。今回のワークショップは大学生を中心に20代以下の参加者が多く、若い世代のゼロ・ウェイストへの関心の高さがみられた。事例共有では、マイボトルやヨーグルトづくりキットの具体的な商品名が紹介されることで他の参加者から「使ってみたい」という声が聞かれた。より具体的な事例を紹介することで、行動に結びつきやすいと考えられる。

1-4.　上勝町での仕組み化に向けて（ワークショップ）

本項では上勝町内外でのゼロ・ウェイストな暮らしの取り組みを包括的に整理し、可視化するとともに、それらを上勝町の暮らしや生活に取り入れるためにどう仕組み化していくかについて、検討していく。ディスカッションの場として、2022 年 3 月に町内にてワークショップを開催（場所：カフェ・ポールスター、参加人数：20 人【町内 13 名/町外 7 名】）。具体的には、1-3 項で作成したゼロ・ウェイストな取り組みの 6 分類をもとに、1-2 項にて作成した上勝町内での取り組みをカードにして分類。さらにそれぞれの分類について、取り組みの仕組み化について町内外のメンバーとディスカッションを交わした。

以下ワークショップの結果としてワークシートを示す。

カード：上勝町内の取り組み

※黄付箋：上勝町外の取り組み

※赤付箋：仕組み化へのヒントとなるキーワード

消費しない
MYOO
本質理解→創る
手間をかけて探究
0からクリエイト
量り売り
MYボトル
ストック用を使う用品
売ってない土へシャンプーソース
欲しい時にない
シャンプーリンス、ない
安いと買う
エコ、環境ごと
ピックフェイストセンター、苦情が出なく
定期購入、容量変更?
仕事→出産へのハードル
やりたいやりたくない
出産で同じ時間ない
知らないこと教えて、知ってるいきうちに
仲良くなれる場
時期をのがさないように
企画、イベやる。
英食する物を持つ
一朝一夕じゃできない
信頼関係をつくれる場所
どこに声かければいいか??つながらない
山菜つみやりたい
ぬか床
ヨーグルト作り
ホームベーカリー
コンポスト
梅仕事
原材料や企業の動向を調べる
竹からっぽ箸
梅干し(イタリ)
(お油由来でない)タンパク質からモノを作る
とうもろこしから作った飲食容器(自然にかえる)
編み物
ハーブガーデン
プラスチックフリーの保存容器"Stasher"

本質理解→創る
手間をかけて探究
利活用する
レスキュー
ぬか床
ヨーグルト作り
ホームベーカリー
コンポスト
梅仕事
リエイト
竹からっぽ箸
梅干し(イタリ)
編み物
ハーブガーデン
ごみの有効活用
フードバンク
食べチョク
古民家という空間
フリーマーケット
B品の販売
コンポスト
リユースショップ
汚いタオルから雑巾・ふきんを作る
家に眠っている材料や道具を発掘してとる
コーヒー粕などで染色
使わなくなった服を掃除に使う
ぬか床の再利用
酒粕の利用(漬魚など)
商品が分かる人にあげたい
ダンボールをDIYキットに"Samsung"
いらなくなったアイシャドーを水彩絵具に"Cos Notebook"
東京2020のオリンピックメダル(再生原料)

上勝町内の取り組みを分類した結果、【文化継承】のグループに多くのカードが集まった。祭りや、山の動物、野菜などの自然資源が分類されたとともに、ごみ分別のサポート体制や広報活動など、ワーク内で分類分けに悩んだ取り組みなども、今後「上勝町の文化として後世の世代に受け継いでいかなければいけないこと」として結果的に【文化継承】の取り組みに分類された。

上勝町での仕組み化については、【文化継承】、【手間をかけて探究】それぞれの取り組みにおいて共通して、「仲良くなる」や「信頼関係をつくる」などのキーワードが町民自身の体験談とともに出された。古くからの慣習や生活の知恵、味噌や豆腐などの手づくりにおいては、仲のいい町民同士で教え合い、体験し合っていることが分かり、これまでは町民が自然と集まる機会となっていた冠婚葬祭や、出役、一斉清掃など顔を合わせることの積み重ねで関係が構築されていた。昨今のコロナ禍の影響もあり、現在は移住者が新たに町民との関係を築く場が持ちにくくなっていることも課題の一つとしてあげられ、また単発のイベントや体験会などよりは、「この人になら教えてあげてもいい」「この人から教わってみたい」と思えるような親密な関係を自然に築ける機会を求めていることも分かった。

【ごみの有効活用】においても、ショップなどを介して不用品を利活用するよりも、古着や余剰な食材等も、「顔が分かる相手に譲りたい」という意見が出たように、個人と個人でのつながりを求める声が多く、それがものを大切に使うことや不用品を適材適所に活用できることにつながると実体験から感じているようであった。

量り売りについては、「ほしい時に店が開いていない」、「わざわざ行くのではなくついでになればいい」など、量り売りを利用したい意欲はあるものの、時間帯や場所などの購買シーンが町民の生活にうまく溶け込んでいないことが分かった。よって町内での量り売りを検討するには、食品だけにとどまらず、上勝町ならではの商材や生活シーンを想定した量り売りの提案が必要と考えられる。

これらを踏まえ、今後は町内での移住者と町民の関係構築、また子供から高齢者までの幅広い世代間交流の場のあり方を模索するとともにそれらの場の継続的な提供を目指す必要がある。また量り売りなどゼロ・ウェイストな購買行動にも焦点をあて、町民の生活シーンやニーズの調査とともに、上勝町ならではのあり方を検討・提案していく。

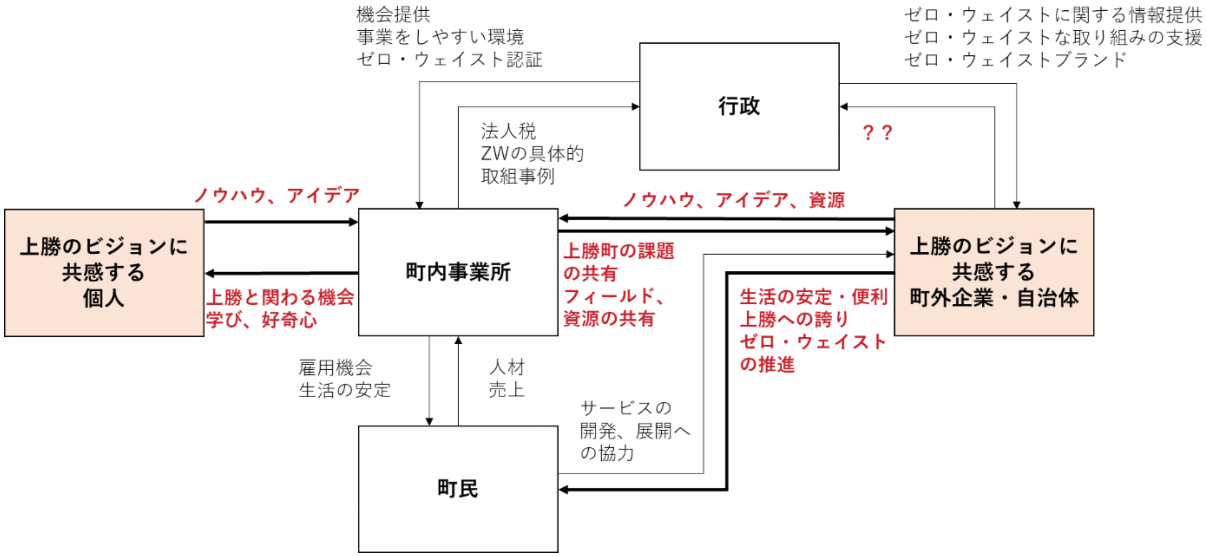
2　経済が循環する仕組み

2-1. 既存の経済循環の仕組み

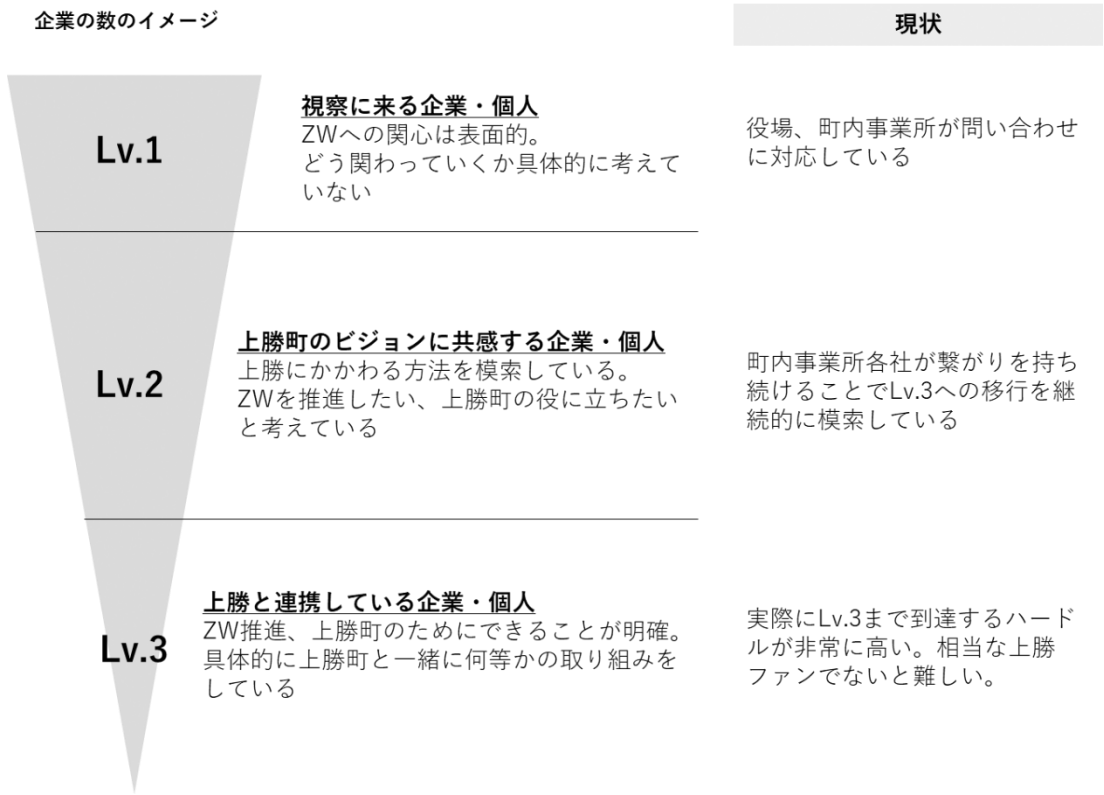
「令和３年 ゼロ・ウェイストブランドを活用したローカルベンチャー及び企業連携促進業務　調査報告書」によると町内の企業の中には、ゼロ・ウェイストを推進する町であることを活かして、ゼロ・ウェイストに関心がある顧客に向けてサービスを提供している企業もあり「ゼロ・ウェイスト」をキーワードに経済の循環が現状でも起きている。また、町外企業は企業連携する上で、「地域独自のビジョンやブランド、テーマがあること」が重視されており、上勝町にとってゼロ・ウェイストというテーマを有することは、企業連携を推進する上での大きなメリットとなると考えられる。同報告書ではゼロ・ウェイストを起点とした企業連携のさらなる可能性が示唆されている。また、上勝町が実施している経済循環に関連する施策は、人口減少への対策、起業促進や企業誘致の施策、およびゼロ・ウェイストの活性化を目指す施策（ちりつもポイントキャンペーンなど）が中心となっている。町民や移住者などの個人を対象とした施策が中心であり、事業所間の連携を促す施策は限られている。

一方で、議員や町内事業所へのヒアリングを通じて、今後、ゼロ・ウェイストを軸とした経済循環をさらに活性化させていくためには、２点の課題があると考えられる。

１点目に、企業連携が個社に閉じており、行政や町民、複数の町内事業所が関わる仕組みとなっていない点が挙げられる。下図では企業連携にかかわるステークホルダーと、ステークホルダーで循環する価値を可視化している。図では、多様なステークホルダー間の連携を示しているが、町内事業所間、上勝町のビジョンに共感する町外企業や自治体間での連携も可能である。現状では、上勝町が町外の企業にもたらしてほしい価値が不明確になっているため、企業連携によって得られる価値が上勝町全体に広がらないことが懸念される。また、町民においてはゼロ・ウェイストによって経済循環が起き、価値がもたらされている実感が得られにくい状態になっている。



2 点目に、視察に訪れる企業や個人は年間 2,000 名（延べ）ほど存在しているが、上勝町のビジョンに共感されても、その後企業連携に発展させる仕組みが不足している。下図にあるように、Lv.1 に該当する企業や個人が多数存在しても、Lv.2、さらに Lv.3 に進む企業数が少なく、有意義な企業連携の可能性を逃してしまっている可能性がある。



これらの課題を解決することを目指し、計画書に記載のとおり「ゼロ・ウェイスト コラボレーション デザインセンター」（仮称、以下 ZW-CDC）を設立し、町内・町外との連携を図っていく。

2-2. ワークショップの開催（プロトタイピング）

ZW-CDC が取り組むことの一つがワークショップの定期開催である。ワークショップとは、「創ることで学ぶ活動」と定義され、ファシリテーターと呼ばれる進行役のサポートのもとで，集団で新しいアイデアや形を創り出す活動を通して学ぶところにその特徴がある（山内、森、安斎（2013)「ワークショップデザイン論―創ることで学ぶ」、東京：慶應義塾大学出版会)。経済循環を起こしていくために、ニーズや問題の探索、問題の定義、アイデアの創出、実装までのプロセスに、町内外の人たちを巻き込む必要がある。その手法としてワークショップを開催することが考えられる。

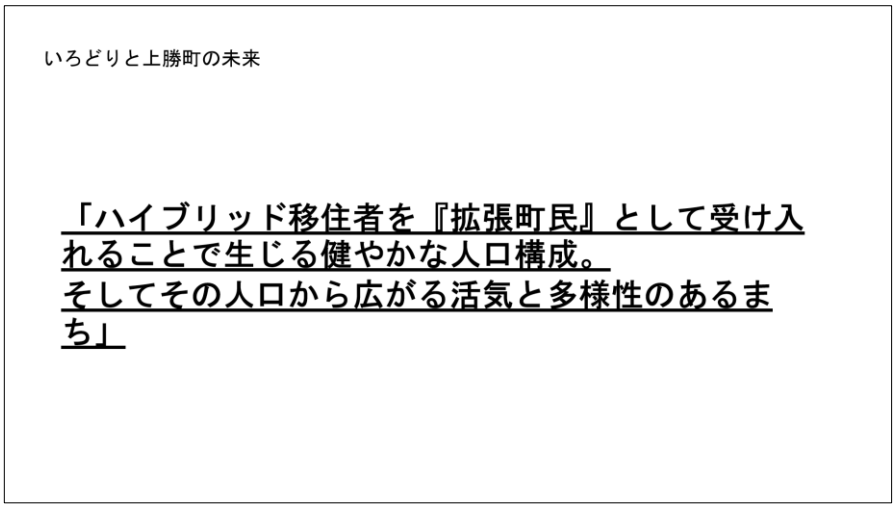
2021 年 3 月に本計画の経済循環プロジェクトの一環として、町内事業所である株式会社いろどりの協力を得て「いろどりの未来につながるアイデア」を創出する終日のワークショップを開催した。以下のタイムスケジュールの通り、いろどりの事業概要のインプットや各

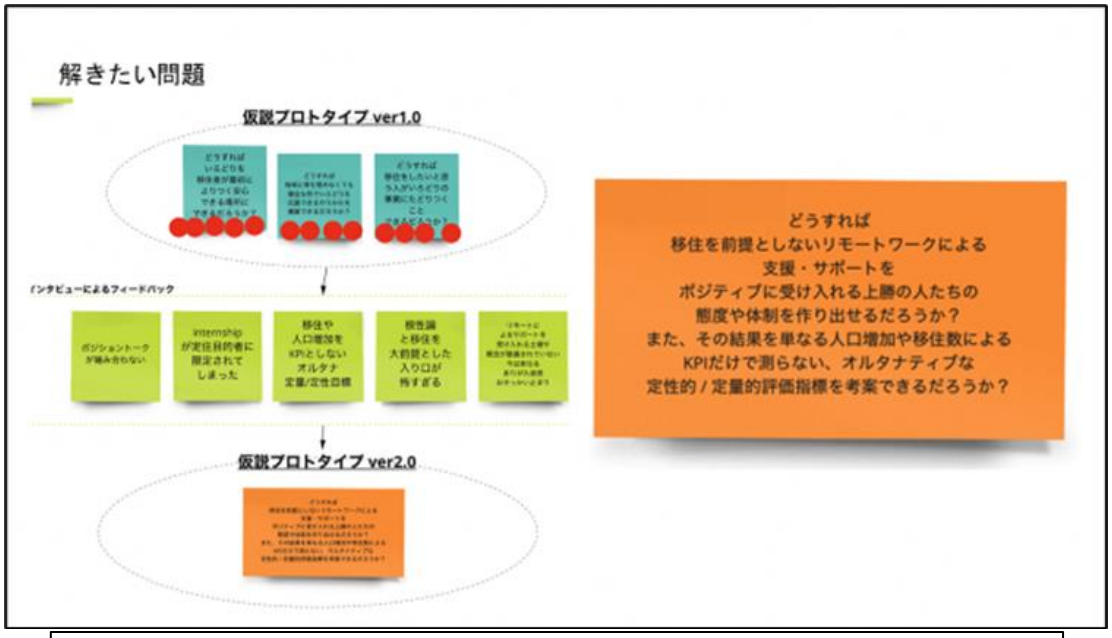
チーム 2 名ずつインタビューする時間を設け、いろどりの現状について知ってもらうことを重視した。徳島県出身の参加者からは「メディアを通じて知っていたいろどりとは違う点がたくさんあり、現状を理解した上で未来を描けた」という声も挙がり、当事者と直接話すことによる価値が見出された。

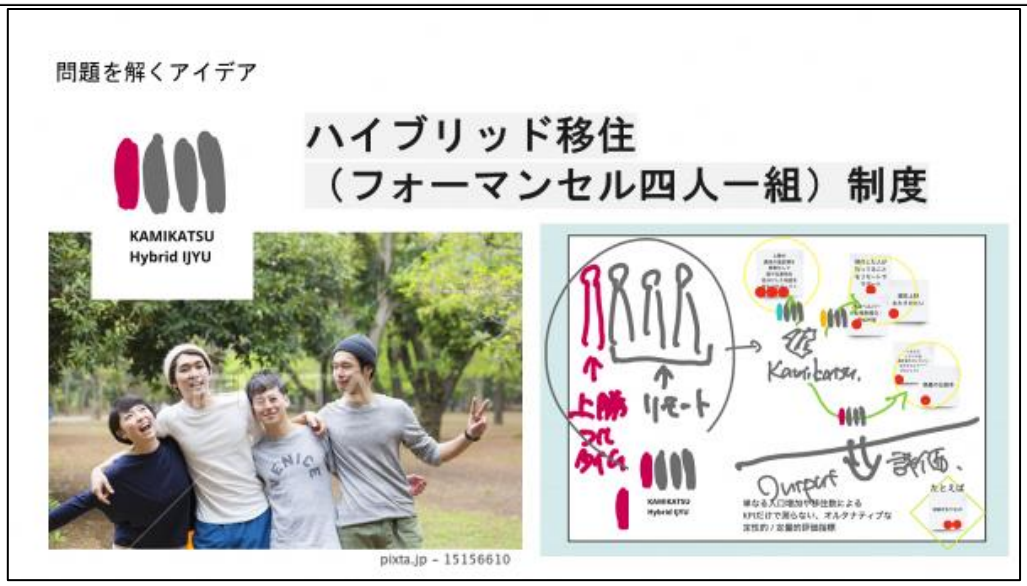
	開始時間	10時00分				
	終了時間	17時00分				
予定		420分				
開始時刻	終了時刻	予定分数		タイトル	ブレイクアウト	備考
10:00	10:45	45分	1	本日の趣旨とゴール+自己紹介（赤木）15分 上勝町に関するインプット（松本さんor東さん）10分 いろどりの事業概要（粟飯原さん）15分 Q&Aセッション 5分	メインルーム	
10:45	11:05	20分	2	いろどりの未来を描く（10分で描いて、10分でチーム内共有） 現状の課題が解決できたとして5年後どんな会社になっていてほしいか自由に描く（リサーチを含む）	ブレイクアウト	
11:05	11:30	25分	3	問題定義の作成（講義5分、ワーク15分） 未来につなげていくための「問い」を作成し、チームで解きたい問いを絞る	ブレイクアウト	
11:30	11:45	15分	4	仮説検証インタビューの準備 確認したい仮説の明確化→インタビュー項目の作成	ブレイクアウト	項目ができたチームからお昼休み
11:45	12:30	45分	5	ランチ		
12:30	14:40	130分	6	<12:35-13:35> インタビュー①　粟飯原さん インタビュー②　研修生の方（移住を検討していろどりをお手伝いしている方） <13:40-14:40> インタビュー③　いろどり農家さん若手 インタビュー④　いろどり農家さんベテラン	ブレイクアウト	
14:40	14:50	10分	7	休憩		
14:50	15:00	10分	8	インタビュー結果で得た気づき抽出＆問題定義の修正	ブレイクアウト	
15:00	15:30	30分	9	アイデアの創出（ブレスト→アイデアシート）	ブレイクアウト	
15:30	15:55	25分	10	アイデアによって上勝町内外で循環する価値を可視化する（CVCA）	ブレイクアウト	
15:55	16:20	25分	11	プレゼンテーションの準備	ブレイクアウト	
16:20	16:30	10分	12	休憩		
16:30	16:50	20分	13	プレゼンテーション（1チーム7分・コメント3分）	メインルーム	
16:50	17:00	10分	14	Wrap up	メインルーム	

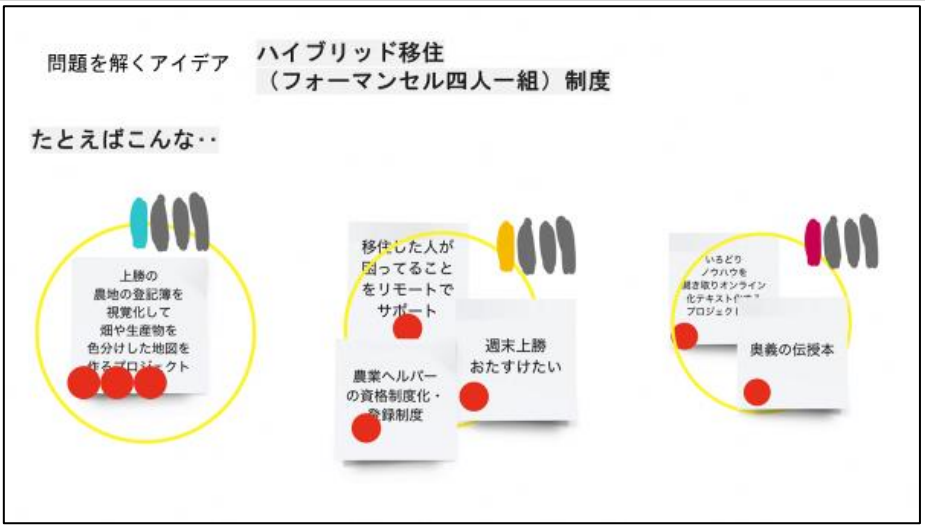
合計 6 名の参加者は 20〜50 代の多様なメンバーで構成され、全参加者が上勝町を知っており、半数がいろどりについて知っていた。3 名ずつの 2 グループに分かれ上記のプログラムを経て、最終プレゼンテーションで発表されたアイデアを以下で紹介する。

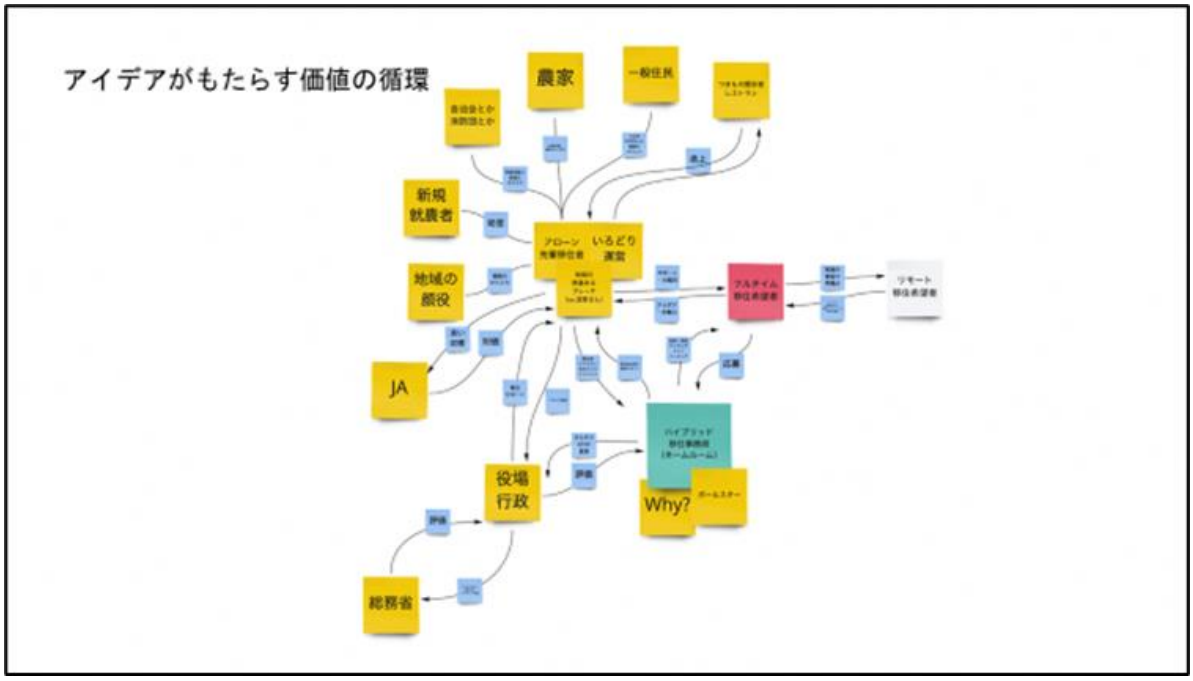
【A チーム（デザイナー1 名、ゼロ・ウェイストに関心がある会社員 1 名、サステナビリティに関する仕事をしていた元会社員 1 名)】「ハイブリッド移住」：上勝町在住のホストを中止に居住地にかかわらずフォーマンセルを組み、ホストが抱える課題の解決に取り組む。




解きたい問題
仮説プロトタイプ ver1.0
インタビューによるフィードバック
ポジショントークが噛み合わない
internship が定住経験者に限定されてしまった
移住や人口増加をKPIとしないオルタナ定量/定性指標
移住論と移住を大前提とした入り口が怖すぎる
仮説プロトタイプ ver2.0
どうすれば
移住を前提としないリモートワークによる
支援・サポートを
ポジティブに受け入れる上勝の人たちの
態度や体制を作り出せるだろうか？
また、その結果を単なる人口増加や移住数による
KPIだけで測らない、オルタナティブな
定性的 / 定量的評価指標を考案できるだろうか？

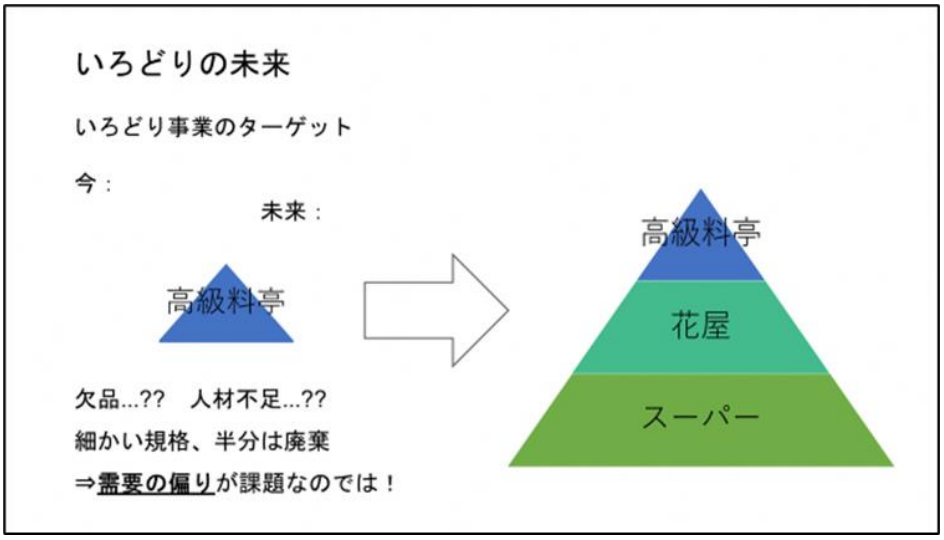

問題を解くアイデア
ハイブリッド移住
（フォーマンセル四人一組）制度
KAMIKATSU
Hybrid IJYU
pixta.jp - 15156610
上勝
リモート
Kamikatsu.
Output

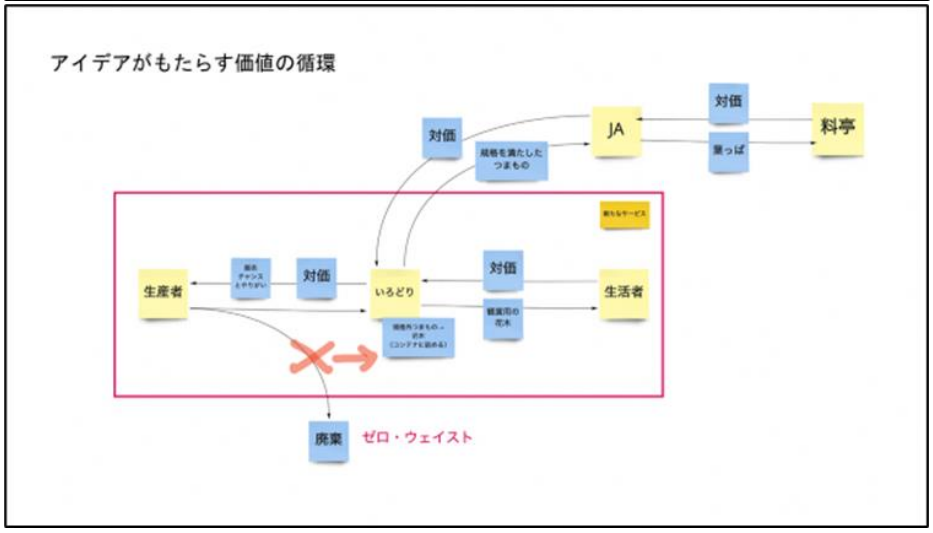

問題を解くアイデア
ハイブリッド移住
（フォーマンセル四人一組）制度
たとえばこんな‥
上勝の
農地の登記簿を
視覚化して
畑や生産物を
色分けした地図を
作るプロジェクト
移住した人が
困ってること
をリモートで
サポート
週末上勝
おたすけたい
農業ヘルパー
の資格制度化・
登録制度
いろどり
ノウハウを
引き取りオンライン
化テキストブック
プロジェクト
奥義の伝授本



（考察）
参加者は、移住者を増やすのではなく、関係人口を増やす考え方に関心を示していた。ホストを誰にするかがキーとなると考えられる。実際、インタビューに協力してくださったいろどり農家の方と参加者との交流はその後も SNS 上で見られ、このようなワークショップがハイブリッド移住のきっかけになると考えられる。

【B チーム（徳島県出身者 1 名、ゼロ・ウェイスト政策の研究者 1 名、ゼロ・ウェイストに関心がある会社員 1 名)】生産者と生活者を直接つなぐ新たな販売方法：いろどり農家へのインタビューから「注文を取れた瞬間」にやりがいを感じるという点に着目し、販売先を広げることを提案。



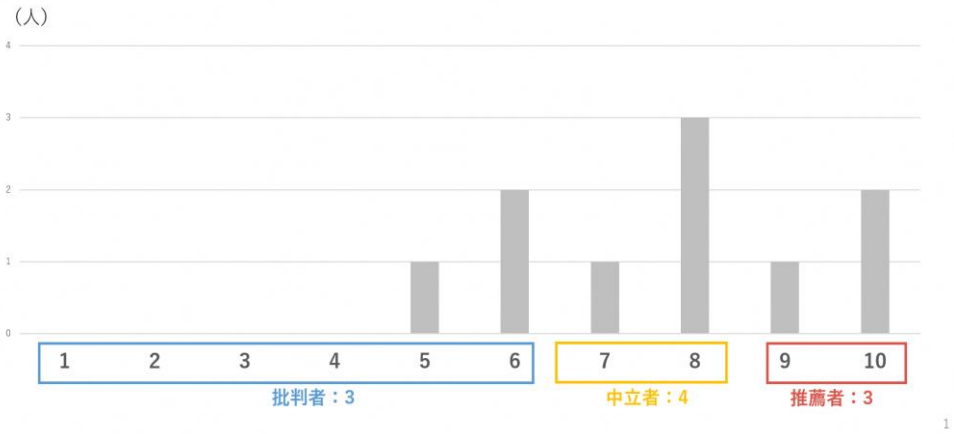


（考察）
ワークショップに参加されていた㈱いろどり社員も B2C 販売の可能性について言及されていた。ワークショップ後、これまで連携がなかったいろどりとゼロ・ウェイストの連携とともに、いろどりの未来を一緒に考える企業連携プロジェクトに進展した。

本ワークショップに参加していた 6 名のうち 3 名は、前述のゼロ・ウェイストな暮らしについて考えるワークショップにも参加しており、上勝町やゼロ・ウェイストとのかかわりを継続することができている。上勝町内外をつなぎ、上勝町の課題解決に取り組むワークショップは、上勝町のビジョンへの共感やかかわりの継続に効果があると考えられる。

その他、2022 年 1 月にはゼロ・ウェイストをテーマにした「デザイン思考コンソーシアム」を Tsukuru to Ugoku Design 株式会社が開催した。上勝町役場と合同会社 RDND からの参加者に加え、ゼロ・ウェイストに今後力を入れていきたい企業と、デザイン思考を学んでみたいと手を挙げた上勝町外の企業や個人ら合計 13 名が参加した。全 3 日間合計 9 時間のオンライン講座ではあったが、これまでゼロ・ウェイストに関心がなかった参加者も、いかにごみを減らす行動を促せるかデザイン思考を活用してアイデアを創出することができた。他の人にも推薦したい度合いを聞く NPS®はは下図の通りであり、特にこれまでゼロ・ウェイストに携わったことがない参加者から高い満足度が得られた。ゼロ・ウェイストへの関心を広げる活動として可能性が見られた。

最終アンケート結果：NPS



2022 年 2 月 8 日～10 日の日程で、株式会社新東通信が企画・運営し、上勝株式会社 BIG EYE COMPANY が受け入れを行った「GREEN WORK KAMIKATSU」が上勝町ゼロ・ウェイストセンターにて開催された。東名阪の事業者および上勝町内事業者・関係者の約 40 名を対象に、国内外のサーキュラーエコノミーの専門家によるセミナー、インプットを行い、サステナブルなまちづくりの実現に向けたワークショップを通して、今後の上勝町でのサーキュラーエコノミーの実装に向けたアイディエーションを実施した。

結果として、この時に提案された様々な課題の解決案を実装したという、廃棄物処理業者や素材メーカー、広告代理店等がイベント終了後も継続的な上勝町との連携を希望し、現在はいくつかの企業の担当者と情報交換を行っている。このことから、このイベントのように様々な企業が上勝町に集う機会を作るゼロ・ウェイスト・コラボレーション・デザインセンター（仮）の活動の一環として、上勝町が主催するワークショップを定期的に開催すること

が期待される。Lv.1 の視察者の中で上勝町に関わりたい人たちの他、ゼロ・ウェイストに関心がある層、アイデア創出や実装について学びたい層がターゲットとして考えられる。

GREEN WORK KAMIKATSU の様子

2-3. 企業連携プロジェクトの事例紹介

今後、ZW-CDC の中心的な活動になる企業連携プロジェクトである。パイロットプロジェクトとして 4 つのプロジェクトに取り組んだ。計画書には記載していない 2 件について本項で紹介する。いずれのプロジェクトにも共通して以下のような想いを持った連携先と取り組むことができている。

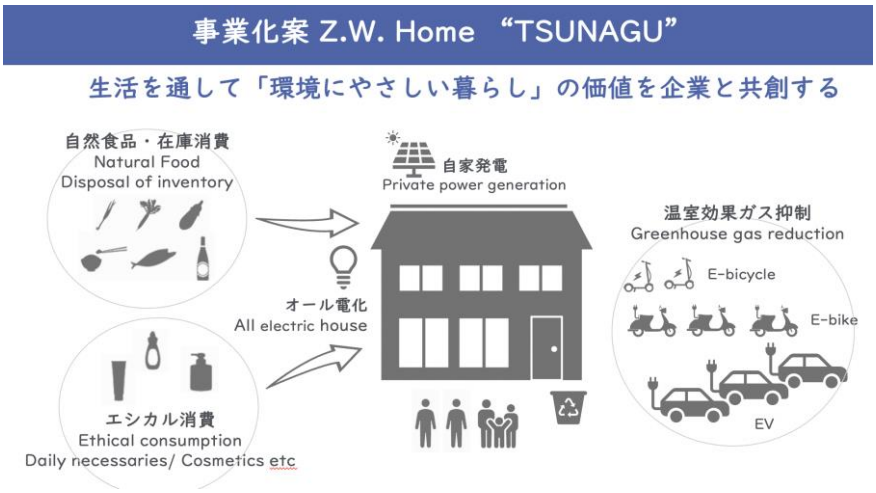
- 自社の利益だけではなく、商品開発を通じて上勝町の課題解決をしたい
- ゼロ・ウェイストの考え方に共感しており、より豊かな暮らしの実現を目指している
- 実際に上勝町に訪れるなど、上勝町の人々とのかかわりを重視している

アルファフードスタッフ×カフェ・ポールスター：量り売りの実証実験

左：浅井氏の会社で取り扱われているオーガニックナッツやドライフルーツの量り売りトライアル

右：浅井氏によるレクチャーの様子

参加者	アルファフードスタッフ（浅井氏）、管理栄養士（江間氏）、ゼロ・ウェイストタウン計画経済循環プロジェクト（東、赤木）
連携のきっかけ	2021 年 11 月に浅井氏が視察に来た際に、量り売りコンサルティングのニーズが高まっていることについて議論。上勝町への移住を検討している江間氏も連携に加わる。
目的	ウェイストにつながる量り売りの可能性を日本国内で広げるためのコンサルティングサービスを展開する。
進捗状況	浅井氏からはこれまで取り組んできた量り売りに関連するサービスや海外視察の情報提供、量り売りに適した素材について、東から上勝町内でこれまで取り組まれてきた量り売り店舗について共有された。2022 年 3 月にカフェ・ポールスターにて実施されたゼロ・ウェイストラウンドテーブルにて、浅井氏より町内外に向けたオーガニック食品や量り売りとゼロ・ウェイストの関係性についての講義があり、上勝町での量り売り店舗へのニーズを探った。

異業種合同チーム×RDND：ゼロ・ウェイストホーム	
 提案された企画のイメージ	
参加者	株式会社リクルートが企画するプログラムへの参加者である自動車メーカー、大手銀行、商社、エンジニアが集まったグループ異業種合同チーム「Jammin’ Team 」5 名
連携のきっかけ	Jammin Team からの視察依頼

目的	上勝町の課題解決に向けた事業案を立案し、プレゼンするという研修プログラムにおいて、先方としては情報交換を目的とし、こちらは各企業のリソースを上勝町に提供可能か、この事業の実現可能性があるのかを探った。
進捗状況	プレゼンは終了しプログラム自体は終了している。情報交換の中で株式会社 MUJI HOUSE 取締役の川内浩司氏と上勝町における企業連携の可能性について、徳島大学人と地域創生センターの松本卓也氏とは、e-bike 活用の実現可能性について協議した。今後は Jammin' Team は一旦解散となるため、ゼロ・ウェイストホーム実現を目指すのであれば、個別に MUJI HOUSE や徳島大学との連携を模索しなければならない。

3　上勝マインドの継承者を育成する仕組み

本項では「学校づくり」の計画策定に向けて実施されてきたディスカッションやリサーチについて記述する。

3-1. 推進員会で出された意見の総括

検討された教育システムの仕組みは以下の通り。上勝マインドを持った後継者を、他地域にも派遣できるようなスペシャリストへと育てることを目的とし、将来的には国内のみならず世界から人が集まる教育・学習の場へとなることを目指す。

上勝マインドの継承者を育成する仕組み

目的	手段		結果
	教育プログラムの開発	教育機関にかかわるステークホルダーの拡大	
他地域に派遣できるスペシャリストの育成	環境教育を軸とした高等教育機関を設立する	ビジネスと結びついた学習	世界から人が集まる学校
	サステナブルを土台とした学習プログラム	教育への投資として企業などから投資をうける（奨学金制度などの利用）	
	準備委員会の設立（予算、人員）	全寮制で生活の中で自然とZWが身につく	
	講師の選定		

また 2020 年 11 月に行われた推進員会では各メンバーから教育機関の具体的な素案を出しディスカッションを行った（下表参照）。共通していたのは「これからの社会を変えていく、という当事者意識があり自ら考え行動できる」という育成したい人材像。また対象年齢の想定にはばらつきがあったものの、13〜18 歳前後の中高校世代を想定しているメンバーが多くみられた。また学生の上勝での生活スタイルについてはほぼ全メンバーが全寮制（里親・ホームステイ含む）を想定。

	柿田	柿田２	藤井	青木	仁木	栗林	東	菅	松本	中野
名称	ゼロ・ウェイストスクール	上勝中学校	私立てら環境高等学校	松下村塾	ゼロ・ウェイストアカデミー	上勝楽舎	HFSK		ゼロ・ウェイスト研究所	
学校の種別	高等専修学校	中学校	高校	高校？	大学	フリースクール	中学校	フリースクール（塾）		
対象年齢＆求める人物像	高校生 １５歳～１８歳	１３歳～１５歳	中卒者	中卒～誰でも	中卒～誰でも	６歳～１８歳 何かで一人前になりたいと思っている人、一人前の人に会いたい人	１３歳～１５歳	１５歳以上、上限なし 自らの手で（小さなことからでも）地球環境を改善していくための行動をしようとする人		幼い頃の経験は大きい。小中学校くらいの年代。
教育目標	「諦めない市民」の育成	環境問題に対する基礎的な知識を持ち、これからの社会を変えていこうという気概がある人材の育成。	生きる力、協調性、ESDモデル	自分の頭で考える	この世界の当事者として自ら考え行動する人材	「思考と創造と革命に思いやりを」	限りがあるからこそ人は創造性を発揮できる。			ゼロから考えるだけでなく、潜在的な基礎的な人間の力を引き出してあげられるような場所をつくれたらいいのでは。
定員	３０人／学年	５人／学年	３０人／学年	３０人／学年	６０人／学年	中等部：１０人／年度 高等部：１０人／年度	１０人／学年	１クラス（経営が成り立つ人数）		
学費＋寮費	６１万／年	無料	１２０万～１８０万	スルー	町独自の補助金、奨学金など	中等部：６０万／年 高等部：７２万／年	５０万			
授業例	３つのコース	すでにある教科の中で取り扱うトピックを変えていく	一般教養、実習、プロジェクト、キャリア教育、グローバルコミュニケーション	現場を入れる（ゴミステーション、最終処分先の追跡など）高校なら一般教養が必要になる。Ex）教科書比べのレポートにて得た知識	高卒コース その他コース 上勝町を舞台に学べることを学ぶ。農業、食、観光、ゼロ・ウェイストの理念を通じてサステナブルな社会を考え、実践する。「衣食住」を自分でつくる。暮らしを豊かにすること。（芸術、スポーツ、音楽など）	高卒認定試験コース、共通教育、専門 学祭を狙いて大きいプロジェクトをやる		ゼロ・ウェイストに関することだけを学ぶ塾的なイメージ		自分が興味のあること。山の生活の方法や海のこと（海洋汚染、プラスチック）、高齢者から失われつつある技術の継承など
生活ケア	全寮制	家族寮	全寮制	全寮制 年齢のばらつきがあるので、中卒が多ければ、免許を取得させる必要があるかな？	全寮制、里親制度、集落親制度	全寮制 月ヶ谷温泉を借り上げる 通学：町営バス	全寮制	寮生活、ホームステイ、里親制度		寮？
将来の進路	政治家	県内外の高校、留学する	大学等への進学、どこでも１００％就職可能、起業	自分で考えろ。自分で切り開け。	世界を我がこととして考える。行動できる人材。	大学進学、企業就職、起業、先生として帰ってくる	帰ってきて教員			
講師陣イメージ	堀しんいちろう（紀伊国子供の村学園）	坂野、小林、藤本、ゼロ・ウェイストに取り組む企業、地方公共団体、NPOなど	①教員免許をもちつつ、人間的に豊かな心を持つ人 ②実践者、現場を	資格があることやプロである必要もないのでは？「今年の学生はこういうことをやるのか。」と	東輝実、町民	常識に囚われない学びの場をつくるため、資格などは不問。実践者から学ぶ 経験にお金を払う学校で学んでほしい	人間の	町内の様々なスキルを持つ人たち オンラインで特別講師も		町内のお年寄り

3-2. 参考となる学校に関する調査

現存の教育機関のサーチを実施した。既存の公教育制度にとらわれない自由教育や、少人数制度、全寮制など生活と密着した教育、環境や自然をテーマとした専門的な教育などの観点をもとに、参考となりそうな学校をリスト化した（下表参照）。

＜学校プロジェクトにおけるリサーチ学校リスト＞

学校名	コンセプト	分類	法人形態	設立時期	対象年齢	学生数	学費	寮の有無	所在地	リンク	キーワード
東京コミュニティスクール	家族的な雰囲気の中で子供たちが安心して学べる環境を提供し、人と人とのつながり・信頼の中で学び合うコミュニティスクール。少人数・異年齢による「実体験に基づく探究」と「テクノロジーを活用した学習の個別化」を実現するマイクロスクールを運営。日本の子どもたちが、正解なき人生や国境なきグローバル社会で、たくましく生き抜く力を育む仕組みを社会に広めるために活動。	幼稚園～小学校	NPO法人	2004年	3~12	幼稚園 18 名 小学 54 人 ※1 年生の募集は 9 人	入学金：20 万円 施設拡充費：10 万円 学費：78 万円/年 教材費：約 10 万円/年	無	東京都中野区中野	http://tokyocs.org/	自由 少人数制
ころあい自然楽校	豊かな自然の中で、子どもたちは毎日森や草原に出かけ、四季の変化を楽しんだり、自然を活用した遊びを通して、個性豊かな感性を磨く。小学生には、2020 年度からイエナプランを導入し、画一的な教育ではなく、個人を尊重し子どもが本来持っている探求心に基づいて、自律的・主体的に学習や行事が展開されるオルタナティブスクールとして展開。その他にも乳幼児と親子で参加し、自然育児について学び合う親子クラスを開催している。	幼稚園～小学校	NPO法人	2014年 週1の預かり保育コースからスタート	3~12	幼稚園 23 人 小学部は 2018 年開校のため現在少人数	入学金：1 万円 月謝：3 万 3 千円 施設維持費：1 万円/年	無	兵庫県加古郡稲美町	https://www.koroaishizen.com/	自由 少人数制 自然

茂来学園大日向小学校	日本初のイエナプラン教育に基づく小学校。イエナプラン教育の経験に学びつつ、日本の教育ならではの豊かさを活かすことで、新たな価値を提供する。 限られた一部の人のためだけに特殊な教育を行う学校ではなく、学習指導要領に基づいた教育を行う一条校である小学校の新たな在り方を示すことを目指す。	小学校	学校法人	2019年	6~12	約 180 名 ※1 年生の募集定員は 30 名	入学金：10 万円 施設維持費：2 万円/年 教材費：2 万 4 千円/年 学費：3 万 5 千円/月	無	長野県南佐久郡	https://www.jenaplanschool.ac.jp/	自由 少人数制
神石インターナショナルスクール	日本初の小学生を対象としたボーディングスクール。漢字、道徳など、文部科学省が認定しているカリキュラムは日本語、その他の科目は日英のデュアルランゲージで学べる。広大な敷地には牧場が併設され、子どもたちがガーデンを持って植物や野菜を育てるなど四季を楽しむアクティビティで、子どもたちの心と体の健康を育みます。	小学校	学校法人	2020年	6~12	144 人 1 学年 24 人	入学金：50 万円施設拡充費：10 万円/年授業料：460 万円/年寄宿料：140 万円/年施設設備費：12 万円/年教材諸費：12 万円/年その他制服費等：15 万円程度	全寮制	広島県神石郡神石高原町	https://jinsekikogen.co.jp/ja/	少人数制 寮生活自然
軽井沢風越学園	幼稚園と義務教育学校からなる 12 年間の幼小中混在校。講義中心の一斉授業・画一的なカリキュラム・固定的な学級編成等に代表されるような従来型の学校教育に対し、遊びが学びへとつながっていく、人間の自然な育ちを大切にした学校。前期（年少～2 年生）と後期（3 年生～7 年生）に分け、「ホーム」と呼ぶ 20 名の異年齢グループで生活・あそび・学びをつくる。	幼稚園・義務教育学校	学校法人	2020年	3~15	【幼稚園】 72 名（予定） ※年少の募集は 24 名 【義務教育校】 315 名（予定） ※1 年生の募集は 35 人	【幼稚園】 学費：54 万円/年 施設費：10 万円/年	無	長野県北佐久郡軽井沢町	https://kazakoshi.ed.jp/	自由 一貫教育 自然

ラーンネットグローバルスクール	モンテッソーリ教育を取り入れた幼稚園、3歳以上のアフタースクール、小学生向けのフルスクールを有するフリースクール。 学内では子どもの学習を側面支援するという意味で指導者を先生でなくナビゲータと呼び、すべての子どもが持っている「好奇心」「探究心」「自ら成長する力」を最大限に発揮する事を通じ、その後の人生を力強く生き抜く「幹」を育むことを目指す。	幼稚園～小学校	任意団体	1996年	3~15	幼稚園 15人 小学 24人	【幼稚園】 入園金：10万円 保育料：53万円/年 【小学部】 入学金：25万円 施設充実費：5万円 授業料：80万円/年 施設維持充実費：12万円/年	無	兵庫県神戸市東灘区（岡本わくわくハウス） 神戸市灘区六甲山町（六甲山のびのびロッジ）	http://www.l-net.com/	自由 少人数制 自然
いいづな学園	恵まれた自然環境の中で、かけがえのない「子ども期」の自由な心を大切にし、競争よりも様々な人々と共に学ぶ共感を、また四季折々の変化の中で、教科書だけでなく、自然や動物と出会い、手と体を使って学ぶ本当の知恵を大切にした教育を理想としている。五感をフル使って気づき、体を使って行動し、自らの頭で考え実践していく力を育み、幸せな自分の人生を選び取る自由で独立した人を育てることをめざす。	幼稚園～中学校	学校法人	2004年	3~15	幼稚園 60名小学 60人中学 40人	【幼稚園】 入園料：8万円特定保育料：9万円/年送迎バス：10万円/年【小中学校】入学金：20万円 授業料：57万円/年学級活動費：2~4万円/年 通学バス：15万円/年	無	長野県長野市大字上ケ屋長野市富田（グリーンヒルズ小中学校）	https://www.iizuna-gakuen.info/	自由少人数制自然
どんぐり自然学校	鹿児島市街地から車で20分ほどの郊外の住宅地にある、幼稚園～中学校までの一貫教育を行う学校。シュタイナー教育の理念に学びながら、鹿児島の地にふさわしい、郷土を愛するとともに世界へと目を向けられる、そんな人間としての学びの場をつくり上げることを教育理念とする。	幼稚園～中学校	NPO法人	1994年 幼児園からスタート	3~15	幼稚園 13人 小学 19人 中学 10人	【幼稚園】 入園料：6万円 保育料：3万3千円/月 【小中学】 入学金：9万円 学費：4万円/月	無	鹿児島県鹿児島市吉野町	https://www.donguri-steiner.net/	一貫教育 少人数制

箕面こどもの森学園	子ども一人ひとりの個性を尊重し、民主的に生きる市民を育むことを目的としたオルタナティブスクール（小中学校）。フレネ教育やイエナプラン教育をベースに、ESD（持続可能な未来をつくる教育）を行っている。	小中学校	NPO法人	1999年大阪に新しい学校を創る会発足から	6~15	約60名 小学40名 中学20名	入学金：25万円 施設料：5万3千円/年 学費：4万円/月	無	大阪府箕面市	https://cokreono-mori.com/kodomonomori/index.html	自由 一貫教育 少人数制
きのくに子供の村小中学校	戦後はじめて学校法人として認可された自由な学校。子どもたちの多くが寮生活を送り１学年２０名。宿題がない。テストもない。「先生」と呼ばれる大人もいない。子どもは自分のしたい活動をよく考えて、その年のクラスを選び、授業の多くが体験学習にあてられる。どのクラスも異年齢学級。	小中学校	学校法人	1992年	6~15	1学年10~20名 ※縦割り学級で1クラス25名程度	入学金：25万円 学費：5万円/月 寮費：6万円/月 ※過去の卒業者の書き込みより	有 7割の生徒が入寮	和歌山県橋本市	http://www.kinokuni.ac.jp/nc/html/htdocs/?page_id=13	自由 一貫教育 少人数制 寮生活 自然
粟島浦村立小中学校	地域と学校の双方向の連携・協働による子供の学びと地域づくりをミッションに掲げており、入学・転校を希望する児童・生徒を「しおかぜ留学」という形で受け入れ、島民との交流、粟島馬との交流などを中心とした豊かで個性的な教育体験をもとに、島の子どもたちと「しおかぜ留学」の子どもたちとが共に社会を生み出し、社会に貢献する人となることを目的としている。	小中学校	公立	1892年	6~15	小学10名 中学校20名	留学生費用：5万円/月	有留学生は村が用意した寄宿舎で生活。	新潟県岩船郡粟島浦村	https://www.awashimaura.ed.jp/	少人数制 寮生活自然地域と協働

森の学校楠学園	鹿児島県にある武家屋敷を校舎とする、小規模なフリースクール。 人はみな それぞれの能力を持っており、子どもたちのもっている力を思う存分に伸ばし、自分らしくいきいきと生きていけるよう、世の中がどう変化しても対応できるよう本質を見抜く感性を磨くことを目指す。	小中学校	NPO法人	2008年	6~15	―	入学金：4万2千円 授業料：3万5千円/月 寮費：4万5千円/月	有	鹿児島県 姶良郡 蒲生町	https://naturalstance.jp/	少人数制 寮生活 自然
WING SCHOOL	豊かな自然との触れ合いを通して、自分らしくエネルギー値高く生きる「感性」が開かれること、わかりやすく楽しい授業で子ども達の「知性」を高めること、それぞれが選んだテーマで取り組むグループプロジェクト等のサイクルを繰り返すことで「プロジェクト力」を育み、夢実現の力を身につけていくことを目指す。	小中学校	一般社団法人	2018年	6~15	64人 ※2学年ずつの1クラス16人	入学金：10万円 授業料：10万円/月 管理費：1万5千円/月	無	熊本県 熊本市 中央区	https://wingschool.jp/	一貫教育 少人数制 自然
あいち唯の森	1. 自分らしく十分に生きる学校、2. 学ぶことの本質を味わう学校、3、より良い未来をともに創る学校を基本理念とするオルタナティブスクール。	小中学校	NPO法人	2019年	6~15	小学48人 中学24人 （予定）	授業料、教材費、施設費を合わせて5万円/月を超えないように設定	無	愛知県 名古屋市 緑区鳴海町	https://www.yuinomori.org/	一貫教育 少人数制
おかやま希望学園	不登校など既存の学校になじみにくい子どもたちが、「笑顔を取り戻したい」、「自信を回復したい」、あるいは自然豊かな環境のもとで「自分らしさ」を存分に発揮したいと願って集い合っている学園。全寮制による、学習と生活の一体化した教育を通じて、知・徳・体のバランスの取れた、個性・社会性豊かな子供の育成を目指す。	小中学校	学校法人	1995年	6~15	―	入学金：15万円【小学校】7万5千円/月【中学校】8万5千円/月※寄宿舎費含む	全寮制	岡山県 加賀郡 吉備中央町	http://www.kibou-gakuen.jp/Intro/Message.html	一貫教育 寮生活

札幌サドベリースクール	アメリカのボストンにあるサドベリー・バレー・スクールに共感し同じ理念の下で運営している学校。 公立学校が合わない、子どもにとって良い居場所であること。個人の発達を長期的に見守り、状況にあったフレキシブルな対応をすること。少人数制でひとりひとりとしっかり関わること。生涯に渡って自主的で主体的な学びができるよう、生きる力の土台となる自己肯定感を育むこと。を理念とする。	年齢分け・クラス分けなし	一般社団法人	1012年	5~18	―	入学金：15万円 学費：3万円/月	無	北海道札幌市	https://sapporo-sudbury-school.jimdosite.com/	自由 一貫教育
シュタイナー学園	ルドルフ・シュタイナーの教育理念に基づき、小中高12年間一貫の芸術性豊かなカリキュラムにより、“あたま”と“こころ”と“からだ”のバランスのとれた、どんな時代・どんな環境においても、自分の人生を、自分らしく生きていける、ほんとうの意味で自立した「自由な人間」を育てることを目指す。	小中高一貫	学校法人	1987年 1年生8名のみのフリースクールか	6~18	約300人 ※1年生の募集定員は26名（男女合計）	入学金：45万円 学費：4万3千円/月 ※小学部からは 学費5万3千円/月	無	神奈川県相模原市	https://www.steiner.ed.jp/	自由 一貫教育 少人数制
京田辺シュタイナー学校	ルドルフ・シュタイナーの教育理念に基づき、初等・中等部では一人の担任が8年間継続して受け持ち、一人ひとりに寄り添って成長を見守る。高等部では、教科ごとに専門の教員や外部講師による授業が行われ、工芸・芸術・農業・福祉体験など様々な分野の実習も多く盛り込まれる。	小中高一貫	NPO法人	1994年保護者が中心となった勉強会からスタート	6~18	約270名	入学金：30万円施設維持協力金：25万円以上 学費：5万6千円/月	無	京都府京田辺市	https://ktsg.jp/	自由一貫教育少人数制
自由の森学園	点数序列主義に迎合しない新しい教育をめざして設立。競争原理をテコとせずに、本来の学びを授業をとおして実現しようとする。	中高学校	学校法人	1985年	13~18	中学234名 高校約530名	入学金：27万円 学費：57万円/年 入寮費：15万円 寮費：100万円/年	有	埼玉県飯能市小岩井	https://www.jiyunomori.ac.jp/	一貫教育 寮生活

宮崎県立中等教育学校	森林という自然を教育のフィールドとして、自然に対する畏敬の念を育て、 豊かな人間性と創造力・協調性を培い、主体的に生きる人間の育成を図ると共に、６年間の計画的、継続的な教育指導により、効率的、一貫的な教育を実現。また全寮制による生活体験を通して、社会性や自己管理能力、自主性、自立性、協調性、 忍耐力、指導力等を幅広く育てる。	中高学校	公立	1994年	13~18	中学 116 名 高校 113 名	寮費：3 万 3 千円/月	全寮制	宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町	http://gokase-h.com/	一貫教育 寮生活 自然
Loohcs 高等学院	「まるで、１５歳からの大学」として、“高校”という枠に限定することなく、学びたいということを専門的に深めることができる学校。授業や学び方、学校行事は学生が選択し、自ら学校を創っていくことができる。 アクティブラーニングが中心となり、一般高校にはない個人の興味に沿ったハイレベルな授業が受けられる。	高校	株式会社	2019年	16~18	30 人 ※募集人数は最大 10 人	入学金：12 万円 授業料：約 100 万円/年 高校卒業単位習得費：約 30 万円/年	無	東京都渋谷区桜丘町	https://loohcs.co/	自由 少人数制 専門性
UWC ISAK Japan（インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢）	教育を通じて、人々や国や文化を結び、平和と持続可能な未来に貢献することを理念としたインターナショナルスクール高校。「変革を起こせる人」を育てる訓練と実践を積み重ねること、その中核をなすリーダーシップやデザイン思考のプログラムと、国際バカロレア・ディプロマ・プログラム（IB DP）を通して、生徒たちは必要な知識や思考、マインドセットを身につけていくことを目指す。	高校	学校法人	2014年	16~18	120 人※1 年次の募集は 40 人	入学金：30 万円授業料：360 万円/年寮費：140 万円/年施設費：30 万円/年諸費用：15 万円/年	全寮制	長野県北佐久郡軽井沢町	https://uwcisakjp/jp/	少人数制 寮生活

島根県立隠岐島前高等学校	日本各地に広まっている「高校魅力化プロジェクト」発祥の高校。危機感を持った地域が、県立高校と協働することでプロジェクトを立ち上げた。学校・行政・地域住民が協働し、日本各地から意志ある入学者を募る「島留学」制度や、地域住民が島留学生の支援をする「島親」制度、山積する地域課題にチームで協働的に取り組む課題解決型の探究学習の構築、学校・地域連携型公立塾「隠岐國学習センター」の設立など様々な取組を進めている。	高校	公立	1955年	16~18	180 人程度	諸会費等納入金：27 万円/年 ※2 年次の海外研修旅費含む 教材・制服費：約 10 万円 入寮費：1 万円 寮費：1 万 2 千円/月 食費：2 万 8 千円/月	有	島根県隠岐郡海士町	https://www.dozen.ed.jp/	少人数制 寮生活 自然 地域と共同
島根県立津和野高等学校	学校の寮とは別に、NPO 法人 bootpia が町内の観光宿と連携しながら運営する「地域に暮らし・学ぶ教育型下宿」など”まち親”のサポートの元地域で暮らせる下宿がいくつか存在。学校と一体となって生徒を支える町と人、公営塾「HAN-KOH」のスタッフや教育魅力化コーディネーター、全国から学びを求めて来る人など、多様な人が集まっている。	高校	公立	1908年	16~18	280 人 うち 70 名程度が県外生	【学校寮】 入寮費：5 千円 寮費・食費：3 万 5 千円/月 【下宿】 住居費：約 6～7 万円 ※下宿により異なる	有	島根県鹿足郡津和野町	http://tsuwano.ed.jp/#HOME	寮生活 自然 地域と共同
きのくに国際高等専修学校	広く国際問題、社会問題に取り組み、自分自身と社会について深く考えたい人のための学校。時事問題、諸文化、言語、芸術など、多彩な授業から選択できる。学校の規模は小さいが、活動の幅は広く、そして多くが専門的となっている。	高等専修学校	学校法人	1998年	16~18	47 名	入学金：24 万円 学費：7 万 5 千円/月 諸経費：2 万円（通学生）/月 5 万 5 千円（寮生）/月	有	和歌山県橋本市	http://www.kinokuni.ac.jp/nc_kousen/html/htdocs/	少人数制 寮生活 専門性

自由学園	「真の自由人」を育てるをコンセプトに、どのように自分らしく、主体的に生きていくかを学ぶ。キリスト教を土台とした教育。「24 時間の生活すべてが勉強」という教育理念のもと、仲間と共に行う学校生活、寮生活、土を耕し作物を育てる経験等の中で、自ら考え行動する「よく生きる人」を育てていく。	幼稚園～大学 ※45 歳以上向けコースもあり	学校法人	1921 年女学校（現在の女子部中等科・高等科）のみからスタート	4~22	小学 180 名中学 200 名高校 240 名	【小学部】学費：6 万 5 千円/月【中・高等部】入学金：37 万円（寮生）学費：5 万 5 千円/月寮費・食費：5 万 7 千円/月	有中学以上 3/4 の生徒が入寮	東京都東久留米市	https://www.jiyu.ac.jp/	一貫教育寮生活
日本自然環境専門学校	実務的な分野である環境・自然を専門的に学ぶため、大学等よりも実践的な実習を多く行う専門学校。人に、自然に、環境にやさしい社会を目指すため、これらの分野の人材育成を本格的に行うため、環境を意識した人材育成に励み、新たな時代のパイオニアを目指す。	専門学校	学校法人	※簿記学校からスタート 1962 年	18～ ※高校卒業または同等以上の人	255 人 ※1 学年約 30 人×4 学科	入学金：10 万円 授業料：63 万円/年 施設維持費：41 万円/年 諸経費：20～30 万円/年	無	新潟県新潟市中央区	https://www.caretech.ac.jp/index.html	少人数制 自然・環境 専門性
krogerup højskole	デンマークの神学者 Hal Koch によって創設されたフォルケホイスコーレ。さまざまな文化背景を持つ人びとが共に生活することで、多角的な視点と民主主義的思考を育む。	フォルケホイスコーレ	ー	1946 年	10 代後半～20 代前	約 100 名（そのうち約 20 名はデンマーク国外）	授業料・食費・宿泊費：7,000 クローネ（2018 年 5 月時点で約 12 万円）/月	全寮制	North Zealand in Denmark	https://krogerup.dk/en/	自由 寮生活 専門性
芸術文化観光専門職大学	日本で初めての「芸術文化観光」を深く学ぶ公立大学。芸術文化と観光を結びつける学びの場として、芸術文化及び観光の双方の視点を生かして地域の活力を創出する専門職業人を育成する。	専門職大学	公立	2021 年	18～	初年度募集定員は 80 人	入学金（県内居住者）：28 万円 入学金（県外居住者）：42 万円 授業料：53 万円/年	無	兵庫県豊岡市山王町	https://www.at-hyogo.jp/	専門性 新設学校形態

静岡県立農林環境専門職大学・農林環境専門職短期大学	より高い技術と経営マインドを持った農林業者を養成する。愛称は『アグリフォーレ』とし、Agriculture(農業)の“アグリ”と Forestry（林業）や Forest（森）の“フォーレ”を合わせた造語で、「農業・林業のプロフェッショナルを養成する大学」、「農林業を学ぶ緑豊かな森のような学び舎」などの意味が込められている。	専門職大学・専門職短期大学	公立	2020年	18～ ※高校または通常の課程による	募集定員は 24 人	【4 年制】入学金（県内者）：14 万円入学金（県外者）：36 万円授業料：32 万円/年【2 年制】入学金（県内者）8 万 5 千円入学金（県外者）22 万円授業料：23 万円/年	無	静岡県磐田市富丘	https://shizuoka-norin-u.ac.jp/	自然・環境専門性新設学校形態
green school	「生きた」カリキュラムにより、自然環境の中で、起業家学習を通じてサスティナビリティを教育する学校。 学習者のグローバルコミュニティを作り、世界を持続可能なものにすることをミッションとしている。 子供たちの生活と学習に刺激を与え、絶えず変化する世界で目的を持って成長できる新しい教育モデルを提唱。 竹でできた校舎やコンポレストトイレ、自然エネルギーを使うなど学内も徹底的に環境に配慮されている。	幼稚園～高校	― ※私立	2008年	3~18	約 500 人	総入学料：69,000,000IDR（訳 50 万円）授業料：約 200 万円/年	無	Bali in Indonesia	https://www.greenschool.org/	自由 自然・環境

上記リストの中より特に「日本自然環境学校専門学校」を教育分野・専門性などの観点から参考学校としてピックアップ。次項のコンセプト素案の作成において参考学校として掲載している。

3-3. 学校のコンセプト素案

推進員会でのディスカッション及び現存の学校のリサーチ等をもとに、上勝における教育機関の素案を作成した（計画書参照）。3-2 項のリストより参考事例としてピックアップした「日本自然環境専門学校」を参考に「上勝ゼロ・ウェイスト専門学校（仮名称）」の素案を作成した。

事例紹介　～日本自然環境専門学校～　https://www.caretech.ac.jp/index.html

コンセプト

未来の環境のために未来の自分のために「環境」を学ぶという選択

概要

修業年数：２年（自然環境研究科のみ３年）
就学スタイル：３/４が県外からの一人暮らし
学生数: 255人（1学科1学年約30人）

学科・コース
⇒目指す職業

■**自然環境保全科**：生態系や自然環境を守る知識と技術を学ぶ
⇒林野庁・林業職職員、環境省レンジャー、環境調査会社、森林組合・木材会社、河川・土木工事など
■**環境教育科**：自然環境の大切さ・楽しさを伝える技術を学ぶ
⇒自然ガイド、自然公園、博物館相当施設、アウトドア施設、環境調査会社、地域おこし協力隊など
■**環境園芸緑地科**：人と自然が共生する、環境にやさしい環境をつくる
⇒樹木医、植物園、造園会社、農業法人、ガーデンセンター、ガーデンデザイナーなど
■**自然環境研究科**：自然環境保全に必要な高度で幅広い技術を３年間で習得する
⇒環境調査会社、測量会社、環境分析会社など

学費

年間約１００万円（諸経費として別途２０～３０万円）

14

上勝ゼロウェイスト専門学校（仮名称）

コンセプト

ゼロウェイスト理念を理解・実践し、自然と生きる力・自ら考え行動する力を身に付ける

経済社会、実生活における“サスティナブル”を上勝で土着的に学ぶことで、自然と共存する知識とスキル（手仕事）を持ち、社会における様々なフィールドにおいて、循環型社会（サーキュラーエコノミー？）の考えを実践できる人材を育てる。

概要

修業年数：2年
就学スタイル：半寮制（ルームシェア・古民家再生）
学生数: 160人（１学科コースあたり40名程度）

学科・コース

■**環境政策コース**：農村部の自然保護やごみ処理、暮らしに関する政策のスペシャリスト
■**農業・食物環境コース**：フードロスや生ごみ処理（コンポスト）、持続可能な農業と産業（飲食店）の関係などのスペシャリスト
■**デザイン・マーケティングコース**：ゼロウェイストの考えや事例の学びと実践（企業協働）を積んだビジネスデザインにおけるスペシャリスト
■**素材開発・製造法コース**：社会におけるプロダクト素材やその製造法について、廃棄の視点から科学的に学ぶスペシャリスト

学費

年間約１００万円

15

2021 年 3 月に行われた推進員会にて上記素案をもとにディスカッションを行った。推進員メンバーからの意見を以下に記載する。

【専門学校という形態について】

- 高校がいいと思っていたが設立のハードルが高いという面もあり、専門学校なら既得権益はなさそうだと思った
- 大学卒業の資格保有は必要かどうか、特に親世代が気にすると思う
- 親目線で考えると専門学校という選択肢を考えにくいところがあり、ゼロ・ウェイストの専門学校のイメージがどこまで伝わるかどうかが大事
- 参考事例の専門学校が就職先を示しているのはすごくいい

【上勝町・町民とのかかわり方について】

- 想定されている総学生数 160 名の全員が選挙権を持っており、1500 名の町に 160 名の選挙権がある人がくるインパクトが大きい
- 週末にバイトしてくれる人がいない、という問題は改善されそうという意味でも 160 人のインパクトは大きい
- ゼロ・ウェイストに熱心でない人が、これらの機関や学生たちを受け入れる土壌をつくることが重要になる。
- 必要な場になるなとは思うが、1500 名の町の中でどう機能・連携していくかが大事になる
- 新しく来てくれる 160 名の学生が、上勝にいる子どもたちにとって影響を与える存在になってほしい。
- 若者が頑張ってくれていると町民が思える仕組みを作り、地域に還元できるかかわりをもてたらいい。
- 町内の子供たちにメリットがあれば、それが学校の魅力につながると思う
- いろいろな人が来てくれる可能性があるのはいい
- 上勝に住んでいて子育てしている親として子どもを行かせたいか？大人の人は学ぶ場としてはいいと思う
- 最初は町外から生徒が来て、卒業生による実績ができて、上勝の親が行かせたいと思うようになるのでは？
- 学んで帰っていくようなものではなく、上勝の町を実践の場として入り込んでもらうことで、町の人の意識も変わるのではないか
- 町内のニーズとしては、10 代の流出を防ぐことは喫緊の課題である

【学校のコンセプトやカリキュラムについて】

- 最初から 4 コース全部やらなくてもよく、まずはひとつ作ってみるのでもいい
- 実際にプロダクトやシステムをデザインし、アイデアが浮かんだときに形にできる「ものづくり」のコースをつくりたい

- 古民家再生できる人材を育てる専門コースを作り、自分らの住むところをつくってから授業を始めるなど
- 現在オンラインラーニングにシフトしているが、オンライン教育はやるのか？
- 10 年の間にあらゆる職種の人が環境をベースに考えるのが当たり前になり、環境の専門家がいなくなる。そういう中で、上勝で学べることは環境という切り口で良いのかどうか

【企業との連携について】

- 今の企業がどういう人材を求めているかリサーチしてほしい
- 全員が地方で生きることだけを考えるのではなく、企業に入っていろいろなことを変えていくことも面白い
- 実際の企業の協力を得て最新の知見や技術も取り入れながらやっていけるといい
- 学校経営はなかなか厳しく、そのあたりも含めた企業との連携も重要になると思う

さらに推進員会でのディスカッションを踏まえ、上勝における学校のターゲットである学生になりうる人物像のペルソナを作成。若い世代を対象の中心としたフルタイムでのカリキュラムと、様々なライフスタイルやキャリアとの両立が可能となるようなパートタイムでのカリキュラムの両方を想定している。

現状	上勝学校在学中	卒業後
【C】19歳・高卒学生 • 私立高校で探究的に学ぶ中で「環境」に関心を持った。 • 成績的には大学にも行けるが、環境を仕事にしたいという明確な目標があるので専門学校への進学を希望。	• 寮で共同生活、上勝の人との繋がりから上勝を第二の故郷と感じる。 • 仲間たちと様々な実験を町の中で行う中で、社会と自分のかかわり実践的に学ぶ。 • 自分たちのプロジェクトのスポンサーや協力者を自ら探してくる。	• 学校のサポートを得て町中実験を行った際に協力してくれた企業の社長と意気投合し就職。 • 上勝町に暮らしながら、実験してきた内容を事業化する部署で働く。 • 自立的な動きが求められるが、学校も協力してくれるので心強い。
現状	上勝学校在学中	卒業後
【D】25歳・若手社会人 • 経済学部を卒業し就職。学生時代に環境にかかわる団体に所属していた。今でも活動に参加しており、仕事にしていきたいと考えている。 • 環境にかかわる仕事をするための技術とネットワークを求めている。	• 町内に独り暮らしをしている。最初は寂しくもあったが、町内の同年代とのつながりができて楽しい。 • 町内の企業からインターンやアルバイトの話をもらい、暮らしと仕事と学びが循環する感覚を得る。 • 町内企業を巻き込んだプロジェクトを組成して取り組んでいる。	• 町内の企業から業務委託の仕事をもらいながら、仲間を募ってあれこれプロジェクトに取り組んでいる。 • プロジェクトには学校も協力してくれて、学生も参加してくれている。 • 将来的には、今考えているアイデアを事業化し起業したい。
現状	上勝学校在学中	卒業後
【E】40歳・2児のママ • 18年、出版社で働いてきたが、子育てとの両立がきつい。会社のCSR活動で知った環境分野に興味を持つ。 • 子どもたちと暮らしながら学べる環境を求めている。	• 子どもと3人で町営住宅で暮らす。子どもたちは上勝の保育園と小学校に通っている。夫もリモートワークが中心になってからは、ほとんど一緒に暮らせるようになった。 • 自分の凝り固まった考え方から抜けるのに時間はかかったが、経験を活かしながらプロジェクトを支援する。	• 学校でプロジェクト支援の仕事をもらえることになった。フルタイムではないので、子どもたちとの時間も取れる。出版社での経験を活かして広報誌作成も行っている。 • 毎年入学してくる学生たちの学びのサポートをすることにやりがいを感じる。
自然の中で楽しく生活しながら社会へ出る準備ができるなら、行ってみたいかも。	学校や町内では様々な人人からも刺激を受け、上勝ライフをエンジョイ。	

【B】

名前	荒井　梨絵	職業	私立大学生
年齢	21歳	世帯年収	1000万
家族構成	父・母・姉	住所	兵庫県神戸市

現状

大学では環境政策学を学び、環境問題やそれに取り組んでいる国や自治体の取り組みなど広く知識を広げてきた。
ゼミの活動で国内外の視察旅行も経て、座学では得られない知識や経験が必要だと実感。このまま、一般企業に就職する道でいいのか・・？と進路に悩み始めている。
大学を休学して、または卒業後に海外留学を決める友達をどこか凄いなぁと思う反面、自分はもっと身近で小さな冒険の方が性に合っていそう、と思い上勝での学びや出会いに魅力を感じている。

上勝学校在学中

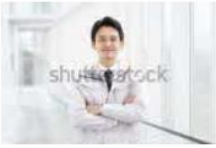
環境政策コースで、農村部におけるゴミや問題やそれに伴う自治、高齢者の生活のしやすさなどをテーマに積極的にフィールドワークを行う。
上勝学校での経験やスキルを活かして大学では概念から、より実生活に結び付いた現実的なゼロウェイストのあり方をテーマに卒論を仕上げて卒業。
上勝のリノベ古民家でシェアハウスをしていた女子3人組は、一生の付き合いになりそう。

卒業後

ゼロウェイストジャパンにて様々な経験を積んだ後、独立。
ゼロウェイストのアドバイザーとして、様々な自治体や企業、団体のアドバイザーを務める。
各種講演会など含め、大学、上勝学校時代のネットワークをフルに生かして“人”が暮らしやすいことを念頭に置いた、ゼロウェイストの概念を広めている。

学生のペルソナ（パートタイムコース）

【A】



名前	桜井　忠司	職業	飲料メーカー勤務
年齢	34歳	世帯年収	800万
家族構成	妻・息子	住所	東京都墨田区

現状

飲料メーカーの素材開発部として勤務して10年、SDGｓへの取り組みと飲料メーカーとしての社会的な責任という観点から、社内で発足された特別プロジェクトのメンバーに抜擢された。
今後、ペットボトルに代わる素材はどのようなものがあるのか、また社会の中での飲料のあり方、廃棄の工程や社会へ与える影響など、長期的な視野を持ちつつ、自分事として何か勉強をしないといけない、と考え勉強の場を探していた。

上勝学校在学中

素材開発・製造法コースにて、飲料のみならず様々なプロダクト素材と、それらが社会や人々の生活に与えている影響などを学ぶ。これまで携わってきた、飲料業界における素材の知識や常識が、上勝というフィールドで学ぶことで全く違う側面を見ることができた。
週末には家族も上勝へ滞在。都内ではなかなか体験できないことばかりで、親子ともに上勝が大好きに。カリキュラムが終わってしまうのが少し寂しく、学校の同期と共同で別荘を持とうか真剣に考え中・・。

卒業後

学んだことをプロジェクトチームに持ち帰り、新素材の開発に着手。
定番ラインの代替素材へのシフトチェンジと同時に、自社回収・廃棄サイクルの仕組みづくりのプロジェクトを発足。
また給水スポットの設置、認知の拡大など開発部の垣根を越えて様々なアプローチから大手飲料メーカーという立場から環境問題に取り組んでいる。

現状	上勝学校在学中	卒業後
【B】21歳・大学生 • 大学で政治学を学んでいるが、実践的な感じがしない。環境にかかわる行政の取り組みに関心があることから数か月のパートタイムプログラムで実践的に学んでみたい。 • 就活に活かせるといいな。	• オンラインで2か月間のインプットを経て、夏休みを活用し1か月間滞在するプログラムに参加した。（合計3か月のプログラムを想定） • フルタイム学生たちとプロジェクトに参加することで実践の部分を経験できてよかった。	• 就職は金融系の会社にしたが、環境についてインテンシブに学んだ経験やPBLでの経験を今後の仕事の中で活かしていきたいと思っている。
現状	上勝学校在学中	卒業後
【C】36歳・教員 • 総合学習の時間でSDGsについて教えようと思ったが、却って自分の無知に気づき愕然とする。 • 体系的に学び、すぐに授業でも実践できるようなプログラムを求めている。	• オンラインで2か月間のインプットを経て、夏休みを活用し2週間滞在するプログラムに参加した。（合計3か月のプログラムを想定） • 最後の2週間は、様々な地域の教師たちと一緒に授業を考えることができてすごく楽しかった。 • を組成して取り組んでいる。	• 学校でつくった授業を早速実施してみた。得られたフィードバックをチームメンバーに共有しさらなる改善に向けて取り組んでいる。 • 一緒に考える仲間ができたことが何より嬉しい。
現状	上勝学校在学中	卒業後
【D】55歳・サラリーマン • リタイア後の生活について考えたときに、環境のために良いことをしたいと思った。 • まずは環境について学び直しをしてみよう。	• オンラインで2か月間のインプットを得るコースに参加する。1か月間、上勝には滞在できないものの2泊3日で同級生たちに会いに行ってみた。 • 先生や学生、上勝町をリアルで見ることができて、すごく良い時間だった。	• リタイア後の移住先として上勝町はどうか妻に相談してみた。 • とりあえず、妻にもコースを受けてもらうことになっている。

3-4. インタビュー調査の実施

計画書に記述したインタビュー計画に基づき、インタビュー調査のスタートとして、まずは 2021 年 5 月に教育現場で働く教員を中心にインタビューを実施した。以下にインタビューの概要及び結果を記載する。

インタビュー実施概要と対象者

■実施期間：2021年5月10日～5月30日
■実施形態：オンラインインタビュー（Zoom）
■インタビュー時間：約1時間

	現職	教員歴	担当教科・専門分野・課外活動など
A	愛媛県立　中高一貫校教員	12年	保健体育／バレーボール
B	愛媛県立　公立高校教員（産休中）	14年	保健体育
C	徳島県上勝町立　中学校教員	5年	英語／弁論大会・講師派遣型授業など
D	徳島県上勝町立　小学校教員	4年	地域に根差した総合学習
E	神奈川県海老名市立　中学校教員	10年	理科／学年主任・PBL
F	教員向け教育プログラム提供企業　勤務	ー	女性のキャリア／教員における意識改革
G	徳島県　私立中高一貫校教員	40年	生物／生徒会活動

質問項目

1. **過去のキャリアを通して感じている教育現場の実態について**
   - 地域（過疎部と都市部など）による格差
   - 社会状況や時勢に伴う変化（制度やカリキュラム、生徒や保護者、指導者の意識など）
   - 教育現場の問題点や課題
2. **子供たちの進路選択や将来について**
   - 進路指導における考え方
   - 受験・学歴への意識や姿勢
   - 専門学校へのイメージ・選択肢について
3. **環境問題と教育の関わりについて**
   - 教育委員会や学校としての取り組み
   - 生徒たち自身の意識
   - 現在取り組んでいる活動やキーパーソン
4. **自身の教育観について**

5

各質問項目に対するサマリーは以下のとおり。

インタビューサマリー

1. 過去のキャリアを通して感じている教育現場の実態について

	地域（過疎部と都市部など）による違い	学校の形態による違い	社会状況や時勢に伴う変化
生徒の意識や特徴	• 過疎部の子供たちは外的な刺激を受ける機会が少なく、それが考え方や将来への選択肢における知識にも影響している。	• 公立中高一貫校の子供、特に中学生は受験勉強のみでなく素直に社会のことを学ぶことや貢献することへの意欲が高い場合が多い。	• デジタルツールの影響か、内向的な思考が行動に現れるケースが多い一方、好むインプットの形や自身の表現や発想の仕方は柔軟かつ多様になりつつある傾向もみられる。 • 「今の子は賢い」という言葉が散見された。社会への関心が深い一方、現実主義な思考も見られ無難で堅実な将来を想定している子供が多い。
保護者の意識や特徴	• 子供への教育意識の高さは都市部に多くみられる • 過疎部では親の価値観の偏りが教育にも現れている。	―	• 生活面での校則には自由を求める一方、学習面においては過干渉にある傾向。 • 少子化や私立高校の助成などの影響か、親の学校選択の基準に変化が出始め人気校（高倍率校）が変わりつつある。
体制や教育環境など教育現場における現状	• 同じ地域でも、学校（校長）次第では外部からの刺激や交流の機会を設けることを積極的に行っているところもあり、早い段階（小学生）での視野や価値観を広げるきっかけになっている。	• 進学校は進学率や進学先が学校の一つの指標となっている。 • トップダウンの傾向が強く、現場の意見や考えが実際に実施・反映されるかどうかは学校により大きな差が生まれがち。	• 探求型学習への関心は学校・教員など教育業界で広がりつつある。 • 受験や進学を視野に入れた従来の授業と、生徒主体の学びを重視した授業の双方の考え方での分離や乖離が見られる。

2.　子供たちの進路選択や将来について

	受験（進路指導）・学歴への考え方	専門学校へのイメージ・選択肢について
生徒の意識や特徴	・興味関心だけで突き進むのではなく、将来現実的に生活するために何が最善かを冷静に考えている子が多い。	・環境問題に興味関心のある生徒はある一定数見られるものの、子・保護者共に現実的な安定志向から進路については「まずは大学に行ってから考えよう」となる。
保護者の意識や特徴	・「将来への可能性を広げる」という考えからくる学歴意識は根強い傾向にある。	
教員としての考え	・否定しないこと、また様々な能力を引き出して応援することを重視しているという声が多かった。 ・子供たち自身で考えて選ぶことも大事だと考えている。	・学費が高いイメージがある ・専門知識や技術を身につけ、確実に就職までつながるところはメリット
体制や教育環境など教育現場における現状	・従来型学習×生徒主体型学習の分離や乖離が受験制度においても一つのテーマとなっている。 ・国内大学におけるネームバリューは下がりつつある（企業勤務のF氏より）	―

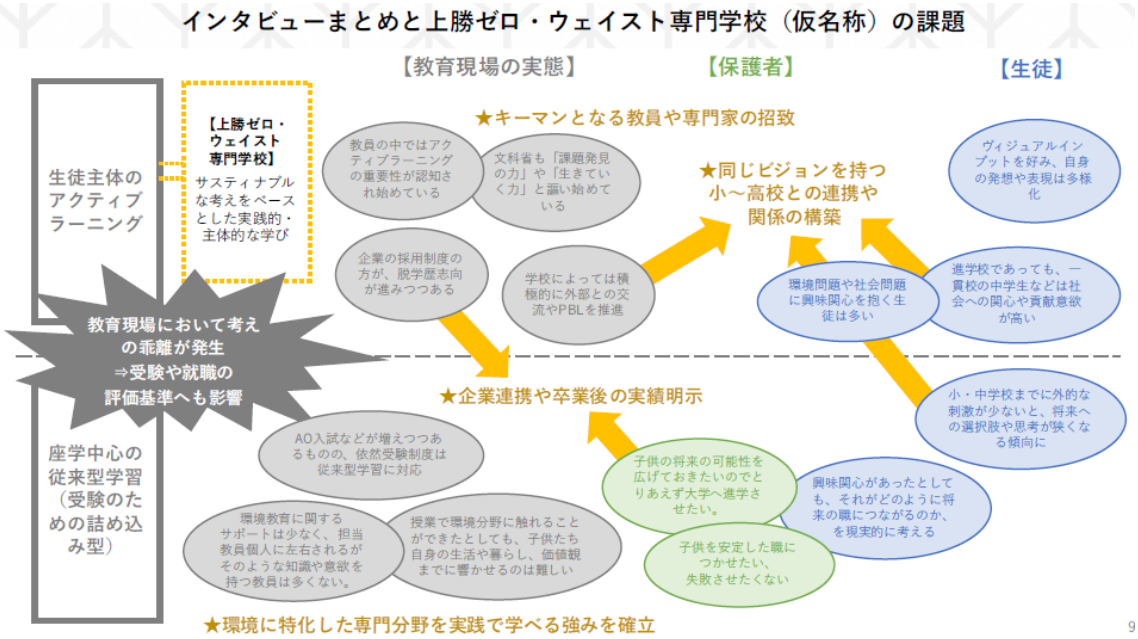
3.　環境問題と教育の関わりについて

	教育現場における環境問題について
生徒の意識や特徴	・小中学生は、学校で学習（体験）したことが大きくその後の興味関心に影響することが多い。 ・上勝町の子供は環境に関する意識や価値観はすでに生活に結び付いて当たり前になっているため、新鮮に感じてない場合がある。 ・中高生の中では、環境分野に興味があるという子供が多くみられる。
体制や教育環境など教育現場における現状	・小中高校共通して、環境教育に関してはカリキュラムや制度に要るサポートは少なく、担当教員個人に左右される場合が多く、そのような知識や意欲を持つ教員はまだ多くない。 ・授業で環境分野に触れることができたとしても、子供たち自身の生活や暮らし、価値観までに響かせるのは難しい。

4.　自身の教育観について

	どのような人材を育てたいか
教員としての考え	・自ら考えられる力、自ら選択して生きていく力を身につけてほしい。 ・教員や保護者の姿勢としては、待つこと、見守ることなどが重要だと考えている。

インタビュー結果より、教育現場では進学校に多くみられる大学への進学を前提とした受験勉強をベースとした従来型の学習と、現在注目が高まりつつある生徒主体型のアクティブラーニングの考え方での分離や乖離が見られた。それらは大学受験や企業への就職の際への評価基準とも大きく関係しており、親の学歴志向や生徒自身の安定志向などへも影響を与えていることが分かった（下図参照）。



上勝における教育機関は、上勝町だからこそ学べること、また生活や暮らしに根付いた知識や経験を体得することを目的としているため、フィールド学習を中心とした実践的な学びを軸とすべきであり、乖離が起きている学習の考え方においてはアクティブラーニング型の学習の場となる。よって今後具体的な設立計画において、まずは教育業界全体でも重要視されつつあるアクティブラーニングの考え方を深く理解するとともに、キーマンとなる指導者や専門家へのコンタクト及びインタビューを引き続き実施していく必要がある。それらのネットワークをもとに、教育機関の教員や設立メンバーの選定へとつなげる。

また専門学校という学校の形態の是非含め、生徒や保護者の学校選択に対する訴求力についても検討する必要がある。今後、環境に関心のあるもしくは潜在的にニーズを抱えている生徒自身や保護者へのインタビューを進め、進路や就職に対する深層心理や学びに対する意識などを探っていく。それらとともに、企業との連携や社会人向けの学びの場などの想定も含め、上勝の教育機関での学びや上勝での生活から何が得られるのかを明確に打ち出せるよう、引き続き調査とディスカッションを継続していく必要がある。

また本項で述べている①のインタビューでは、小～高校の教員を中心にインタビューしており、早い段階での子供たちへの環境意識への訴求が重要となることも分かった。上勝町

内の小・中学校との連携のみにとどまらず、今後は町外における学校のリサーチを進め、上勝の教育機関と共通するマインドやビジョンをもつ学校への情報発信や連携などの関係構築も必要と考える。

以下、各質問項目についてのインタビュー結果の詳細を記載する。

1. 過去のキャリアを通して感じている教育現場の実態について

Q. 地域（過疎部と都市部）による差はあるか？

【子供たちに感じた差】

C：過疎部の子供たちは、人数が少ない分**競争心やライバル心が芽生えにくい**。
D：過疎部の方が、色々な分野の経験が少ないため、**幼く感じる**。**多様な意見がない**。2年前から毎年4月に夢を書くが、**将来の夢の幅がものすごく狭かった**。自分の親の仕事しか知らない人が多い。農家、病院の先生など。**外とのかかわりが少なく、色々な大人を知らない**。自分もそうだった。

■ 過疎部の子供たちは外的な刺激を受ける機会が少なく、それが考え方や将来への選択肢における知識にも影響している。

【保護者に感じた差】

A：過疎部と都心部では**保護者の教育にかける熱意が全然違う**。（都市部の方が意識が高い）
C：過疎部の方が、教員と保護者の距離が近い。飲み会やイベントがあった。
G：徳島はだいたい貧しいところだから、**子供が豊かに生活するには、**お医者さんとか、技術を身につける、**高学歴を身につける、という考えの親が多い**。自分はこういう経験してきたから、子供にも経験させたい、とか。
都市部と違って、**親の価値観が狭い**。親が変わっていかないと、子供も変わっていかない。

■ 子供への教育全般への意識の高さは都市部に多くみられる一方、過疎部では親の価値観の偏りが教育にも現れている。

10

Q. 学校による差はあるか？

A：（公立）中高一貫の **進学校では、** 学校で学んだことを **一生懸命やることや社会への貢献に喜びを感じる子供が多い** 。
G：私立と公立の差は、 **私立は成果主義** であること、その成果が、田舎であればあるほど、 **進学率**であることが多い。

D：ある学校では、 **先生が色々な出会いの場を設定** してあげていた。経営者や職人、アスリート、シェフ、海外の教員などしきりに学校に来ていた。外国の方と子供たちが一緒に話したりしたり、フレンチのシェフがライブクッキングをして盛り上がった。タイの先生に一生懸命英語で話す。そんな子が一生懸命になるん？という子も頑張っていた。
価値観がものすごく変わったわけではないが、 自主勉強で通じる言葉を勉強したり一人一台のPCでもっと調べたいと考えたり。小5・6だと**将来の夢の幅が広がっていた** 。
D：違う意見を出しにくい、輪を乱さないことが重要という雰囲気の学校と、周りのことはどうでもいい、 **自分は自分、と自立して自分で進めていける子供が多い学校** があった。互いに認め合う、 **いろいろな人と関わり考え方を知り多様性を認め合う**。

■ 進学校は進学率や進学先が学校の一つの指標となっている。ただし公立中高一貫校の子供、特に中学生は受験勉強のみでなく素直に社会のことを学ぶことや貢献することへの意欲が高い場合が多い。

■ 同じ地域でも、学校（校長）次第では外部からの刺激や交流の機会を設けることを積極的に行っているところもあり、早い段階（小学生）での視野や価値観を広げるきっかけになっている。

Q. 社会状況や時勢に伴う変化（制度やカリキュラム、生徒や保護者、指導者の意識など）はあるか？

【子供たちに感じる変化】

A：ここ10年の中で、**表立って悪いことをしたり教師に反抗する子供が減ってきている**　。
B：**子供が抱えている問題や問題行動の質が変わってきている**。コミュニケーション取れなくて悩む、　**内に内にひきこもる**、陰湿で暗い問題が増えてきている。
E：スマホの影響は大きく、イライラしたら誰かにぶつけるなど、外に出していたが　**今の子は内ににこもって我慢**している。犯行が減っている半面でもやもやしている。

D：柔軟な考えを持っている子供たちは、　**文字だけよりも、動画や画像がないと集中できない**　。**発想の仕方が多様**で、いろいろなところに考えが飛ぶ。

A：**今の子たちは賢い**。興味関心だけでは進まないのではないか。勉強したいことや、強いボランティア精神がある子がいても、**将来どうやって生きていくか、という方が大事**　。そのためにステップアップになるとか、　**現実的に生活するために自分にとってプラスになる**　なら、いい。今年担任している中学生の子たちに、　**将来の夢が決まっている**人？と聞くと、ほとんど手を挙げる。去年はそんなことなかったから、小学校で何をしたのかで決まってくるのだと思う。
G：**この頃の子供は賢いから無理なことをしない**　。

- デジタルツールの影響か、内向的な思考が行動に現れるケースが多い一方、好むインプットの形や自身の表現や発想の仕方は柔軟かつ多様になりつつある傾向もみられる。
- 「賢い」という言葉が散見された。社会への関心が深い一方、現実主義な思考も見られ無難で堅実な将来を想定している子供が多い。

【保護者に感じる変化】

C：厳しい**校則について、自由を残しておいてという保護者の意見**　があった。ツーブロックやお団子などの髪形など。
D：**保護者が手をかけすぎている**。宿題を親が全部見たり、答えを教えたり。もう少し自由にさせてもいいのでは。　**目の前のテストが100点であればいいと思っている**。子供が自分で考えて楽しむ、という感じがない。
G：30年ぐらい前は社会が、教師に対してそこまで厳しくなかった。学校で遅くまで勉強や部活動とかしたり。だんだん**勉強や塾に行かせたいから早く帰らせてくれ**　、となった。今は何かあると親が入ってくる、親も、　**こういう子供を育てたい、という枠があり**、そこを外れると親はクレームをつけてくる。

- 生活面での校則には自由を求める一方、学習面においては過干渉にある傾向。

【その他社会状況に伴う変化 】

B：ここ3年間で勤務校である公立高校の学年クラス数が８　→３クラスになった。
A：愛媛ではもともと県立高校への進学志向が強かったが、私立が台頭してきている。親は受験で失敗させたくない。そのため中高一貫校も人気になってきている。
F：ここ数年アクティブラーニングの考えは確実に増えていて、これからもその文化が広がる。

- 少子化や私立高校の助成などの影響か、（親の）学校選択の基準に変化が出始め人気校（高倍率校）が変わりつつある。
- 探求型学習への関心は学校・教員など教育業界で広がりつつある。

Q. 教育現場で感じる課題や問題は？

【学校内での課題】

D：目の前の子供の学びに使える時間が短い。雑務が多く、 **新しいことをしようとすると賛成を得られない** ことが多い。**校長が変わったとたんに**学校の雰囲気ががらりと変わった。教員にとっても、生徒にとっても大きい。
E：**上に立たないとやれない**ことが多い。
F：大人同士の関係が大変。職員室をチームにする必要がある。先生は横とつながる、助け合うというマインドの訓練がされていない。チームビルディングの要素が少ないのが企業と違うところ。一番 **キーになるのは教頭と校長**である。

■ トップダウンの傾向が強く、現場の意見や考えが実際に実施・反映されるかどうかは学校により大きな差が生まれがち。

【教育界全体での課題】

E：公立での理科の授業も 3年前からPBLを実施している。 **インプット系の教授法をしている先生から白い目** 。
F：教育現場は、まだ 20世紀型で**時代の流れにキャッチアップできていない** 。「**教育観**」**をシフトさせる必要** がある。知識を詰め込む、教えるという工業的人材の育成から次のステージにいかないといけない。課題発見や課題特定をしていく力、生きる力と文科省も言っているが、そういう力を身に着ける **生徒主体の学びに学校を変えないといけない** 。
F：昔ながらの偏差値重視の受験に打ち勝つための勉強を教えている先生の一方で、探究的な学びをしていくことが生徒の幸せ、生きる力につながると考えている先生もいる。ただし少数派。

■ 受験や進学を視野に入れた従来の授業と、生徒主体の学びを重視した授業の双方の考え方での分離や乖離が見られる。

2．子供たちの進路選択や将来について

Q. 受験制度や学歴への意識について

【受験制度について】

F:鈴木寛さんがセンター試験等の学びを変える動きをしていたが通らなかった。そうはいっても少しずつそっちの方向に向かっている。 **公では受験のシステムが変わらないと、全体が変わっていかない** 。**企業の採用の方が進んでいる** 。そこにも断絶がある。大学も AO入試など、通常のマーク式で点数を取ること以外の受験の方式が増えてきているが、中学・高校入試でも広がりつつある。

■ 従来型学習 ×生徒主体型学習の分離や乖離が受験制度においても一つのテーマとなっている。

【進路選択や学歴への意識について 】

B：目指す職種などにおいて、 **親の意向が強く子供に現れている** 気がする。高１の時点で薬剤師になります、理学療法士になります、手に職つけるならこれからは医療系！公務員になります、など。
C：**保護者は、進路選択の際に選択の幅が広ければいい、という考え** で学力をつけてほしいと思っている。
E：今の学校は **教育熱心で過剰な保護者が多く、将来の学歴を意識** するところもある。慶應に言っていれば問題ない、など私立をたくさん受ける。そういう子たちが 10名以上は **付属系の高校を手あたり次第受ける**。
F：私たちの時代では学歴偏重だったが、最近の活躍している人たちはさまざまなキャリアや学歴を持っている。海外の大学で学んでいる人も含めて、 **国内の〇〇大学を出ているかは陳腐化**されている。

■ 保護者における、「将来への可能性を広げる」という考えからくる学歴意識は根強い傾向にある。
■ 唯一学校勤務ではない F氏からは、国内大学におけるネームバリューは下がりつつあるという意見も。

Q. 進路指導の際に気を付けていること、重要視していること

C：たとえ**学力が及ばずとも、希望や興味を持たせて**、ここに行きたい！という気持ちを持たせる。
G：今の力で**子供の夢を制限しないこと**。もっともっとできるとこがあるから、と親が蓋をしないというか。そのためにも、過去のサンプルって大事。こんな先輩がいた、とか。そういうサンプルがあると、**否定せずに、心から応援**できる。子供には多面性があるから、違う面でのいい面をいくらでも伸ばしていけばいい。**自信をつけさせるのが一番大事**。

E：受験のための学力や基礎的な知識がないことはまずいかもしれないが、まずいと思うのは大人だけ。子ども本人がそれでいいなら正しい進路だと思っている。**進路指導では自己選択をするかどうかに尽きる**。
E：今の高１は、高校選びを探究学習をしているかどうかで調べて選んでいる子たちもいた。自分で追求していくか。制作してまとめて発表することが有益で自分にあっていたと言っていた。

- 否定しないこと、また様々な能力を引き出して応援することを重視しているという声が多かった。
- 子供たち自身で考えて選ぶことも大事だと考えている。

Q. 専門学校という選択肢についてどう思うか？

A：**費用が高い**のがデメリット。
C：**学費が高い**イメージ。

A：**その先に何になるの？というのが大事**。絶対将来この仕事に就く、それに伴う専門知識を得て、次のステップが見えて初めて専門学校を選択する。**どういうところに就職できる**、というのがわかれば勧めやすい。
C：**知識と技術と就職先**まで見つけられて稼げるというメリットもあると思う。しっかり学ぶ意識はつきそう。
A：生徒自身で環境に興味を持っている子は多いけれど、保護者も含め**現実的なので、進路に関してはまずは大学に行ってから考えようか**、という感じ。

F：ここに特化して学ぶならここだよね、と。**認知が少なかったりする**と思う。自分たちの進路でも全く選択肢になかった。いろいろな人に知ってもらうことが必要だと思う。

G：教え子が、大学を１年休学して、映画の専門学校にいった。高校から専門学校じゃなくても、先に大学に行ってから、ここでは得られるものがないと思ったら、といっていくのもある。**年いってから専門学校行ってもいい**。大学は、場所を与えてくれるだけ。自分から動ける子は、上勝に来て何か勉強しようと思うかも。逆に、四大ではどうしようもない、どうしようかな、という子も、上勝に来たら面白い人がいて、刺激を受けて変われるかもと思えば来るかも。

- 専門知識や技術を身につけ、確実に就職までつながるところをメリットととらえている一方、「まずは大学に行ってから」という子や親の安定志向も見られる。

３．環境問題と教育の関わりについて

Q. 教育委員会や学校としての方針や指針などはあるか？

A：総合学習・HRの時間に取り上げる題材としてSDGｓも含まれるが、**必須というわけではなく、時間数も少ない**。

A：**担当の教員に左右される**ところは大きい。
C：SDGｓが何で、どう教えるのかまでは**教員も知識がない**。
D：総合学習はSDGsに紐づけているのに、**先生も詳しく知らない**。単発で終わってしまう。これはどうなん？と思った。**大きな考えに結びついていない**。
D：県から下りてくるテーマはない。その**学校独自で考える**。フリースタイル。ほとんどの学校では、去年やっていたことを流す。新しいことを考える余裕がない。それを考えることが**楽しいと思える先生がいない**。

G：現実問題どこまでくみこめてるか・・というと・・・。うちは力を入れてはない。実践しているような人がいたら、また違うのかも。東さんのような人がいれば、変わるきっかけができるのかもしれないけど。**授業の中ではできるけど、それを生活の中に落とし込むのはなかなか難しい**。この分野に関する自分が目指したい人物が身近に出てきて、「こういう大人になりたいな」と思えれば変わるきっかけになる。教師がそうなれたらいいんだけど。

- 小中高校共通して、環境教育に関してはカリキュラムや制度に要るサポートは少なく、担当教員個人に左右される場合が多く、そのような知識や意欲を持つ教員はまだ多くない。
- 授業で環境分野に触れることができたとしても、子供たち自身の生活や暮らし、価値観までに響かせるのは難しい。

Q. 子供たち自身の環境への意識はどうか？

A：**小中学生は学校で習ったこと、言われたことの影響がとても大きく** 、記憶に残る。学校で取り上げているかどうかが大事なのでこれからの子たちは知識をもって中・高校に入ってくると思う。
D：遠足で小学生を連れて上勝に来た。 **上勝ってすごいとこや！と親に言って、親と一緒に上勝に来る**。小学校3年生。その時すごいと言ったのは廃材を使ったデザイン、アート。ゴミがゴミではなくなっている。
C：上勝の子供は、授業を受けてというよりは **昔から自然にやっていることが身についている** 。はいはい、またエコの話でしょ、というように子供たちにとって特別なことではないのでは。

A：**環境問題に関心がある、勉強していきたいという子供はたくさんいる！環境問題で飯食えるなら、そういう仕事につきたいという生徒はいると思う**。持続可能な社会を実現するために、何か考えたい、開発したい、貢献したいという子が**中１～２のクラスに３～４人ぐらい**いる。意識高い系。
E：**環境などに目を向いている子が増えている** 。高校の面接でSDGs のことを聞かれるらしい。

- 小中学生は、学校で学習（体験）したことが大きくその後の興味関心に影響することが多い。
- 上勝町の子供は環境に関する意識や価値観はすでに生活に結び付いて当たり前になっているため、新鮮に感じてない場合がある。

- 中高生の中では、環境分野に興味があるという子供が多くみられる。

Q. 現在取り組んでいる活動やキーパーソンとなるような人はいるか？

E：**循環型社会を考える PBL**を6月末にスタートする。 6-10月まで中3でやっていこうかなと思っている。 **企業を巻き込んで**いきたい。 10社くらい集めたい。アドバイザーに 10名くらい。企業やサポーターなど。 ICTツールを使いながらクラウド上で出会うような。先生からのフィードバックも大きいが、周りの大人みんなでみていく方がいい。先生と合わない子もいる。子供にも **色々な大人を見てもらう** 。中学生は他者からの評価を意識する期間。地元にある企業の大人と考えるのも引いては市民教育になる。

E：**環境活動家になろうという松永先生** 。大阪にいる若い先生。学校全体としても寛容。大阪の箕面市。若い先生も多くて結構柔軟。今年は研究主任として学校の研修を任されたりしている。

4．自身の教育観について

Q. どのような子供たちを育てていきたいか？　－そのために必要なことは？

A：最終的に目指すのは **生徒を自立させること**なので、進みたい方向に自分で進んでいけるように。
B：精神、経済、肉体的に成長してほしい。豊かな心をもって感動すること、たくましくへこたれないなど負けない気持ち。経済的な自立。 **生きていける、生きていく力をつけれる教育** を根本に。
D：いろいろな考え方や価値観を知って、学習した内容から、こんなこともできるのではないかという **思考力が高い子**どもたちを育てたい。起業しないまでも、 **自分たちで考えることを楽しむ**児童を育てたい。
E：子どもという観点からいくと、 **遊びながら学び、学びながら遊ぶ** 。学ぶことが遊んでいるという風になるといい。～ねばならない、ではなく。

E：教育観としては、 **待つことと見ることと信じること** がすごく重要だと思っている。本人が動くまで待つ。
D：保護者には、子どもがこういうことをしたい、というまで **打ち消さないで待っていてほしい** 。〇〇したいという子どもを学校で育てる。保護者にもいろいろな経験をさせてもらえたらいい。
F：**自己選択ができる** 子どもたちを育てていきたい。 **「任せる、見守る」ことが大事**なのではないか。先回りしてアドバイスしてしまう。ある程度は手放す、見守ることが大事。

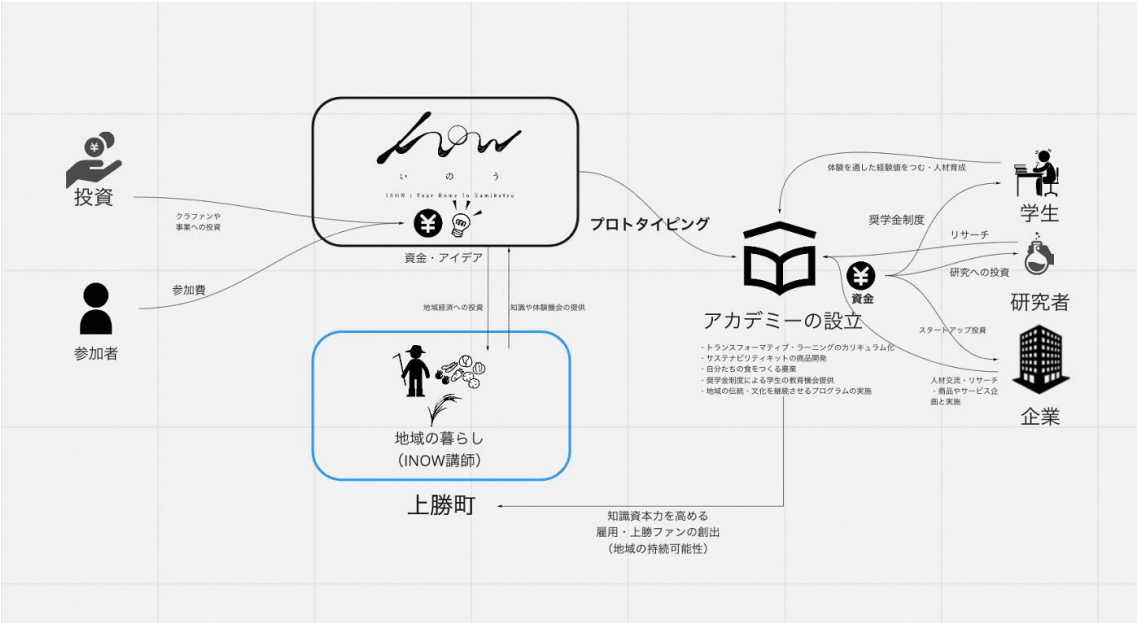
- 自ら考えられる力、自ら選択して生きていく力を身につけてほしいという考えが共通して見られた。
- 教員や保護者の姿勢としては、待つこと、見守ることなどが共通ワードに。

3-5. 既存の取り組みの紹介

また、調査を通して、学校がアクティブラーニングの場となっていく必要性が明らかになってきた。上勝町内で既に提供されているアクティブラーニングの機会について本項で紹介する。これらの取り組みとの連携も今後は検討していく。

【1 「INOW プログラム」合同会社 RDND】

INOW（いのう）プログラムは 2020 年 7 月にスタートした上勝町滞在型のホームステイプログラムであり、上勝町での暮らしやゼロ・ウェイストを学び、参加者自らの価値観を変えたり、自分自身についての理解を深める「トランスフォーマティブプログラム」として提供されているプログラムである。もともと上勝町内各所の課題である人材不足を解消しつつ、上勝のゼロ・ウェイストマインドを学びたいという人たちをマッチングさせ、双方にとって良い機会となることを目標としていた。また、上勝町内で何が「学び」として価値あるものかを試すべく、ゲストを迎えながら価格設定やプログラムの内容をブラッシュアップしてきた。2022 年 3 月までの間に、INOW プログラムを通して参加したのは 25 名で、その多くが外国人参加者であった。このプログラムのマネージャーがカナダ人スタッフであり、発信も英語が多いことが一番の要因であると考えられるが、参加者は SDGs について研究している大学教授や、サステナビリティに関心のある学生、社会人など、そもそもの上勝町のゼロ・ウェイストへの関心が高い人々の参加率が高い。



INOW プログラムが想定する上勝町の学校作りや地域との関係図

【2「zero camp」合同会社パンゲアフィールド】

合同会社パンゲアフィールドが開催する「zero camp」は主に小学生を対象としたプログラムである。

「ゼロ・ウェイストな活動をアウトドアの視点から考え、取り組むことで、より自然に寄り添い気持ちよく過ごし、浪費する日常を見直すきっかけづくりを提供しています。zero camp は、こどもたちに自然の中で楽しくゼロ・ウェイストを体感してもらうために始まったキッズ・キャンプです」（パンゲアフィールド HP より）

ここでは、「ゼロから作る」といった自らで考え作ることをアウトドア体験をしつつ学ぶ時間や、「ゼロに過ごす」という、ごみゼロで過ごすことをみんなで話し合う場などが設けられ、環境学習でありながら、子どもたちの探求を促すラーニングプログラムである。

パンゲアフィールドでは、zero camp だけでなく、企業研修や修学旅行の受け入れなども行っており、各対象に向けた独自のプログラム開発を行っている。既に学びの場を提供している事業所との連携も視野に入れて、学校作りが模索できれば、より現実的かつ価値を高められる「学びの場」を提供できると考えられる。

2 章：コミュニケーション戦略

1　住民とゼロ・ウェイストの関係を良好にするコミュニケーション

1-1.　ビジョン・ワークショップの開催

2021 年 11 月 16 日に上勝町コミュニティセンターにおいて、上勝町民を対象とした「ゼロ・ウェイストビジョンワークショップ」を開催した。ここでは、計画書策定における進捗状況を町民の方々と共有すると共に、上勝町におけるゼロ・ウェイストとは何か？を明確にし、2030 年までの方向性として軸となる部分を模索する場として位置づけ開催した。

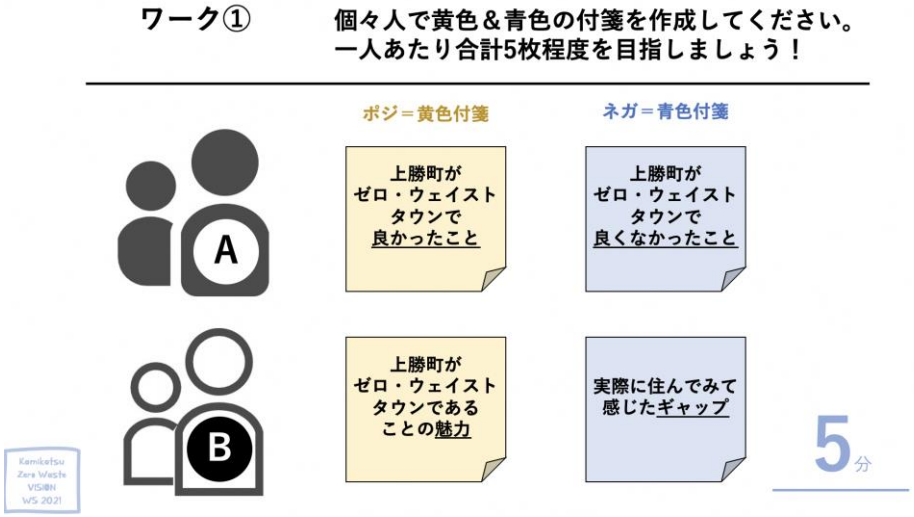
ゼロ・ウェイストビジョンワークショップの様子

町民 18 名が参加し、4 つのグループに分かれてワークショップを実施した。ワークショップでは、2 つのワークを行った。

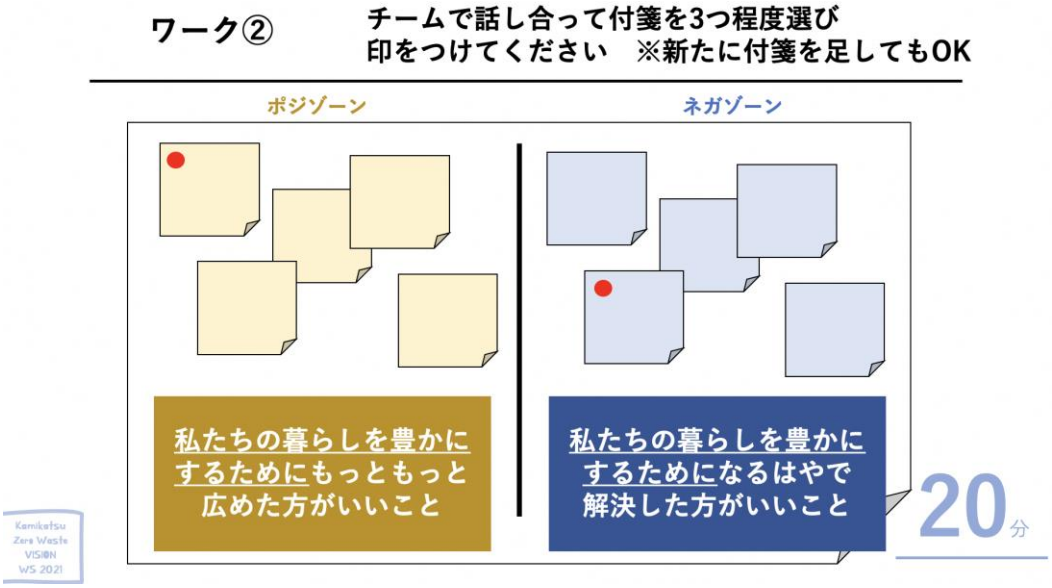
ワーク①：自分がＡとＢのどちらに属するかを確認し、それぞれの視点から、上勝町がゼロ・ウェイストに取り組むことで感じる「ポジティブな部分」と「ネガティブな部分」を出してもらう。ＡとＢの属性については以下の通り。

Ａ：たまたま上勝に暮らしている、暮らすことになった町が偶然ゼロ・ウェイストを目指していた。

Ｂ：ゼロ・ウェイストに取り組む町であることを知って上勝町で暮らすことにした。



ワーク②：ワーク①で出てきた「ポジ・ネガ」について、各グループで絞っていくワーク。「ポジ」については「私たちの暮らしを豊かにするためにもっともっと広めたことがいいこと」を、「ネガ」については「私たちの暮らしを豊かにするためになるべく早く解決した方がいいこと」をそれぞれ３つ程度、話し合いながら絞って行った。



ワークに取り組む様子

ディスカッションの様子

このワークショップを通して、ポジティブな意見とネガティブな意見は以下の通り。

ポジティブな意見
・ごみ捨て場が道沿いにないので、景観がきれい ・ごみを分ければお金に変わる ・ごみの曜日指定がないので捨てやすい ・資源を出すと気持ちいい ・リサイクル率の高い暮らし＝良い暮らしをしている ・買い物の際によく考えるようになった（環境問題についても） ・自分のごみが見える化される→生活を振り返る ・お年寄りから昔のこと、わざを教えてもらった

・くるくるショップにはとても助けられた
・上勝町のアピールポイントができた
・町がきれいになった
・上勝町の名前が売れた
・国内外から注目される町になった
・対外的なイメージが良い
・ものを大切にする暮らしに触れる刺激！
・町の軸のようなものがあると、活気があるように感じる
・若い子が増えた
・お客さんや移住者が増えた
・くるくるショップがあること
・焼却ごみが少なくなった
・生ごみ処理機最高！
・ごみが臭くない
・老人と若者の助け合い
・子供と一緒にごみ出しができる
・いろいろな人が来るので、田舎にいながら多様な人に会える（子どもも）
・町外からおもしろい人が集まってくる
・ゼロ・ウェイストがきっかけで移住する人がいる
・生活の中で再利用するものが増えた
・ごみを出さない暮らし＝素敵な暮らしができる
・自分の暮らしを自分ごとと捉えるようになった
・生活に無駄な浪費がないか考えるようになった
・生活の中で環境問題を意識できる
・全国に有名になったことで、自信ができた。
・新しい仕事が生まれた。
・チャンスがたくさんやってくる！
・視察、見学者が多く訪れる
・世界から注目される
・「あー知ってる」と言われる
・高齢化社会であり消費速度が遅い
・上勝町の社会がリデュース、リユース、リサイクルにマッチングする
・分別を極めてみる
・これからの時代の希望
・ものを大切にする
・ゼロ・ウェイスト基金

・ごみについて考えることが増えた ・粗大ごみの申込みが必要ない ・好きな時間に捨てられる ・どこに行っても聞かれて、説明する ・古いものを見つけるとテンションが上がる ・ポイント交換で商品をもらえたりするとメリットを感じる
ネガティブな意見
・ごみを洗っている水や洗剤はエコではないかも ・有名無実 ・めんどう ・分別が手間である ・プラスチックがなかなか乾かない ・コンポストの扱いが難しい ・分別が増えた ・ストレスがたまる ・平等を感じない ・強制力が強い ・（良いところが）ない ・取材や視察が多すぎる ・町民が嫌そうな顔をする ・ごみ分別の数が多すぎて高齢者には負担になる ・プレッシャーを感じることがあるかも ・気軽に捨てられないものがある ・ゼロ・ウェイストな暮らしに程遠い自分にがっかり ・ちょっと油断するとごみ屋敷に ・買い物したらプラごみいっぱい ・プラの汚れが落ちない ・プラがめんどくさい。わかりにくい。 ・家族の中で分別する人が決まっている。 ・古い家の中にある使わないもの（いずれはごみ）の多さ ・大掃除に取りかかる勇気がでない ・無駄、浪費をしないと経済は伸びないという仕組み ・農業に伴って発生するごみの量 ・45 分別がユニバーサルなデザインではない！ ・生活に直結するので、分別が嫌な人は本当にしんどいと思う

・積極的に取り組む人が多いとは言えない
・ごみの分別をしないと罪悪感に囚われるようになった
・ごみ出しが恥ずかしいと思うことも…
・資源の町内循環が難しい
・視察、取材対応で忙しい！
・町民の中で温度差がある
・想像以上に忙しい（スローライフがない）
・住民の負担が大きい
・高齢者が捨てるのに困っていた
・ポイントカードも作らないし、くるくるショップも利用しない人がいる
・錆びた鎌が捨てられているが、研げば新品のようにキレイになって使えるのにと思う

＊それぞれのチームで一致した意見をマークにて示している

ワークショップより、ゼロ・ウェイストのポジティブな面として、分別に取り組むことが、町民の意識を醸成することにつながっていることがわかった。「老人と若者の助け合い」などの言及もあり、コミュニティにおいてゼロ・ウェイストがどの世代でも共有できる取り組みであることも確認できた。しかしながら、「めんどくさい」「住民の負担が大きい」など、分別がネガティブな面として捉えられていることも出てきており、住民の意識醸成と「負担をかけすぎない」仕組みづくりが求められる。

また、「道がきれい」など町全体の美化に貢献するものとの認識や、「ゼロ・ウェイストを理由として移住してくる」など、町の環境保全や「誇り」といった部分もあることが確認できた。

ワークショップの様子は上勝町公式の YouTube チャンネル「ゼロ・ウェイストチャンネル」にてライブ配信された。(https://youtu.be/33O5PyS9KCY)。これまで上勝町内での政策策定の過程に関わる人は町民と町職員等で限られていたが、町外から上勝町のゼロ・ウェイストの取り組みに注目が集まる中、町内ではどういった議論が行われているのか、「過程」を公開することで、個人や企業・団体に対して町内の状況を共有するとともに、共に課題解決に向けて取り組む人々を作りたいという意図があった。この動画は令和 3 年 3 月末時点で 800 回再生されており、上勝町に取材や視察に訪れる人々への事前学習資料としても、活用されている。

1-2. インタビュー調査とアンケート調査の実施

町民がゼロ・ウェイストにどのような考えや課題感を持っているか明らかにするために上勝町議会議員 8 名と上勝町民 6 組へのインタビューを実施した。加えて、京都大学大学院地球環境学堂・地球環境学舎・三才学林（Kyoto University Graduate School of Global Environmental Studies）の大学院生と共に 52 名を対象にアンケート調査を実施した。本項では、まずインタビューの結果から明らかになった現状を整理し、その後アンケート調査から明らかになったことについて示す。

【議員インタビュー】

- 実施時期：2021 年 7 月 8・9 日、8 月 19 日
- 対象者：明本議員、岡本議員、日下議員、酒井議員、高石議員、田中議員、星場議員、前田議員（五十音順）
- 実施方法：対面・60-90 分程度
- 質問項目と得られた主な意見

  議員には町民から聞いている意見などを踏まえ、下記の質問に応じていただいた。ゼロ・ウェイストに関連する幅広い意見を収集するために、質問項目は本計画書の章立てに沿っている。主に出された意見を下記に記述する。

  - ゼロ・ウェイストに関連する現状の課題
    - **町民の負荷の軽減について検討**する必要がある。高齢者が増える中で、ゴミステーションに持ってこられなくなるのではないか。45 分類は多すぎる（行政対応の充実化が必要。ごみ収集車、分別箇所の複数設置）
    - ごみを捨てているところを見られたくないという意見が聴こえてくる。
    - 企業連携のあり方について疑問を感じている。現状は空洞化している。
    - 上勝町からプラスチックの分解方法の開発、提案ができないか。
    - ゼロ・ウェイストセンターのあり方を見直すべきではないか。町民中心ではなく、センター中心になってしまっていないか。

- ゼロ・ウェイストの対外発信に対する考え

【町外発信】

- ZW の先駆者ではあるが、発信には頭打ち感がある。上勝町も循環型社会に近づける力をつけていく必要がある。
- 他の自治体の一歩前を走れている状態である。今はアピールが不足していると思う。
- 発信にすでに取り組んでいることに対する効果検証が必要。
- ゴミゼロの発信で移住者が増えるとは思わない。

【町内発信】

- ゴミステーション運営サイドの想いを町民に発信する必要がある。
- **住民に寄り添った発信が大事。一方通行ではない発信**を心掛けてほしい。
- 広報誌より新聞の方が町民は読んでいると思う。

- ゼロ・ウェイストと町民および町外とのかかわり

【町民】

- 住民のゼロ・ウェイストに対する意識が低いように感じる。**ゼロ・ウェイストは誇れるものだが、現状は住民に教える機会はない**。住民自身がごみを減らす必要がある。
- 無記名アンケートで本音を聞く必要があるのではないか。
- 生産者側がゼロ・ウェイストを実践できるような社会を作っていく必要がある。
- ゼロ・ウェイストセンターで働いている人に町出身の人が少ないことに対する疑問。

【町外の ZW に関心がある人】

- 世界的には発展途上国をメインに発信してはどうか。
- ゼロ・ウェイストができない地域には今やっていることは環境的に良くないことを伝え、ゼロ・ウェイストができる地域にはノウハウを伝えていく。
- 次世代へのアピールが重要になる。ゼロ・ウェイストに興味をもつような教育が必要だと思う。**ゴミゼロだけでなく自然に関連することを含む環境問題**について学ぶ場所を提供してはどうか。

【移住者】

- あらゆる人に来てほしいと思っている。特に新しいことに取り組める人が来てくれると良い。
- ただし、**来た後のフォロー**が大事。

【企業】

- 長くつぶれない会社を誘致したい。ただし、人口が増えるとごみも増えるという問題もある。

- ゼロ・ウェイストな暮らしのイメージ
  - 自給自足というよりは今の上勝町での暮らし方がゼロ・ウェイスト。
  - 上勝町は限界集落なので、ゼロ・ウェイストな生活をしている。**ものを大切にすること、買い物をしなくても暮らせる**ことだと思う。
  - ごみを減らしていく暮らし。
  - 自分のごみは自分で分別して捨てている人。
  - 企業側が包装、梱包を変えるなどゼロ・ウェイストな暮らしの実践につながるように変えていく必要がある。
- ゼロ・ウェイストに関連する経済循環に望むこと

【企業との連携】
  - **循環型の企業**との連携、**生産者**との連携は増えると良い。
  - 上勝にきた**企業への投資**、補助金を出すことも検討できるのではないか。
  - 企業を**上勝に誘致**して雇用を生む。
  - 町外だけでなく、**町内事業所**との連携も重要。現状の不平等の是正をしていけると良いと思う。

【町民】
  - ゼロ・ウェイストで**得をする**仕組みをつくれたら良いと思う。たとえば回収率が上がったときに**ポイントを付与**するなど。

【行政、税金】
  - 行政のお金がかからなくなることが一番いい。**無駄なものに税金を使わない**という考えもゼロ・ウェイストだと思う。
- 学校づくりに対する考え

【学校のイメージ】
  - **専門学校**。ただし 3 年も教えることはないのではないか。林業と合わせたらできるか。
  - 長期的にみて、視察ではなく**滞在型の学習**ができる施設が必要。語学研修＋世界のごみ情報のインプットなどはどうか。
  - 親世代というよりは子世代に教育していくべき。子世代から親世代を教育していける。

【町民啓発】
  - **町民啓発**も必要。移住してきた人を含めフォローしていくことが大事。

【必要性が不明確】
  - 現状では必要性がわからない。
  - シェアオフィスは学校の役割なのではないか。
- ゼロ・ウェイストとは
  - ごみを減らすこと。

✧　ごみ以外も含む無駄をなくすこと。

【区分別町民インタビュー】

下図の区分に沿って、上勝町民 6 名（A～F）にインタビューを実施した。

		ゼロ・ウェイストに対する意識	
		高い	高くない
世帯の種類	単身	**A**	**B**
	子育て	**C**	**D**
	高齢	**E**	**F**

以下の 5 項目をそれぞれのインタビュー対象者に聞いた。ゼロ・ウェイストの中でもごみ捨てと暮らしの 2 つの観点に絞り、カテゴリー別の町民の実態を明らかにすることを目的にした。

1. ごみを捨てる上での困っていること
    1　現在、困っていること
    2　こうなったらいいなという理想の状態
    3　これから困りそうなこと
    4　将来的にこうなったらいいなという理想の状態
2. 「ゼロ・ウェイスト」に向けて暮らしの中で取り組んでいること

A～F の対象者へのインタビュー結果を以下に記述する。

【A：単身／ゼロ・ウェイストに対する意識が高い】2022 年 3 月 18 日・対面

1. ごみを捨てる上での困っていること
    1　現在、困っていること
    - 家の中で分別する際にプラごみがかさばり、ごみを入れる容器を何にするか困っている。蓋があるものがいいが、わざわざ買う気にはならない。今は段ボールで代用している。
    - 自分の家に友人が集まることが多く、**お酒の空き缶など全て自分が出したものだと思われないか気になり、あえて何回かに分けて出したことがある。**
    - 何人かで一緒に住んでいるが、同居者と出すごみの綺麗さの判断基準に差があるときがあり、自分が洗いなおすことがある。

2　こうなったらいいなという理想の状態

・ ごみをどの程度まできれいにして出すのか、判断基準が分かりやすいといい。

3　これから困りそうなこと

・ 今もだが、これからのことを考えてもごみを捨てることにおいて特に大変だとは思っていない。

4　将来的にこうなったらいいなという理想の状態

・ ただ単にルールで縛るのではなく、**ゴミが回収された後にどう処理されるのかをしっかり理解し、なぜ家庭でこの作業をしないといけないのかをみんなが分かっているといい。**そうすれば、本当はしなくていいこともやらずにすむ。

・ このような理解が広く浸透したら、大きな自治体でも、同じことができるようになるのではないかと思う。

・ 上勝に訪れる人達にも、ただ単に「すごい」だけで終わらないように、小さな取り組みからでも生活に取り入れてもらえるような伝え方を心掛けたい。

2.　「ゼロ・ウェイスト」に向けて暮らしの中で取り組んでいること

1　取り組むきっかけ

・ 上勝に来る前実家では、冷蔵庫にたくさんものを詰め込んでいて、使えなくなってしまうことも多かったが、今は季節のものしか店頭に並ばないので、食材を買ってからメニューを考えるようになり、**使い切れるようになった。**

・ もともと環境に興味があって上勝に来たが、食の分野にとても関心があることに気づいた。

・ MY 箸を持ち歩くなど、**自分では当たり前にしていることだが、友人が自分に影響をうけて**持ち始めたりしてくれている。

【B：単身／ゼロ・ウェイストに対する意識が高くない】2021 年 8 月・対面

1.　ごみを捨てる上で困っていること

1　現在、困っていること

・ ゴミステーションには行っているが、人に会いたくない。**ごみはプライベートなものなので見られるのが嫌だ。**ごみを見られるということに慣れていない。これまでプライベートなものという意識で生きてきたので変えるのが難しい。

・ リアルな現場が見たいのは承知しているが、視察を時間内でするのは止めてほしい。取材にも応じたくない。

2　こうなったらいいなという理想の状態

- 分別数が多いことは負担ではないが、**収集車が来てくれたらいい**。今は家でプラスチック、廃プラ、燃えるごみ、その他の 4 分類。
- **ごみを捨てることに時間をかけることが面倒**。燃えるごみだけでも収集してくれたら楽。

3　これから困りそうなこと

- 自分も含め、面倒だと言いながらそれでも取り組んでいる人が多い。100%チートしている人はいない。なんとなくみんなが取り組む良い雰囲気ができている。他の市町村ではいきなりできないのではないか。上勝ならではの町民性かもしれない。

2.　「ゼロ・ウェイスト」に向けて暮らしの中で取り組んでいること

- 丁寧な暮らしをすることがゼロ・ウェイストな暮らしだと思うが、自分は**大量消費型の暮らし**をしている。自炊して衝動買いもしない、ちゃんと分別している人はゼロ・ウェイストな暮らしができていると思う。

【C：子育て世帯／ゼロ・ウェイストに対する意識が高い】2021 年 12 月・対面

1.　ごみを捨てる上で困っていること

1　現在、困っていること

- 特に困っていることはない。以前住んでいた自治体でも燃えるごみ、プラスチック、缶瓶は指定の日に捨て、他のものはコミュニティセンターに持っていかないといけなかった。
- 家では 6 種類に分別している。燃える、プラ 2 種類、紙、燃やさなければいけないごみ、瓶缶。ティッシュや段ボールは着火剤として使っている。貝殻は薪と一緒に入れて肥料にしている。
- プラスチックは 2-3 日すれば乾く。干し方の工夫をすることで乾くようになった。洗剤などは開いて洗ったりしていない。汚い袋に紛れて捨てている。目立たないように。
- **ゴミステーションが降りる途中にあるので、特に不便ではない**。月に 2 回程度持って行っている。ちりつもポイントを集めることを楽しみにしている。今はミツロウラップを狙っている。
- 高齢者の土地を継いでいろどりをしているが、ごみゼロに馴染めなかった様子。ごみは燃やしていたが、最終手段として山に捨てていた。薬やマイクロプラスチックが捨てられていた。

2　こうなったらいいなという理想の状態（現状困っていないのでなし）

3　これから困りそうなこと

- 父母が引っ越してきたいと言っているが**将来運転できなくなったとき**

にどうか。人に運んでもらうとなるとごみが恥ずかしいと感じて気を使い、暮らしにくさにつながりそう。

・ ごみを見られるのが恥ずかしいのは、暮らしの中身を見られたら嫌だからではないか。経済にもリンクしてくる。

4　将来的にこうなったらいいなという理想の状態

・ ゼロ・ウェイストは整理整頓だと思う。ごみを 45 分類のタンスにしまう。タンスをあけるのは別の人になっているので、分類ばかりやらされるとしんどい。整理整頓した自身がタンスを開けることができたら、分類した分の価値を受けられる。たとえば、DIY（リデュース、リユース）していくなど。45 分類に片付けしている意味が理解できたらいいが、45 分別より次のステップがあることが今はわからない。

・ 町外の人がいつでも遊びに来てくれる家にしたい。上勝に住んでみてすごく良かった。気持ちがすっきりする。**素朴な暮らし**をしているだけ。人に会いたいので、こんな暮らしです、と見せたい。たとえば、いろどりをもっと大規模に入れていきたい。

2.　「ゼロ・ウェイスト」に向けて暮らしの中で取り組んでいること

・ **服は変わった**。断捨離に影響された。服を買って捨てようとは考えなくなった。買う量が減ったのは上勝に住んでいるからかもしれない。そんなに着ないかも、と思ったりするようになった。

・ **野菜はお裾分け**。フードロスを減らすために、食べきれない分は人にあげる。買い物は週に 1 回。毎週小松島の市場に行っている。

【D：子育て世帯／ゼロ・ウェイストに対する意識が高くない】2021 年 8 月・対面

1.　ごみを捨てる上で困っていること

1　現在、困っていること

・ 物を買ったら、ホッチキス、厚紙、プラスチックがついているので分解しないといけない。**意味はあるが、面倒**だとは思う。あとは瓶のふた。なかなか取れない。最初は捨てるのに時間が掛かったが、**1～2 か月で慣れた**。

・ 現在は 9 分類ほどに分けている。プラ、廃プラ、燃えるごみ、缶、瓶、ペットボトル、紙ごみ、焼却、その他。あとはその他でひとまとめにしてゴミステーションにもっていく。週 1 くらいゴミステーションの近くに行くので、ついでに捨てられる。わざわざ行っているわけではないので面倒ではない。捨てるときに手伝ってくれるときがある。その時に見られている感覚があったが、今は何とも思わなくなった。割とすんなり慣れた。

- **生ごみはすごく楽**になった。以前暮らしていた自治体では週に 3 回しか捨てられない。今は電動生ごみ処理機があるので、気にせず生ごみを捨てられるから便利になった。曜日は関係なく、ゴミステーションはいつでも捨てられる。
- 子育て世帯が他の世帯と変わるならオムツが増えるくらいだが特に困っていない。他の家族とごみに困っている話もしない。

2　こうなったらいいなという理想の状態

- ここまで取り組んできた意味がなくなってしまう。ごみ収集車が走るような町ではない。
- 回収拠点ができても、持っていかないのではないか。それはあまり意味がない。山奥なので結構な数をつくらないといけないのではないか。

3　これから困りそうなこと

- ゼロ・ウェイストをきっかけに移住している人は発信する力は強い。今は**地元の人とのギャップ**が大きい。全員取り組むのは無理だと思う。

2.　「ゼロ・ウェイスト」に向けて暮らしの中で取り組んでいること

- ゼロ・ウェイストについて考えるのはごみのこと。生ごみが増えるので**ご飯を残さない**。毎日捨てられるけど、減らしたい。**捨てるのが面倒なものは買わなくなった**。貝とか。スーパーで袋もらわないとか。割りばしももらわないようになった。
- 子どもは分別を手伝ってくれたりする。何のごみ？と聞いたりする。**将来にこの学びはつながる**と思っている。そこら辺にごみを捨てないとか。そういう子に育つといいな。都会にはあちこちごみを捨てる。ポイ捨てがないことが当たり前。
- おもちゃなど**くるくるショップはよく持ち帰る**。交流センターで遊ばせると喜んでいる。子どもを遊ばせていたら他のお子さんが来たりする。上勝町には公園がないので、遊ばせる場所が少ない。

【E：高齢者／ゼロ・ウェイストに対する意識が高い】2021 年 12 月・対面

1.　ごみを捨てる上で困っていること

1　現在、困っていること

- 農薬、ムカデ殺し、化粧品など残っているものをどうするか悩ましい。薬も医者が出しすぎで残っていたりする。特に液体はどうするか悩ましい。化粧品の中でもマニキュアは埋め立てになる。使いきれないものの処理の仕方が役場としては確立していない。
- 必需品なのか嗜好品なのか。嗜好品のようだけど、化粧は強制されている場合もある。しかし、不必要にごみになる。

- **45 分類は多すぎるとは思わない。**もっと細分化した方がリサイクルはしやすい。素材はくっついていてもいいから分解しやすくする。ペットボトルに紙が貼ってあるものでもはがしやすいものとそうでないものがある。グルーを取れやすいものにするなど工夫できる。**複雑に絡み合っているものをとると達成感**があって気持ちがいい。それを味わっている人は分別する。ゲーム的にやれるように商品をつくってほしい。
- 生ごみの中に袋に入ったソースが入っていることがある。生ごみ用のスペースを作った方がいい。

2　こうなったらいいなという理想の状態

- 美容室みたいなお化粧スポットがあって、1 回いくらみたいな場所だと便利。**各自持つのではない方法**はないか。
- 部品、ネジなどたくさんあるものを持っていける場所もあったらいい。そしたら残ったペンキも持っていけるようになる。
- 電化製品も困る。自分で誤って分解してゴミステーションに持ってくる人もいる。デポジット制にしてほしい。

3　これから困りそうなこと

- プラスチックでも植物性のものが混ざっていたりする。これから分別はどうなるのか。
- 高齢化はあまり関係ないと思う。若い人でもやらない人もいる。**面倒くさいから**。関心がない人がいる。

4　将来的にこうなったらいいなという理想の状態

- ゼロ・ウェイストのマインドを継承していく小さいうちに始める学校があるといい。**シンプルにしていくことは若い子たちも意識**している。ものの消費は持続的ではない。
- 手を掛ける仕事、手を使う仕事に慣れないといけない。手の器用さがないとできないこと。
- 哲学がないといけない。なぜごみがダメなのか？人間がダメなのか？人間とは何なの？それがないから経済に走ってしまう。

2.　「ゼロ・ウェイスト」に向けて暮らしの中で取り組んでいること

- 美しいものが好き。**自然や心を込めて手をかけたものは美しい。**レトルトや出来合いのものは自分が堕落した感じがする。自分の価値が下がる。衣類も自分の手が入ったものは捨てるのが惜しい。なんとか利用したいと思う。裁縫は苦手だけどいろいろ努力している。手を掛けたものの美しさを忘れてしまっている。
- レトルトは頑丈なプラスチックに入っている。**1 回ご飯食べるのにこれだけゴミを出していいのか。**それならこんなものは買わず質素なもので

いい。ごみを捨てるときに地球に負担をかける。ごみやプラスチックに申し訳ない。ごみだって手が掛かっている。

- だれかが意義を見いだしたらごみではない。**なんでも生産過剰**。地球はダメにいっているのに生産過剰が続いている。
- 薪を燃やすときに、杉の葉っぱを拾う。使わない環境問題もある。杉の葉っぱを集めるのも燃やすのも楽しい。**ちょっとした毎日のことだけど、喜び**がある。

【F：高齢者／ゼロ・ウェイストに対する意識が高くない】2021 年 8 月・対面

1. ごみを捨てる上で困っていること

1　現在、困っていること

- 缶や瓶は 1 つのところにまとめて入れている。まとめてゴミステーションに持って行ってくれる人がいるときにきれいにしてから袋に入れて分ける。みんなで 1 つの大きな袋に入れる。紙、プラは綺麗なのと綺麗ではないものに分ける。プラスチックごみが一番多い。中身を洗わないといけない。油は廃プラの方に入れている。**2-3 日前からより分けて準備**してから持って行ってもらう。1 軒ずつ来てもらうのはありがたいけど、**申し訳ない気もする**。プラスチックの分別を間違えていたときに直接言ってくれなかった。来てもらうのは気の毒。**自分で持っていけた方が楽**。若い人もいるけど頼みにくい。
- 自分ではもっていかない。孫などに取りに来てもらっている。おしめはお願いできないから別途頼んで取りに来てもらう。運搬支援は受けていない。買い物は生協が来るのと、あとは孫に買ってきてもらう。
- 好きなときに持っていけないから**、家の中に置いておかないといけない**。場所をとる。軒下に置いているものは雨でぬれてしまうので、また乾かさないと持っていけない。
- 1 つに分けるなら楽だけど、ゴミステーションで結局分けるなら自分である程度分けたい。以前はゴミステーションには月に 2 回行っていた。
- 紙ごみも多い。新聞も取っていたが、4 月から郵送になった。郵便屋さんも夕方に来るからしんどいので、取らなくなった。テレビ、ラジオで情報は得ている。一人で畑に行っても退屈だからラジオを持っていく。広報は一通り目を通すようにしている。町内放送も聞きにくい。
- あとは、生協のカタログが面倒くさい。見る商品は決まっている。カタログは見たら戻している。最初は袋も戻していたが、ごみを入れるのにいいのでもらうようにした。指定のものだけ町指定の袋に捨てている。

2　こうなったらいいなという理想の状態

- 集落に置くところがあれば便利だと思う。県道沿いにちょっとあると助かる。診療所に行くときはバスに乗るので、バスに乗るときに持っていける。ごみを置くところを用意してもらえると助かる。下だったら持っていける。
- もしくはある程度ごみがたまったら取りに来てくれる方がいい。多少なりともお金がかかってもその方がいい。頻度が増えた方がいい。
- 4-5 年したら人もいなくなるかもしれない。若い人が住んでいってくれるならそれはいいと思う。今も人が会いに来てくれたり、気に掛けてくれたりすると嬉しい。人口が減っていくのでどうなっていくのかと思う。人口が減ったら手入れする人がいなくなる。

2. 「ゼロ・ウェイスト」に向けて暮らしの中で取り組んでいること

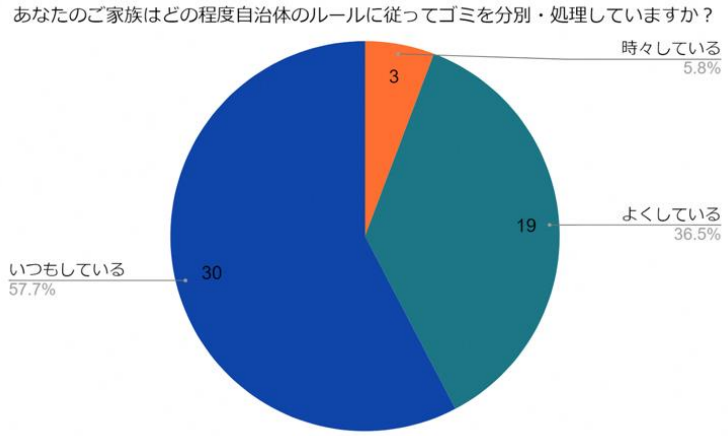
- ごみが出ないようなものを買おうにも**そもそも買いにいかない**。帰りに寄ってくれて、頼んだら買ってきてくれる人はいる。**ありがたいけど、ちょっと申し訳ない**。
- 外に行く交通手段があるといい。郵便局にも行けない。自分だけのときはバスで行く。本数が少ないので乗りたいときに来ないこともある。
- 普段は家で畑のことをしている。土曜日はデイサービスもあるので、出かけやすい。デイサービスで戻ってくるまでに帰らないといけない。楽しめなくなった。
- 上勝町の施策でやっていて、**環境問題のためという意識はない**。カードをつくっていたので商品券を何回かもらった。何か当たったときは嬉しかった。

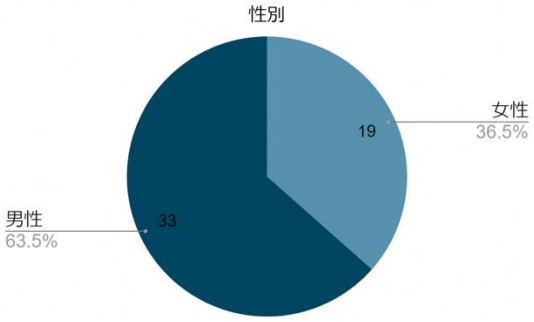
【町民アンケートの実施とその結果】

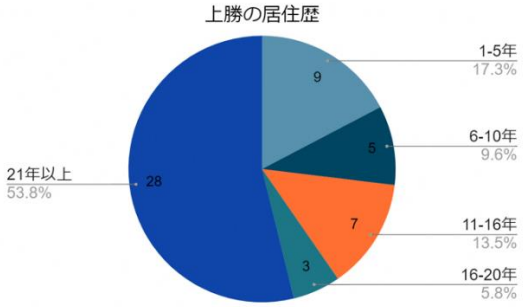
今回、京都大学大学院　地球環境学堂・地球環境学舎・三才学林の大学院生をサポートする形で実施した「上勝町におけるごみ分別のアンケート」の調査結果について、以下のように示す。

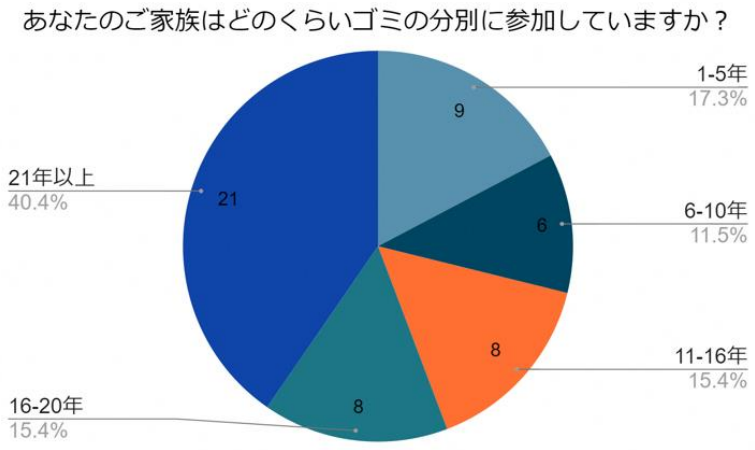
- 調査の目的：上勝町の持続可能な廃棄物管理に関する人々の行動とコミュニティへの参加を促進する社会的要因と決定要因を調査するためにデータを収集すること。
- 回答数： 52

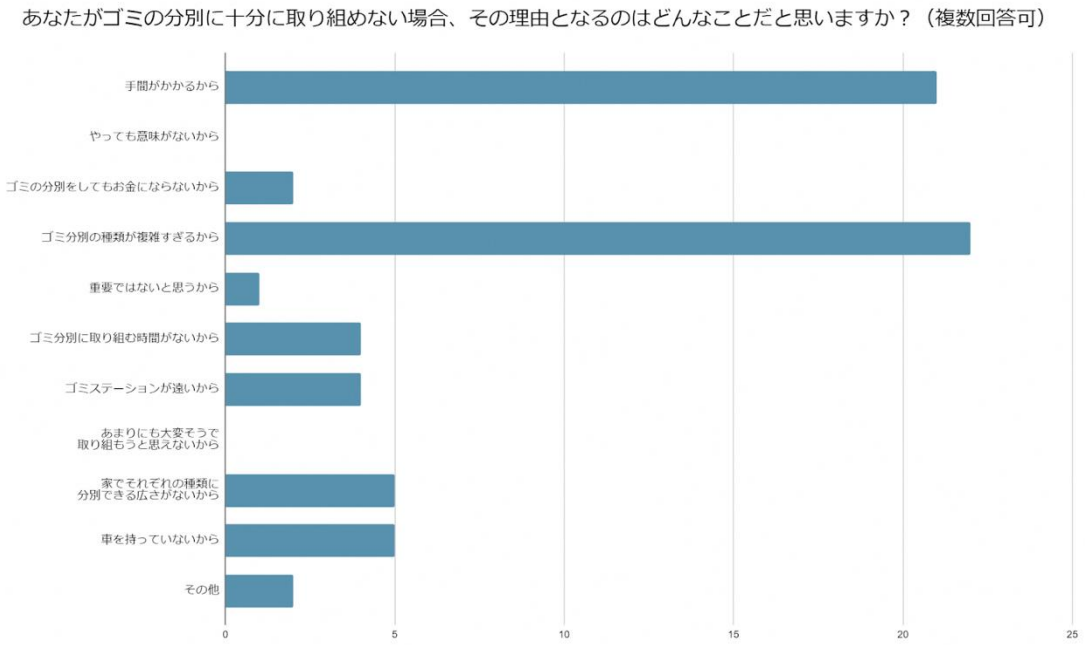
● アンケートの結果


あなたのご家族はどの程度自治体のルールに従ってゴミを分別・処理していますか？
時々している
5.8%
3
よくしている
36.5%
19
いつもしている
57.7%
30


性別
女性
36.5%
19
男性
63.5%
33


上勝の居住歴
1-5年
17.3%
9
6-10年
9.6%
5
11-16年
13.5%
7
16-20年
5.8%
3
21年以上
53.8%
28



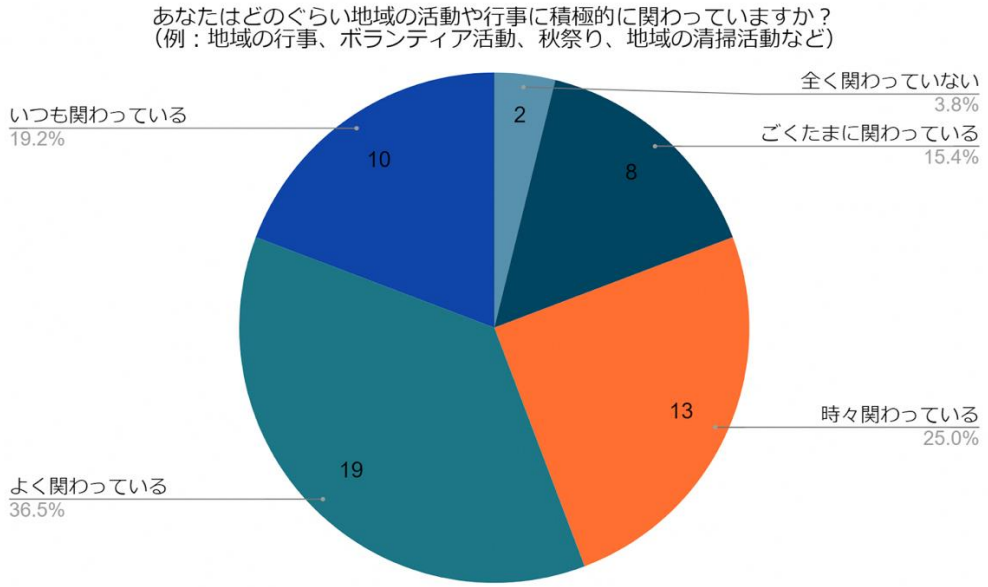


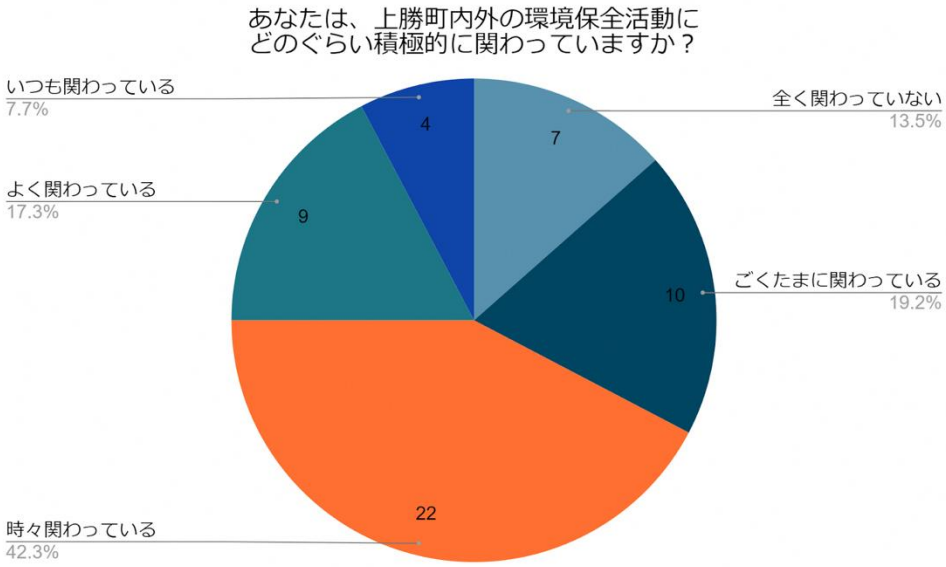
Q. あなたがごみの分別に取り組む動機や理由を教えてください

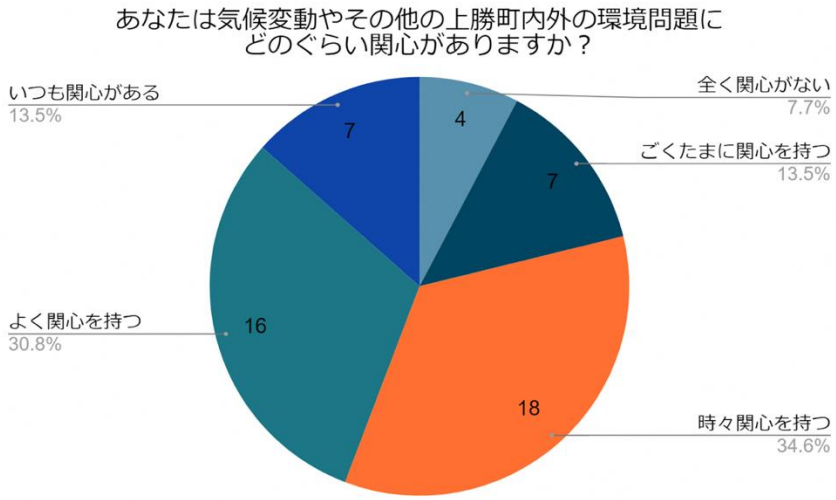
10代	• 町の人々が分別をやっているから。 • たまにおもうけどおもわないときがある • そう決まっているから • 環境が少しでも良くなればと思ってやっている
20代	• 上勝町で住んでいるから・環境問題として重要であると思うから。（必要性を理解する必要。）

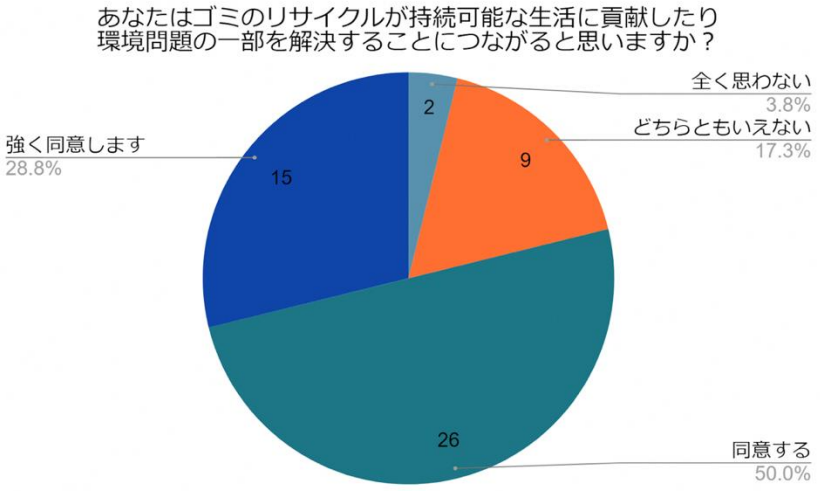
	• 環境変化 • 洗って乾かして分別すると家が清潔に保たれるから。 • ごみ分別をしない時（適当に捨てた時）の罪悪感から
30代	• あたり前だと思っている • 居住する自治体のルールだから • ルールだから。ポイントがもらえるから。 • こどもたちのために、より良い環境にしたいから • 上勝でビジネスをしているので、取り組む必要がある。子ども達の教育にとても良いと感じています。 • するべきだと思うから • ルールだから • 分別しないとゴミを捨てられないから
40代	• 取り組まないと、捨てれないから • 分別しないとごみを出せないから仕方なく • 子どものため • 分別した結果、地球上のどこかで役立っていることが理解できているから（乾電池とか） • できるだけマイクロプラスチックを出したくない。海洋ごみをへらしたい。温暖化を止めたい。 • ごみ分別をするという生活を試してみたかった。 • 大事なことだと思うから • 自分がどんなごみをどれくらい出しているかを知って、少しでも減らす工夫につなげることができるから。 • ルールだから
50代	• 決まり • 未来の環境を少しでも良くできれば（波及効果を含む)、悪くならないように自分ができることをやっていく。 • 町の政策であるから • ごみを分別して出すようになっているから • みんながやっているから • 子や孫など未来のため
60代	• 地球温暖化防止、地球環境保全にはごみを分別し、焼却を少なくする。

	• 分別してリサイクルで限りある資源を守っていく。持続可能な社会づくりには欠かせないものを考える。 • まちのルールだから従わないと住めない • 上勝町が世界的に有名なので名に恥じないように • 次の世代にきれいな地球をわたしてあげたい • 少しでも自然を守れたら良いと思います。 • 町がやり始めたから。あたり前になってきた。ちゃんと持ち込めば分別できて捨てられることはすばらしいと感じるから • 町の方針だから • 環境を良くする一助となっているため
70代	• 資源の有効活用と温暖化防止。物を大切にする意識をより高くもつこと • 時代の要請 • 家の整理・清掃ができるから。上勝のルールだから。
80代	• 環境を良くする • 整理せいとん、家の中が片付くので良い




あなたは、上勝町内外の環境保全活動に
どのぐらい積極的に関わっていますか？
いつも関わっている
7.7%
4
全く関わっていない
13.5%
7
よく関わっている
17.3%
9
ごくたまに関わっている
19.2%
10
22
時々関わっている
42.3%


あなたは気候変動やその他の上勝町内外の環境問題に
どのぐらい関心がありますか？
いつも関心がある
13.5%
7
全く関心がない
7.7%
4
ごくたまに関心を持つ
13.5%
7
よく関心を持つ
30.8%
16
18
時々関心を持つ
34.6%



（考察）

どの年代でも共通して「ルール」だからという理由でごみの分別に取り組む人が多いが、30 代以上の回答には「次世代のため」や「次の世代にきれいな地球を渡してあげたい」など、子や孫の世代を考えて自らのアクションをとっている人が多くなることがわかる。

その他、地域のボランティアや行事などには積極的に関わっている人の割合は全体の80.7%に上るが、環境保全活動に積極的に関わっている人は 67.3%に減少し、地域の草刈りなどのボランティア活動と、環境保全活動は関わっていないと認識されている。

「気候変動や上勝町外の環境問題への関心」は関心がある、よく関心があると答えた人は 44.3%で、自らが行う「ごみのリサイクルが持続可能な生活に貢献したり、環境問題の一部を解決することにつながると思うか」に強く同意する、同意すると答えた人は全体の78.8%と、世界全体の大きな問題への関心は比較的に低いものの、分別等リサイクルに参加する仕組みがあることで、少なからずそういった大きな問題への解決につながっていると考えている町民が多いことがわかる。

ごみの分別に積極的に取り組めない理由としては、「手間がかかる」「ごみ分別の種類が複雑すぎる」という回答が最も多く、分別数の多さが住民の負担になっていることが確認できる。

以上より、上勝町においてはごみの分別は自治体のルールとして従っているという人が多く、環境意識が高いわけではないことがわかる。しかしながら、分別という行為が環境問題の解決への参加に繋がっていると認識している人が多いことから、分別してリサイクルするという仕組みがあることで、意識が高い人でなくとも環境問題の解決に結果的に参加できているという状況があることがうかがえる。このことから、分別等町民が自ら関われる機会を継続する、もしくは新しい形で創出しつつ、負担軽減できる施策について検討が必要である。

1-3. 解決策のプロトタイピング

計画書では 1 年以内、5 年以内、10 年以内に取り組むことを記述しているが、以下の項目については、既に検討が開始されている。

【町民の現状・上勝町の姿勢】
町民のごみに関わる問題を解決するシステム、仕組みの構築

2022 年 3 月時点で、主に運搬支援の登録先住宅における分別補助の仕組みやサービスができないかについて、推進員会で現在検討中である。推進員が自宅での分別補助をするなど、令和 4 年度から具体的な解決策の試験的実施が行われる予定である。

【ゴミステーションの運営】
ゴミステーションにおける分別ルールや基準の明確化

素材メーカーや廃棄物処理業者との打ち合わせの中で、いくつか分別に関する矛盾点が浮かび上がってきている。例えば、ペットボトルのリサイクルについて、上勝町ではキャップとラベル、ボトルの 3 種類に分別しているが、素材メーカーの話によると、ペットボトルは元々リサイクルしやすいよう設計された製品であり、全て一体で回収することによって、リサイクル費用と売却益（キャップとラベル部分）はほぼイコールで、無理なくリサイクル工場がリサイクルできていたという。これが分別されることによって、処理費用がかかるボトル部分のみが回収されることになり、収支が会わず、結果として工場が閉鎖され、8 工場あったものが現在では 2 工場まで減っているという。
上勝町で実施している 45 分別が適切か否かについて追跡調査する必要性があり、これについては廃棄物処理業者の現状も聞き取りしながら、現在の上勝町の分別は適切なのかを検討しなくてはならない。
これについて、令和 4 年度は上勝町の分別の最終処分状況を追跡する予定である。そして本当に環境に良い状態でリサイクルされているのかを分析する。分析の結果として、分別をまとめられる部分があれば、その分分別数は減るので住民の負担は軽減できる。
住民の負担軽減と、上勝町が目指すこれからのゴールに合わせた指標で、再度上勝町の廃棄物システムの見直しを図らなければならない。

2　世界からの参画を促進するコミュニケーション

本章では、上勝に世界からのさまざまなステークホルダーの参画を促進するための「コミュニティ・マーケティング」について記述する。

2-1.　既存の情報発信方法の課題とコミュニティ・マーケティングの概要

既存の情報発信方法の課題として、マスマーケティングの限界が指摘されている。サービスを消費者が理解するための媒体として、ウェブサイトと SNS がテレビの 1.6 倍の影響力を持つようになってきた影響で、相対的にマスマーケティングの情報発信方法としての価値が低減している。これは、令和 3 年 3 月「ゼロ・ウェイストブランドを活用したローカルベンチャー及び企業連携促進業務　調査報告書」の「2.3 メディア分析調査」内で、ウェブサイトに掲載された英語記事において 1800 万円程度の価値、日本語記事において 6000 万～1 億円程度の価値があると指摘されたことからも示されていると考えられる。

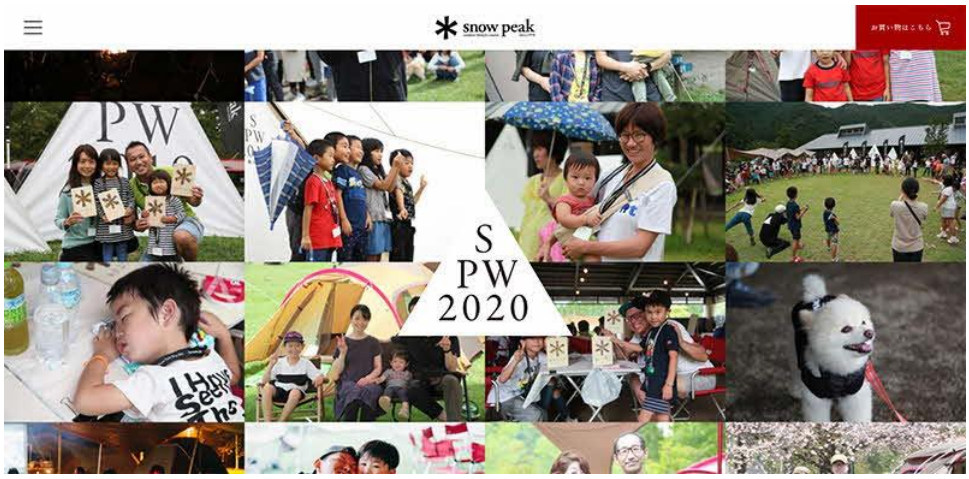
そのため、本コミュニケーション方法についてもマスマーケティングではなく、SNS を活用したマーケティング方法が適していると考える。SNS を活用したマーケティング手法が「コミュニティ・マーケティング」である。コミュニティ・マーケティングとは、「熱量と顧客ロイヤルティが高い層がコアファンとなり、形成されたコミュニティを通してスケールさせていく手法」である。

(参考)　https://mtame.jp/marketing_foundation/Community_marketing/
https://www.growthmanifesto.com/grow-business-using-community-marketing

2-2.　コミュニティ・マーケティングの事例紹介

本項では、上勝町がコミュニティ・マーケティングを推進する上で参考になる民間企業が実施している事例 3 件と、実際に参加してみたコミュニティ事例 2 件を紹介する。

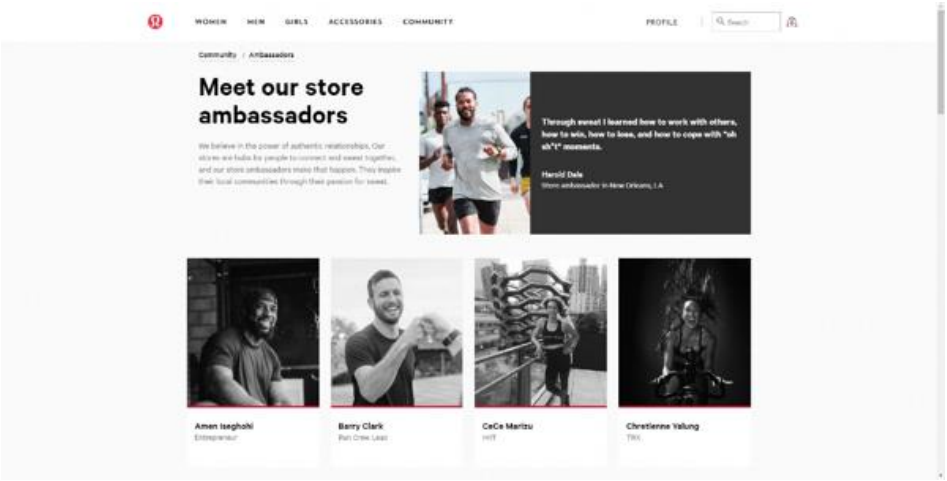
【コミュニティ・マーケティング事例：Snow Peak】



https://www.snowpeak.co.jp/

アウトドアブランドの Snow Peak は、オンラインとオフラインをそれぞれ活用して Snow Peak ブランドの愛好者のコミュニティを形成。特にワークショップやキャンプなどのオフラインイベントを実施し、体験を通じた口コミが SNS 上で広がり、オンラインのコミュニティも活発化する好循環が発生している。

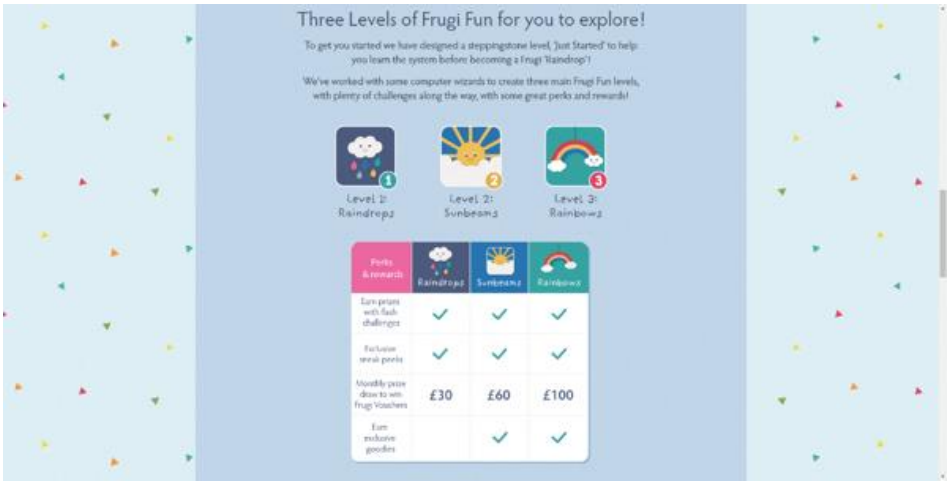
【コミュニティ・マーケティング事例：Lululemon】



https://www.lululemon.co.jp/

ファッション小売業の Lululemon は、ヨガインストラクターやフィットネススタジオのオーナーなど、lululemon を使ってくれるインフルエンサーを巻き込んだコミュニティ・マーケティングを展開している。具体的には、インフルエンサーによる、ヨガやフィットネスの無料講座を開催し、Lululemon のアイテムをレコメンドしてもらう。その体験を参加者は自分の知人や友人に話すことで、さらに参加者が増える、という好循環が発生している。

【コミュニティ・マーケティング事例：Frugi】



https://www.welovefrugi.com/

子供服ブランドの Frugi は、専用の Facebook グループとウェブページで家族のアイデアや写真を共有することで、熱心な親のコミュニティを構築。コミュニティへの参加者が自分の家族のストーリーを共有し、友人を紹介し、口コミをしたくなる設計にしている。

以上の事例から、オフライン・オンライン双方を活用している Snow Peak の事例が、上勝というリアルな場をベースにしたコミュニティ・マーケティングとは親和性が高い。そのため、上勝町におけるコミュニティ・マーケティングにおいても、ワークショップやイベントなどを上勝町でオフラインにて実施し、オフラインでの体験を通じてオンライン空間を活発化させる方向性が良いと考えられる。

さらに、実際に参加したコミュニティ・マーケティングから得られた知見を記述する。今回は、上勝町という地域であることを考慮し、参考にしやすい「地域密着・地方創生・地域への愛着心」などで繋がっているコミュニティと、ゼロ・ウェイストというテーマであることを考慮し、参考にしやすい「趣味」で繋がっているコミュニティ、二つのコミュニティに参加することとした。下記にて参加した二つのコミュニティの内容と特徴について順に記述する。

【特定の地域を盛り上げるコミュニティ】
このコミュニティは日本国内の特定の島と繋がれることをコンセプトとし、参加者は運営陣も含めて 103 人、参加費は月額 870 円という設定である。コミュニティの活動手段としては、Facebook グループを用いている。このコミュニティの内容としては、次のような 3 つのアピールポイントが記載されていた。

・特定の島の友達を作ることができること
特的の島を愛してやまない人と、島の地元の人がオンライン交流会や現地オフ会をきっかけに繋がることでき、これまで以上に島のことが好きになることができる。

・特定の島の情報交換ができること
特定の島に関する質問をすることができ、島の人々も現地情報を活発に投稿することができるので人の輪をつなげていくことができる。

・オンライン飲み会への参加ができること

実際に Facebook グループの投稿を見ていると、地域の鮮度の良いリアルな情報が共有されており、情報の内容は、天候などの自然にまつわるものから、食事処などのおすすめスポット、旬の特産品など種類豊富であった。

また、オンライン交流会には特定の島とつながりがある有名芸能人ゲストが登場するという企画もあり、その際にはコミュニティの参加者数は急増したとの投稿も見受けられた。
そして、コミュニティ参加者間での親近感のあるコミュニケーションが多数見られた。例えば、オンライン交流会の日程調整の際には、コミュニティ参加者の参加可能日程のアンケートが取られていた。特定の島に旅行予定の参加者が質問した際には、現地の人が詳しく丁寧な回答をしていた。

以上の内容から、このコミュニティには特定の島のことが好きな人々や興味のある人が参加している印象であり、非常にフラットで話しやすい環境が整えられているように感じられた。

【特定の趣味を共通項として集うコミュニティ】
このコミュニティは特定の趣味に興味関心がある人が集まることをコンセプトとし、参加者は運営陣も含めて 231 人、参加費は月額 1000 円という設定である。コミュニティの活動手段としては、Slack を用いている。このコミュニティの内容としては、次のような 6 つのアピールポイントが記載されていた。

・特定の趣味仲間に会うことができること
・特定の趣味を仕事とする関係者に企画を伝えられること
・特定の趣味を仕事とする関係者へ質問ができること
・特定の趣味が好きな同志と雑談ができること
・特定の趣味に関係する求人を知ることができること
・オンライン飲み会が開催されること

実際に Slack の投稿を見ていると、複数のチャンネルが用意されている中に、特定の趣味にまつわる企画募集がされ、運営陣から新しい企画に対する意見募集があるなど、コミュニティに入っていなければ中々遭遇することができないよう内容がたくさんあった。
また、自己紹介のチャンネルも用意されており、頻繁に更新されているため簡単にコミュニケーションが取れるような工夫がなされていた。
そして、雑談や質疑応答などのチャンネルもあるため、参加者がいつでも疑問に思ったことややりたいことを発信できるコミュニティ作りをしていること見受けられた。

以上の内容から、このコミュニティには特定の趣味を深めることやスキルアップの手段として参加している人が多い印象であり、特定の趣味に対して積極的かつ情熱を持って、フラットに意見交換ができる環境が整えられているように感じられた。
　二つのコミュニティに参加したことによって、2 つの知見が得られた。まず、「地方創生」

の文脈では「和気藹々と親近感を持ってコミュニケーションを取れること」が必要なことがわかった。二点目に、「特定の趣味」の文脈では「スキルアップや深掘りをして勉強できるような環境があること」が必要であることがわかった。このことから、この二つの要素の特色を組み合わせたコミュニティを作ることができれば、「地方創生」と「ゼロ・ウェイスト」という 2 つの特徴を持つ上勝のコミュニティ・マーケティングにおいて、最適なのではないか。「地方創生」と「ゼロ・ウェイスト」どちらの要素に重きをおくかによって、コミュニティの活動手段も検討する必要がある。和気藹々と親近感のあるコミュニケーションを取ることをメインにするのであれば、人々の間に普段の生活に馴染みがある Facebook などのアプリで画像付きの投稿をすることなどが望ましいと考えられる。しかし、スキルアップなど勉強できることをメインにするのであれば、ビジネスの現場で活用されることの多い Slack などのアプリを用いて、発信される情報が整理されていることが望ましいと考えられる。

上記の調査結果から、上勝町における「世界からの参画を促進するコミュニケーション」を検討する基本概念として、「コミュニティ・マーケティング」を採用することを提案する。理由としては、既存の情報発信方法の課題を解決することができるとともに、メリットとして、「①参加者からの直接的なフィードバックをもらうことができる。また、口コミが発生しやすい土壌を構築することができる」「②金銭コストが、他のマーケティング手法に比べてかからない」という点が存在するためである。ただ一方、デメリットとして、「参加者との関係構築を誤ると、ロイヤリティが下がる結果になる。また、関係構築にも時間がかかる」という点が挙げられる。このデメリット内における、関係構築への必要時間については、現時点で上勝町のゼロ・ウェイストな取り組みに関心を示しコミュニティの参加者のターゲットになり得る人々などが存在し、上勝町内で相互に関係構築を行なっているため、そのような既存の関係をベースにコミュニティを構築していくことが考えられる。参加者との関係構築のミスによるロイヤリティの低下については、運用担当者の選抜や育成などの対応を行うことで、発生確率を低減していく。

2-3. 上勝におけるコミュニティ・マーケティング戦略の詳細

上勝におけるコミュニティ・マーケティングの戦略の詳細を示す。What、Who、Where、When、Why、How の視点からそれぞれ記述する。

- What

「参加者に対して提供できるもの」「運営によって得られるもの」の 2 つの視点から記述する。

・ 参加者に対して提供できるもの

(1) 上勝に関わっていることでの箔づけにつながる

ゼロ・ウェイストの知識と実践の機会が得られ、コミュニティ参加者のゼロ・

ウェイストに対して取り組みを実践しているという箔づけを提供する。

(2) 一緒に作る、一緒に成長する
コミュニティ参加者で一緒に上勝の未来をつくっている、上勝と一緒に成長しているという参画・成長意識を提供する。

(3) 地元愛欲求を満たせる
自分の出身地以外の「第二の地元」として、上勝に関わり貢献できている実感を通じて地元愛欲求への充足感を提供する。

(4) 趣味趣向が近い仲間と新しい情報を獲得できる
コミュニティに参加しているメンバーとの関わりや新たな出会いを通じて、仲間と実践をベースにした情報を提供する。

・ 運営によって得られるもの

(1) コミュニティの参加者が動き相互に繋がることで参加者同士の創発が発生する

(2) コミュニティ参加者からの上勝に対する様々な意見や視点の獲得につながる

● Who

運営主体は合同会社 RDND、上勝町役場とする。また、参加者は大きく「コアメンバー」と「フォロワー」に分ける。コアメンバーとしての参加には「上勝に来たことがある」「SNS での発信力があるなど周囲への影響力が高い」「コミュニティから何かを得るより、与えたい気持ちが強い」という条件を満たす者とする。それ以外はフォロワーとする。

● Where

コミュニティを実践する場所は、オンラインとオフラインの双方である。それぞれについて以下に示す。

・オンライン

オンラインでのコミュニティは、参加者の関係性を構築し話をする場とする。構築場所は、使用用途・使用目的に応じてさまざまなツールが考えられる。以下に代表的なツールを記述する。

(1) Slack ：プロジェクト管理　https://slack.com/intl/ja-jp/

(2) Facebook グループ ：気軽な連絡　https://www.facebook.com/

(3) Miro ：掲示板の活用　https://miro.com/

(4) LINE ：気軽な連絡　https://line.me/ja/

(5) Zoom：月一の定例　https://zoom.us/

以上のツールの中で、今回は参加者同士の創発による新規プロジェクトの発生、国内外の参加者がいることなどを考慮し、町内でも情報共有ツールとして使われている「Facebook」や「Slack」をベースにコミュニティを構築することとする。Slack

をベースにしながら、オンラインミーティングが必要な際は「Zoom」を利用するなど、適宜各ツールを活用していく。

・ オフライン

オフラインでのコミュニティは、オンラインで構築した関係をさらに深めるための場として、上勝でのイベントの実施、および上勝以外でのゼロ・ウェイストとの親和性が高い島根県隠岐島や石見銀山などへの視察を行うことを通じて、他地域との繋がりを強化していくことも考えられる。

● When

コミュニティは、小規模のコンセプトでコミュニティを作り、改善と成長を経て、大規模に人を巻き込むコンセプトのコミュニティに拡大させていく。具体的には以下の流れで実施する。

Step1)小規模コミュニティを作り、プロトタイピングを実施

Step2)プロトタイピングの結果を活かし、コミュニティの基礎設計の内容を詰める

Step3)上勝コミュニティの作成・実働

● Why

コミュニティを構築、運営する理由は以下とする。

・町外（グローバル含む）に対して、上勝のことを知ってもらう

・実働をしてもらう人を集める

・町外の様々な人を上勝に取り込む

・現状はバラバラでやっている取り組みをプラットフォーム化する

● How

上記の What、Who、Where、When、Why に記載した内容を軸に、プロトタイピングをしながらコミュニティを構築していく。その上で、全体をまとめるコンセプトを、現状の課題と理想の状態から、以下のように定義した。

・ 現状課題：特定の個人が上勝町内の各々活動を繋げる役割を担っている

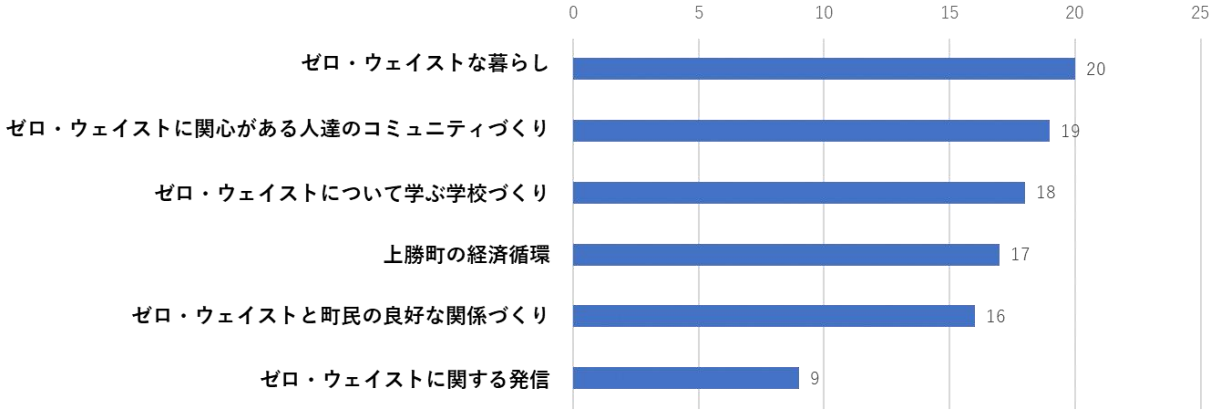
・ 理想状態：上勝町のプラットフォームを設計し、特定の個人を介さなくても皆が繋がれる場を作る

上記の現状と課題からコンセプトを「上勝町のプラットフォームを作り、人や活動を繋げる場となる」と設定する。

2-4. コミュニティづくりへの示唆（プロトタイピング）

これまで仕組みづくりの取り組みの一環として、複数回ワーショップを開催してきた。その際にゼロ・ウェイストタウン計画に関連する 6 つの項目のうち関心がある項目を複数選

択で回答するアンケートを実施した。ゼロ・ウェイストな暮らしに関するワークショップの参加者 17 名、経済循環プロジェクトのワークショップ参加者 6 名の合計 23 名の回答結果を下図で示す。そのうち、2 名は両方のワークショップに参加しており、1 名は自分が参加できない代わりに参加者を紹介した。



「ゼロ・ウェイストな暮らし」への関心が最も高く、町民インタビューやゼロ・ウェイストな暮らしに関する取り組みで提案したように「ゼロ・ウェイスト＝ごみゼロ」からゼロ・ウェイストを暮らし全体に広げる活動には関心を寄せる人が多いことが見込める。本章で提案したコミュニティ・マーケティングについても「コミュニティづくり」に関心がある人が「ゼロ・ウェイストな暮らし」に次いで多いことから、今後展開していくことへの可能性が示唆された。また、提示した 6 項目すべてに関心があると回答した参加者が 7 名存在し、カテゴリーにかかわらず「ゼロ・ウェイスト」に対する取り組みそのものへの関心が高い人が約 3 分の 1 を占めていたことが明らかになった。

また経済循環プロジェクトの一環で実施したワークショップにて提案された「ハイブリッド移住」の取り組みを進めるために Facebook グループがつくられた。参加者からの自発的な提案によって、継続的な交流が図られる事例となった。